

文京遺跡第8・9・11次調査

——文京遺跡における縄文時代遺跡の調査——

1990

愛媛大学法文学部考古学研究室

愛媛大学埋蔵文化財調査室



1 屋外炉1（東から）



2 屋外炉2・3（西から）

文京遺跡第8・9・11次調査

——文京遺跡における縄文時代遺跡の調査——

1990

愛媛大学法文学部考古学研究室
愛媛大学埋蔵文化財調査室

序

愛媛大学は大きく言って城北地区（大学本部と複数学部が所在する松山市文京町一帯）、樽味地区（松山市樽味町の農学部構内）と複数の散在付帯敷地の3パートに埋蔵文化財包蔵地を抱えている。本報告書は、その内、城北地区の第8次、第9次と第11次の調査結果をまとめたものである。

城北地区的遺跡は、これまで（1989年12月現在）文京遺跡として11次の発掘調査が行なわれてきた。この内、第5次までは松山市教育委員会が担当し、第1次発掘調査については、「文京遺跡」として同教育委員会より報告書が刊行されている。第6次より以降は愛媛大学法文学部考古学研究室と同大学埋蔵文化財調査室が行なってきたが、この報告書は、本大学が城北地区的遺跡調査について公にする最初のものである。

文京遺跡はこれまでの調査によって、弥生時代を中心に、古墳時代から中世に及ぶ複合遺跡として、すでに学界に周知のものとなっているが、この第8次・第9次・第11次の調査によって、初めて縄文時代の後・晩期に遡ることが明らかになった。

このことは、資料の出土量や出土状況が必ずしも十二分でないと言うことはあるものの、縄文時代後期における土地利用の問題や稻作農耕開始期前後のこの地方の実状を研究する上に、発想の転換を迫る嚆矢となった。本報告書は、如上の実状報告と共に、こうした諸問題解明の前提となる土地環境の復元にも、一部意を注いで作成した。

各位におかれでは、上記の意をおくみ取りの上、広く御利用賜わらんことを切望いたします。

1990年 1月16日

愛媛大学埋蔵文化財調査室長

下條信行

例　　言

- 1 本報告書は、愛媛大学法文学部考古学研究室が昭和61年度に実施した松山市文京町愛媛大学城北団地基幹整備事業に伴う文京遺跡第8次調査と、愛媛大学埋蔵文化財調査室が昭和62年度に実施した松山市文京町愛媛大学城北地区プール浄化装置増設予定地の文京遺跡第9次調査、さらに愛媛大学埋蔵文化財調査室が平成元年度に実施した松山市文京町愛媛大学法文学部講義棟身障者用昇降機取扱いに伴う文京遺跡第11次調査の報告書であり、愛媛大学埋蔵文化財調査報告IIにあたる。
- 2 城北キャンパスは、国土座標第4座標系 ($X = 93,000$, $Y = -66,000$) が ($X = 0$, $Y = 0$) となるように構内座標を設定した。
- 3 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方式にしたがって、井戸：S E, 土坑：S K のように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 4 遺物には、遺跡の調査を示すローマ数字と、調査ごとの通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通して表示を統一した。

I : 文京遺跡第8次調査

II : 文京遺跡第9次調査

III : 文京遺跡第11次調査

IV : 南海放送遺跡

(例 I 1 : 文京遺跡第8次調査出土遺物1番)

- 5 原則として、遺物の実測図は縮尺1/3、遺物の写真是約1/2に統一した。他の縮尺のものは、それぞれに縮尺を明記した。
- 6 注は各章ごとにまとめて章末に記載した。
- 7 遺構・遺物の実測と製図は、宮本一夫、宮崎直栄、梅木謙一、林 皆子、倉員伸明、越智真由美、山田由美子、山本昌弘、西岡早苗、檜垣良江がおこなった。遺物の撮影は宮本一夫が担当した。
- 8 本文は、下條信行、宮本一夫、梅木謙一（現、松山市立埋蔵文化財センター）が分担執筆した。執筆者名は各章の初めに記し、必要に応じて節末に示した。英文抄訳は愛媛大学法文学部ウイリアム・ルイス・パラード教授に校閲をお願いした。また、原稿の清書は佐伯美幸がおこなった。
- 9 編集は、下條信行の指導のもとに、宮本一夫がおこなった。

目 次

| | |
|-----------------------|----|
| 第1章 遺跡の立地と歴史的環境 | 1 |
| 第2章 文京遺跡第8次調査..... | 7 |
| 1 調査の経過..... | 7 |
| 2 層位..... | 8 |
| 3 遺構と遺物..... | 13 |
| (1) I 区..... | 13 |
| (2) II 区..... | 16 |
| (3) III 区..... | 17 |
| (4) IV 区..... | 20 |
| (5) V 区..... | 25 |
| 4 小結..... | 26 |
| 第3章 文京遺跡第9次調査..... | 29 |
| 1 調査の経過..... | 29 |
| 2 層位と遺構..... | 32 |
| 3 遺物..... | 34 |
| 4 小結..... | 36 |
| 第4章 文京遺跡第11次調査..... | 37 |
| 1 調査の経過..... | 37 |
| 2 層位..... | 40 |
| 3 遺構と遺物..... | 41 |
| (1) 中世～古墳時代..... | 41 |
| (2) 弥生時代..... | 41 |
| (3) 繩文時代..... | 44 |
| 4 小結..... | 62 |

| | |
|--------------------------|----|
| 第5章 文京遺跡第11次調査出土の縄文土器の検討 | 64 |
| 1 はじめに | 64 |
| 2 11次調査資料の分析 | 64 |
| 3 南海放送遺跡資料の分析 | 68 |
| 4 11次調査資料の位置づけ | 75 |
| 5 まとめ | 76 |
| 第6章 文京遺跡の地形復元 | 79 |
| 1 はじめに | 79 |
| 2 地形復元 | 80 |
| 3 遺跡の立地と地形 | 83 |
| 4 小結 | 85 |
| 第7章 文京遺跡第8・9・11次調査の成果と意義 | 86 |
| 英文抄訳 | 91 |

図版目次

卷首図版 文京遺跡第11次調査

- 1 屋外炉 1 (東から)
- 2 屋外炉 2・3 (西から)
- 1 文京遺跡第8次調査
 - 1 理学部遠景 (西から)
 - 2 II区全景 (北から)
- 2 文京遺跡第8次調査
 - 1 III区全景 (東から)
 - 2 IV区全景 (南から)
- 3 文京遺跡第8次調査
 - 1 II区東壁 (西から)
 - 2 IV区第5層出土状況 (南から)
- 4 文京遺跡第8次調査
 - 1 土坑SK1 (北から)
 - 2 土坑SK3 (西から)
- 5 文京遺跡第8次調査
 - 1 土坑SK4 (南東から)
 - 2 土坑SK4 (北西から)
- 6 文京遺跡第8次調査
 - 1 流路SR4 (南から)
 - 2 溝SD1 (南から)
- 7 文京遺跡第8次調査
 - 1 第4層出土土器・石器
 - 2 第4層出土土器・石器 内面
- 8 文京遺跡第8次調査
 - 1 SP206・SR1・SR3・SK13・第3層下部出土遺物
 - 2 SP206・SR1・SR3・SK13・第3層下部出土遺物内面
- 9 文京遺跡第8次調査
 - 1 SK1・SK2・SK3・SK14・SR3・第3層下部・擾乱出土遺物
 - 2 SK1・SK2・SK3・SK14・SR3・第3層下部・擾乱出土遺物内面
- 10 文京遺跡第9次調査
 - 1 調査区位置遠景 (南から)
 - 2 溝SD1 (西から)
- 11 文京遺跡第9次調査
暗茶褐色土上面検出溝群 (西から)

- 12 文京遺跡第9次調査
1 調査区西壁の層位（東から） 2 調査区北壁の層位（南から）
- 13 文京遺跡第9次調査
1 黄褐色粘質土出土遺物 2 黄褐色粘質土出土遺物内面
- 14 文京遺跡第11次調査
1 調査前の風景（北から） 2 弥生時代遺構（南から）
- 15 文京遺跡第11次調査
1 土坑SK3（南から） 2 旧河川肩部（西北から）
- 16 文京遺跡第11次調査
1 調査区西壁の層位（東から） 2 調査区北壁の層位（南から）
- 17 文京遺跡第11次調査
SK3・SP10・暗茶褐色土・赤褐色土出土遺物
- 18 文京遺跡第11次調査
1 第4面縄文土器出土状況（東から） 2 第4面縄文土器出土状況（南から）
- 19 文京遺跡第11次調査
1 第5面縄文土器出土状況（南から） 2 第6面縄文土器出土状況（南から）
- 20 文京遺跡第11次調査
1 第7面縄文土器出土状況（南西から） 2 第7面縄文土器出土状況（南から）
- 21 文京遺跡第11次調査
1 第8面縄文土器出土状況（南西から） 2 第9面縄文土器出土状況（南西から）
- 22 文京遺跡第11次調査
1 有文土器の分布 2 粗製深鉢の分布
- 23 文京遺跡第11次調査
1 有文深鉢A・B・D・E類 2 有文深鉢A・B・D・E類内面
- 24 文京遺跡第11次調査
1 有文深鉢C類 2 有文深鉢a類、有文鉢b類、浅鉢
- 25 文京遺跡第11次調査
1 粗製深鉢Ia・Ib類 2 粗製深鉢Ic・Id類
- 26 文京遺跡第11次調査
1 粗製深鉢Id・II・III類 2 粗製深鉢III類

- 27 文京遺跡第11次調査
 1 粗製深鉢IV類 2 粗製深鉢IV類
- 28 文京遺跡第11次調査
 1 粗製深鉢IV・V類 2 粗製深鉢V類
- 29 文京遺跡第11次調査
 磨製石斧, 磨石, 石皿
- 30 南海放送遺跡
 1 1・2類 2 3類
- 31 南海放送遺跡
 1 3・4・5類 2 6・7・8・9・10類
- 32 南海放送遺跡
 1 11・12・13・14・15類 2 11・12・13・14・15類内面

挿図目次

| | |
|---|-------|
| 遺跡の立地と歴史的環境 | |
| 図1 文京遺跡周辺の主要遺跡分布図 | 2 |
| 図2 愛媛大学城北キャンパスの 地区割と調査地点 | 4 |
| 文京遺跡第8次調査 | |
| 図3 調査区の位置と地区割 | 8 |
| 図4 I区南壁の層位 | 9 |
| 図5 II区東壁の層位 | 9 |
| 図6 III区西壁の層位 | 10・11 |
| 図7 IV区北壁の層位 | 10・11 |
| 図8 V区南壁の層位 | 12 |
| 図9 土坑SK1・SK2・SK3 | 12 |
| 図10 SK1・SK2・SK3出土遺物 | 13 |
| 図11 土坑SK4・SK5・SK6・ SK7, 流路SR1 | 14 |
| 図12 SK4・SR1・第3層下部・ 第4層・第2層・攪乱出土遺物 | 15 |
| 図13 土坑SK8・SK9・SK10・ SK11 | 17 |
| 図14 土坑SK12, 流路SR2 | 17 |
| 図15 土坑SK13, 流路SR3, 柱穴SP202 | 18・19 |
| 図16 流路SR4, 溝SD1 | 18・19 |
| 図17 流路SR5, 溝SD2 | 18・19 |
| 図18 流路SR6 | 20 |
| 図19 流路SR3・土坑SK13 出土遺物 | 21 |
| 図20 SP206・第4層出土遺物 | 22 |
| 図21 第4層・第2層・攪乱出土遺物 | 23 |
| 図22 土坑SK14 | 24 |
| 図23 SK14出土遺物 | 25 |
| 図24 流路SR1・SR2・SR3・SR4・ SR5・SR6, 溝SD1・SD2 | 26 |
| 文京遺跡第9次調査 | |
| 図25 調査区の位置 | 29 |
| 図26 調査区西壁の層位 | 30 |
| 図27 調査区北壁の層位 | 30・31 |
| 図28 溝SD1 | 32 |
| 図29 暗茶褐色土上面検出溝群 | 33 |
| 図30 黄褐色粘質土出土遺物 | 35 |
| 図31 表土・褐色粘質土出土遺物 | 36 |
| 文京遺跡第11次調査 | |
| 図32 調査区の位置 | 37 |
| 図33 調査区西壁の層位 | 38 |
| 図34 調査区北壁の層位 | 38・39 |
| 図35 調査区東壁の層位 | 40 |
| 図36 溝SD1・SD2 | 41 |
| 図37 弥生時代第1次遺構 | 42 |
| 図38 弥生時代第2次遺構 | 43 |
| 図39 土坑SK3・柱穴SP10・ 暗茶褐色土出土遺物 | 44 |
| 図40 SK3・赤褐色土出土遺物 | 45 |
| 図41 屋外炉1・2・3 | 45 |
| 図42 屋外炉2・3 | 46 |
| 図43 旧河道肩部 | 46 |
| 図44 縄文土器・石器の分布 | 47 |

| | |
|-------------------------|---------------------------|
| 図45 有文深鉢A・B・C・D・E類, | 図59 文京遺跡第11次調査 |
| 有文鉢a類.....48 | 資料組成図.....66 |
| 図46 有文鉢b類.....49 | 図60 平城II式から平城I式への |
| 図47 粗製深鉢I a・I b類.....50 | 変化過程.....67 |
| 図48 粗製深鉢I c・I d類.....51 | 図61 南海放送遺跡1類.....68 |
| 図49 粗製深鉢II類.....52 | 図62 南海放送遺跡2類.....69 |
| 図50 粗製深鉢III類.....53 | 図63 南海放送遺跡3・4・5類.....70 |
| 図51 粗製深鉢IV類.....54 | 図64 南海放送遺跡6・7・8類.....71 |
| 図52 粗製深鉢V類.....55 | 図65 南海放送遺跡9・10類.....72 |
| 図53 粗製深鉢VI類.....56 | 図66 南海放送遺跡11・12・ |
| 図54 浅鉢.....57 | 13・14・15類.....73 |
| 図55 底部.....58 | 図67 南海放送遺跡底部.....74 |
| 図56 磨石, 磨製石斧.....60 | 文京遺跡の地形復元 |
| 図57 石皿.....61 | 図68 道後城北弥生遺跡の分布.....79 |
| 文京遺跡第11次調査出土の | 図69 道後城北キャンパスの現地地形.....81 |
| 縄文土器の検討 | 図70 黄褐色粘質土上面の地形.....83 |
| 図58 有文深鉢C類, 有文鉢a・b類 | 図71 黄褐色粘質土上面の地形復元.....84 |
| 口縁部文様模式図.....65 | |

表 目 次

| |
|-----------------------|
| 表1 文京遺跡のおもな調査.....5 |
| 表2 11次調査資料土器組成.....59 |
| 表3 地域別編年の併行関係.....76 |

第1章 遺構の立地と歴史的環境

宮本一夫

文京遺跡は、高鍋山系の西南端から延びる分岐山塊の御幸寺山の南麓に立地し、御幸寺山と城山（勝山）との間に位置している（図1）。ここが愛媛大学城北キャンパスにあたっている。愛媛大学城北キャンパスは全面が遺跡地と認定され、松山市文京町に所在するところから文京遺跡と呼称されている。ところが、遺跡全体からみれば、この遺跡は西は松山大学・松山北高校・南海放送、そして東は日赤病院・東中学校から県民文化会館を含む道後今市に致るまで続き、さらに東に広がる可能性も存在する。従って、これら遺跡群は「城北遺跡」あるいは「道後遺跡」と名称されるべきものである。そこで、愛媛大学城北キャンパスに存在する遺跡を中心に狹義に文京遺跡と呼称しておきたい。

ところで文京遺跡周辺では、南海放送遺跡から縄文後期と縄文晚期後葉の包含層が層位的に検出された以外、まとまって縄文土器が出土した遺跡はない。弥生時代に入ると、前期前半に文京遺跡内で遺構がみられるものの、周辺では顕著な前期前半の遺跡は認められない。前期後半から中期初頭にかけて、道後今市⁽³⁾・道後姫塚⁽⁴⁾・土居塚⁽⁵⁾など道後周辺の文京遺跡より扇状地の高位部に包含層が認められている。続いて中期中葉の遺物を大量に包含了層が検出されたのは、祝谷六丁場である。すなわち、より扇状地の高位部ないし丘陵部に遺跡の中心が移っている。祝谷六丁場は後期まで存続する遺跡ではあるが、中期末から後期前半の遺跡の中心地は文京遺跡に移っている。それも法文学部教棟（第3次調査）以西に中心がみられる。さらに後期後半に致ると、松山北高など文京遺跡より西側に遺跡の中心が移っている。これはこの時期からカキツバタ遺跡や若草町遺跡で遺跡が開始されるとの呼応している。すなわち、沖積地の広がりに伴い、より大きな可耕地を求めて集落の中心は、低位部へ移っているといふことがあろう。古墳時代の集落はこのような扇状地の広がりに呼応して、低位部へ移動したものといえる。また、弥生時代の遺物として注目される平形銅劍は、道後公園で3本、道後今市北で10本、道後櫛又で8本、祝谷六丁場で1本出土しており、文京遺跡より東側の扇状地の上部で発見されている。古墳時代の集落の中心は文京遺跡より西側にあるものの、古墳群は北側の丘陵部に立地する。御幸寺山古墳群、桜谷古墳群、石手寺古墳群である。歴史時代に入ると、遺跡の中心は道後周辺に認められる。白鳳期の瓦が出土した湯ノ町廃寺や内代廃寺である。さらに中世では、14世紀～16世紀、伊予の守護大名であった河野氏の居城である湯築城が存在し、周辺の道後今

遺跡の立地と歴史的環境



- 1 文京8次
- 2 文京9次
- 3 文京11次
- 4 南海放送
- 5 松山北高
- 6 日赤病院
- 7 道後今市
- 8 土居窯
- 9 祝谷六丁場
- 10 土居段
- 11 道後鷺谷
- 12 道後姫塚
- 13 潛築城
- 14 特田
- 15 東雲
- 16 若草町
- 17 カキツバタ
- 18 槟味立添
- 19 檀味

図1 文京遺跡周辺の主要遺跡分布図 縮尺1/25000

市でも中世の遺構・遺物が出土している。

さて、文京遺跡から初めて遺物が発見されたのは、現在の工学部本館（第1号館）建設前に、この地に付属小学校校舎が仮設された1947年（昭和22年）以降のことである。この付属小学校校庭からは弥生土器や石包丁などが出土した。その後、付属小学校仮設地に工

遺跡の立地と歴史的環境

学部本館が建設されるに先立ち1962年（昭和37年），工学部の故松岡文一氏によって簡単な調査がなされている。しかしながら，本格的な発掘調査が開始されたのは，松山市教育委員会による1975年（昭和50年）の工学部2号館の調査からである。この調査を第1次調査として，1989年（平成元年）に致るまで11次の調査が続けられている。第1次～第5次は松山市教育委員会，第6次～第8次は愛媛大学法文学部考古学研究室，第9次～第11次は愛媛大学埋蔵文化財調査室が調査主体となって調査がなされている（図2，表1）。

1975年の文京遺跡第1次調査（工学部5階教棟）では，円形住居址（直径4.5～8m）3棟，楕円形住居址2棟，隅丸方形住居址3棟，形状不明住居址2棟が発見され，他に掘立柱建物跡や土坑が検出された。⁽¹⁾ 1980年に実行なわれた文京遺跡第2次調査（資源工学教棟）では，円形住居址（直径4～6m）2棟，隅丸方形住居址3棟，方形竪穴状遺構（1.7×2.3m前後），掘立柱建物跡10棟前後，土坑などが検出されている。⁽²⁾ 1982年の法文学部8階教棟建設地で実行なれた文京遺跡第3次調査では，円形住居址（直径6～9m）7棟，方形竪穴状遺構（1.8×3m）8基，方形周溝墓1基，土坑などが発見されている。⁽³⁾ 同じく1982年に実施された文京遺跡第4次調査は，理学部に南接する東中学校構内で行なわれた。⁽⁴⁾ 弥生前期前半の竪穴住居址1棟を含む円形住居址が3棟，掘立柱建物跡，土坑などが検出された。工学部実習工場南側部分で行なわれた1984年の第5次調査では，隅丸方形住居址が3棟発見されている。以上が松山市教育委員会によって行なわれた発掘調査である。遺構の年代は，第4次調査の弥生前期前半の例を除けば，遺構のほとんどが弥生中期後半～後期に限られている。

1985年，愛媛大学法文学部に考古学研究室が開設されて後，第6次～第8次の調査は考古学研究室によってなされている。⁽⁵⁾ 1986年の第6次調査は，工学部周辺と大学生協建物西側で行われた。工学部周辺では弥生後期の土器群が検出されている。また大学生協付近のトレンチ調査では，流路状の遺構が検出されているものの，時期は明確ではない。第7次調査は，法文学部8階教棟増設に伴うもので，1987年に実行された。弥生中期後半～後期前半の竪穴住居址が4棟，さらに掘立柱建物跡，溝3基，祭祀柱穴2基が認められている。同じく1987年に実行された理学部構内の第8次調査は，縄文後期から中世までの包含層が確認されており，その成果は第2章に詳述される。

1987年6月に愛媛大学に埋蔵文化財調査室設置されてからは，第9次から第11次調査までを愛媛大学埋蔵文化財調査室が担当してきた。1988年の第9次調査は，城北キャンパス北東隅のプールと体育館との中間地点で行われた。縄文後期～晩期前葉の包含層が確認さ



図2 愛媛大学城北キャンパスの地区割と調査地点

れどおり、詳細は第3章に記述されている。同じく1988年に実施された第10次調査は、第2次調査の海洋工学科教棟に隣接した西隣の情報工学科教棟建設予定地^{註2}でなされた。ここからは、中世の掘立柱建物跡1基、古墳時代後期の溝2基が発見され、弥生時代より新しい遺構が存在することが確かとなった。そして改めて本遺跡が縄文から中世までの複合遺跡であることが認められた。また弥生時代の遺構としては、円形住居址2棟、方形住居址2棟、掘立柱建物跡2棟、円形周溝状遺構1基、土坑2基、溝などが検出されている。遺構の年代は弥生中期～後期までのものである。また弥生時代の包含層からは、舶載鏡の破鏡が出土し注目を集めた。統いて1989年には、法文学部2号館北側の身障者用昇高機取設に伴って発掘調査が実施された。第11次調査である。この調査では屋外炉3基が検出され、文京遺跡では初めて縄文後期の遺構が明らかとなった。従って、従来流れ込みによって縄文土器が溜ったものと判断された縄文時代の包含層が、実は相当安定した地形面をもつ可能性が高くなかった。この調査の内容については、第4章で詳述される。

遺跡の立地と歴史的環境

| 調査 | 地 点 | 調査主体 | 担当者 | 面積 (m ²) | 年 月 | 遺 構 | 遺 物 |
|-----|------------------|----------------|----------|-------------------------|------------------|----------------------|--------------------|
| 1次 | 工学部5階教棟 | 松山市教育委員会 | 森・大山・西尾 | 750 | 1975年8月 | 竪穴住居・溝・土坑ほか | 弥生土器 |
| 2次 | 工学部海洋工学科教棟 | 松山市教育委員会 | 西尾・池田 | 950 | 1980年7月～9月 | 竪穴住居・竪立柱建物・溝ほか | 弥生土器・須恵器 |
| 3次 | 法文学部8階教棟 | 松山市教育委員会 | 西尾・池田・栗田 | 800 | 1982年1月～3月 | 竪穴住居・方形周溝状遺構ほか | 弥生土器 |
| 4次 | 市立東中学校 | 松山市教育委員会 | 西尾・池田・松村 | 1347 | 1982年6月 | 竪穴住居・土坑ほか | 弥生土器 |
| 5次 | 工学部実習工場南 | 松山市教育委員会 | 栗田 | 160 | 1984年11月 | 竪穴住居ほか | 弥生土器 |
| 6次 | 工学部周辺・生協前 | 愛媛大学法文学部考古学研究室 | 下條・福木 | 99 | 1986年1月 | ピット・小河川 | 弥生土器 |
| 7次 | 法文学部8階教棟 | 愛媛大学法文学部考古学研究室 | 下條・田崎ほか | 142 | 1986年8月～10月 | 竪穴住居・竪立柱建物ほか | 弥生土器 |
| 8次 | 理学部 | 愛媛大学法文学部考古学研究室 | 下條・十島ほか | 854 | 1986年11月～1987年2月 | 土坑・ピット・小河川 | 縄文土器・弥生土器・須恵器・中世土器 |
| 9次 | ブルーレイ净化装置 | 愛媛大学埋蔵文化財調査室 | 宮本 | 62 | 1988年1月 | | 縄文土器・弥生土器・須恵器・中世土器 |
| 10次 | 工学部情報工学科 | 愛媛大学埋蔵文化財調査室 | 宮本 | 1075 | 1988年9月～1989年3月 | 竪穴住居・竪立柱建物・円形周溝状遺構ほか | 弥生土器・須恵器・中世土器 |
| 11次 | 法文学部講義棟南隣用 路盤 | 愛媛大学埋蔵文化財調査室 | 宮本 | 85 | 1989年8月 | 土坑・ピット・屋外が | 縄文土器・弥生土器・須恵器 |

表1 文京遺跡のおもな調査

以上のように、從来弥生時代の拠点集落として有名であった文京遺跡は、実は縄文後期から中世に至る複合遺跡であることが明らかとなったのである。そこで本報告書では焦点を絞り、弥生時代の集落環境が整う以前の情報を、現在までの調査結果をもとに復元していくことにしたい。すなわち縄文後・晚期の文京遺跡の古地形や集落環境を明らかにしていくのである。従って必然的に縄文後・晚期の包含層を検出した第8・9・11次調査の成果を明らかにし、検討することになるのである。複題に「文京遺跡における縄文時代遺跡

遺跡の立地と歴史的環境

の調査」とした所以がここにある。

なお、図2に示すように、城北キャンパスは、国土座標第4座標系（X=93000, Y=-66000）が（X=0, Y=0）となるように構内座標を設定した。

(注)

- 1 下條信行「近年の文京遺跡調査の成果と課題」『社会科』学研究』第13号 1987年
- 2 西尾幸則「道後城北RNB遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』昭和62~63年度 1989年
- 3 愛媛県埋蔵文化財調査センター『道後今市遺跡』1985年
- 4 愛媛県教育委員会『道後姫塚遺跡』1979年
- 5 岡本健児「愛媛県土居塚遺跡」『日本農耕文化の生成』1960年
- 6 宮崎泰好「祝谷六丁場遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』昭和62~63年度 1989年
- 7 愛媛大学・松山市教育委員会『文京遺跡』1976年
- 8 西尾幸則「文京遺跡」「愛媛県史 資料編 考古」1986年
- 9 西尾幸則「文京遺跡」『松山市資料集 第2巻 考古2・古代～中世・近世・文化編』1987年
- 10 前掲注8文献
- 11 古代学協会四国支部『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』(シンポジウム資料) 1988年
- 12 愛媛大学埋蔵文化財調査室『愛媛大学埋蔵文化財調査室ニュース3』1989年

第2章 文京遺跡第8次調査

下條信行 宮本一夫 梅木謙一

1 調査の経過

| | |
|-------|--|
| 遺跡名 | 道後城北遺跡文京地区第8次調査（愛媛大学理学部） |
| 所在地 | 愛媛県松山市文京町3 |
| 調査期間 | 1986（昭和61）年11月25日～1987年2月18日 |
| 調査組織 | 調査指導 下條 信行（愛媛大学法文学部教授） 調査主任 十亀 幸雄（日本考古学協会員） 調査補助員 梅木 謙一（法文学部学生・現松山市立埋蔵文化財センター） 林 哲子（法文学部学生・現都城市教育委員会） |
| 調査の起因 | 愛媛大学城北団地基幹整備事業（理学部雨水管・実験排水管・污水管の新設・改修） |
| 調査面積 | 約854m ² |

この年愛媛大学は、2ヶ所の発掘を必要としていた。法文学部1号館の増築地（第7次調査）と本地域である。当時愛媛大学には、まだ埋蔵文化財調査室が設立されていなかつたために、調査体制の組織化をめぐって大学事務当局と愛媛大学考古学研究室との間で苦難の協議が続いた。その結果、当研究室が前面的に引き受け、両遺跡の発掘にそれぞれ学外の研究者に調査主任として加わっていただくという、苦肉の調査体制で発掘を行った。しかし、こうした無理な調査体制での発掘は、調査後の整理を遅滞させ、今に至るも荷物として残るなど多くの問題を提起した。そうした中で、今回第8次調査の報告書が刊行できたのは喜ばしいことである。

今次調査地は、かつて敷地内温室付近から弥生前期の壺が採集されたことがあることと、南接する松山市立東中学校で弥生前期の住居址が発掘されていることから、当地方の最古の弥生遺跡の出土が予想され、これの解明を課題の一つにすえた。また発掘区が東西に走る扇状地の北半から沖積地にあたるので、これの地層的解明も課題と考えられた。

1986年7月9日に試掘を行なったところ、表土下に20～30cmの厚さで包含層が出土し、本調査の必要が確認された。本調査区の調査成果は以下の通りである。

（下條信行）

2 層位

本調査地の基本層序は、表土（第1層）、赤褐色土（第2層）、暗茶褐色土（第3層）、黄褐色粘質土（第4層）、灰色砂礫（第5層）である。第1層は、近現代の造成工事による客土で地表下厚さ40~90cmを測る。第2層は、厚さ5~25cmの堆積で古墳時代～中世の遺物を包含する。第3層は、厚さ5~50cmの堆積で縄文時代晚期～弥生時代の遺物を包含する。この層は分層が可能な調査地点もみられる。第4層は厚さ45~100cmの堆積で、縄文時代後期・晚期の遺物を包含する。最下層の第5層は地点により様々な状況がみられる。微砂だけが堆積する地点もあれば、幼児大の礫が5.0×1.8m範囲で盛りあがり人偽的集石のように堆積している地点も存在する（図版3-2）。この層の礫は、花崗岩・砂岩等からなる。松山平野東部には石手川と祝谷川の2つの河川があるが、砂岩は石手川流域に分布が限られており、第5層は旧石手川によって形成されたものと判断される。

遺構は、主に第3層上面及び第4層上面で確認した。第3層上面検出の遺構は古墳時代～中世の、第3層中および第4層上面検出の遺構は縄文時代晚期～弥生時代のものである。

なお、調査区はトレンチ状に細長いため、便宜上、I～V区に分けて調査した（図3）。

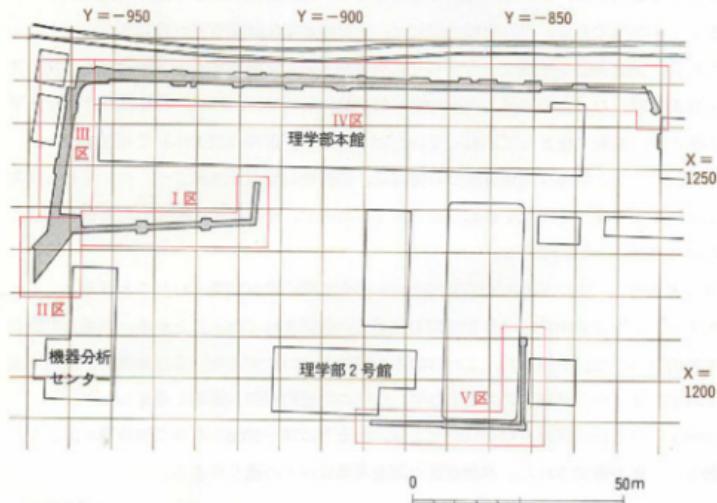


図3 調査区の位置と地区割（斜線部分調査地点）縮尺3/4000

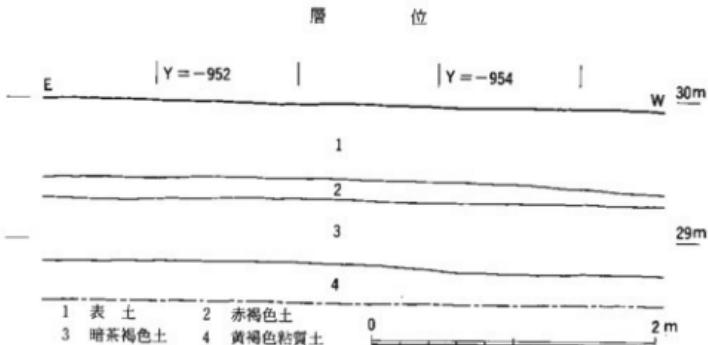


図4 I区南壁の層位 縮尺1/40

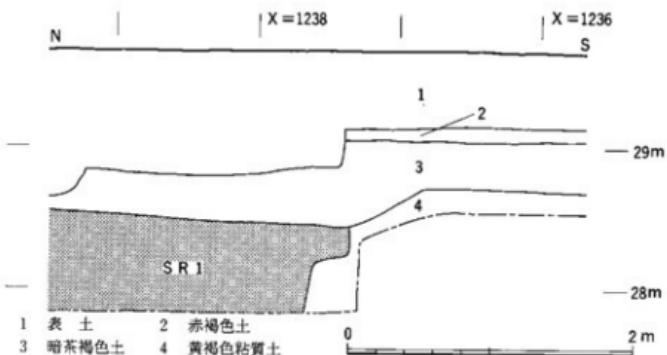


図5 II区東壁の層位 縮尺1/40

以下、調査区ごとの層位関係を叙述したい。

I区（工学部本館南側地、図4）第1層は厚さ45～60cmを測る。第2層は厚さ10～25cmの堆積で、東側では上部厚さ10cmのところに花崗岩の風化土を多く含む。第3層は厚さ20～45cmの堆積で、上部厚さ10～20cmに酸化鉄・花崗岩の風化土を多く含む。第4層は厚さ45cmの堆積で、第5層は砂層である。

II区（工学部正門東側地、図5、図版3-1）・III区（工学部本館西側地、図6）第1層は厚さ55～90cmを測る。第2層は削平が著しく厚さ僅か10cm程で、南半部では完全に除去されていた。第3層は厚さ10～50cmの堆積で、上部の厚さ10cmはやや明るく酸化鉄が多く、

文京遺跡第8次調査

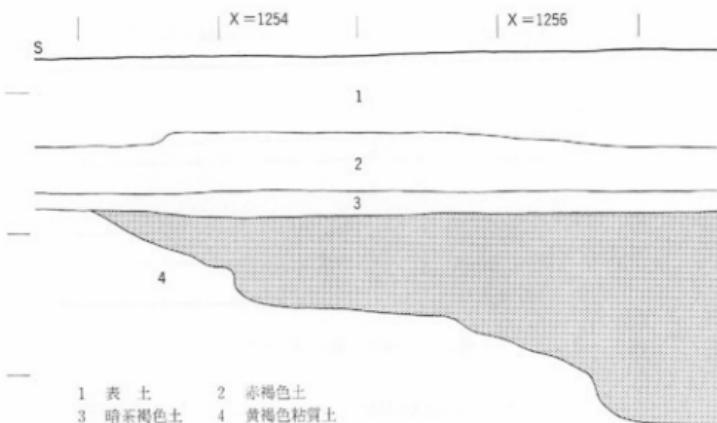


図6 III区西壁の層位 縮尺1/40

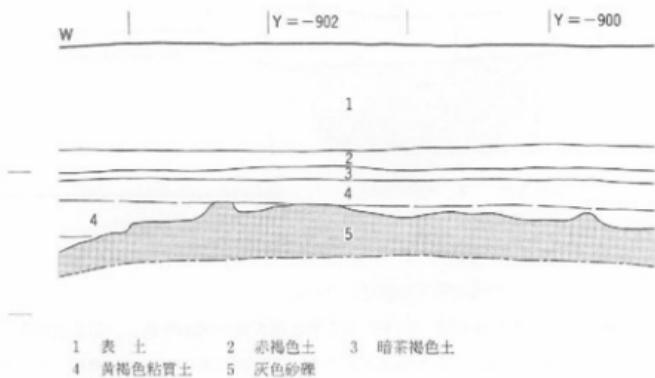


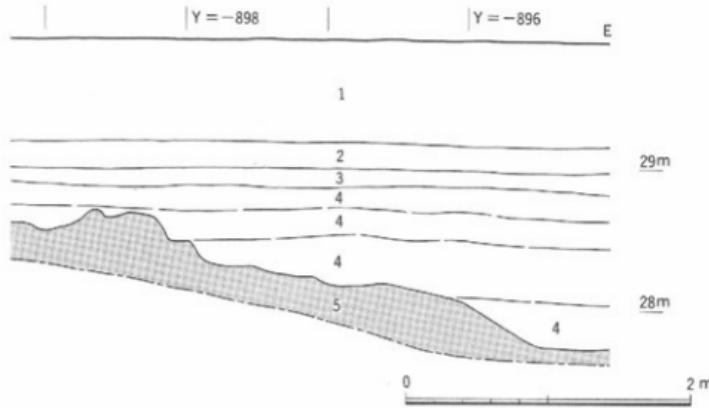
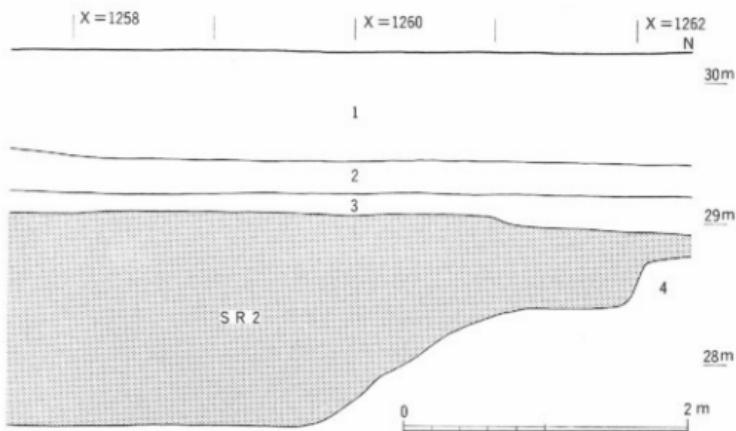
図7 IV区北壁の層位 縮尺1/40

下部の厚さ5~15cmは砂を多量に含む。下部層に縄文時代晩期の土器片が含まれている。

第4層は厚さ140cmの堆積で、細砂粒を多量に含む。第5層はII区北半部では疊層となる。

IV区（工学部本館北側地、図7）本調査対象地のなかで最も造成工事が著しい所である。

層位



第1層は60~110cmを測る。第2層は本調査区西側地においてはわずかに残存するにすぎない。第3層は厚さ10~25cmの堆積で、西端部は厚さ10cm以下と薄い。本層は、分層が可能であり上部は花崗岩の風化土が多く、下部では酸化鉄が多く含まれる。下部層より縄文

文京遺跡第8次調査

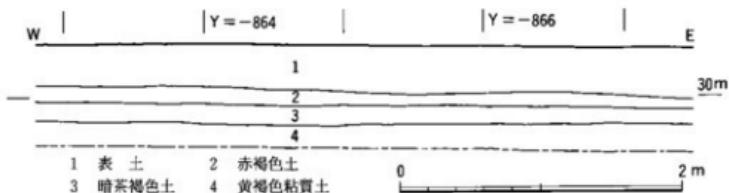


図8 V区南壁の層位 縮尺1/40

時代晩期～弥生時代前期の遺物が出土する。第4層は厚さ55～100cmの堆積で粘質の違いにより4つに分層できる。上部は粘質が強く、下部は砂となる。上面から20cm程下のやや粘質が弱い土層からは、縄文時代後期の深鉢形土器破片が出土している。調査区の中央やや東の地点では、第3層と第4層との間に乳白色で粘質の強い、炭化物と花崗岩風化土（長石）を含む土層がある。この土層は、縄文時代晩期の遺物を包含する。第5層は、調査区中央やや西において5.0m×1.8mの範囲で幼児頭大の石群があり、これを境に西側は砂が、東側では礫が多くなる（図版3-2）。

V区（工学部テニスコート東・南側地、図8）第1層は厚さ35～40cmと他地区に比べ堆積が薄い。第2層は厚さ5～10cm、第3層は厚さ5～20cmの堆積である。この層は西側に厚く堆積し、花崗岩風化土を多く含む。第4層は厚さ65～70cmの堆積で、IV区と同様に分層が可能である。第5層は灰白色の粗砂である。

なお、本調査対象地の第4層上面の地形測量の結果、本調査地は東から西に、また南から北に緩傾斜をもつことを確認した。IV区第4層上面の標高は東端で29.1m、同区西端で

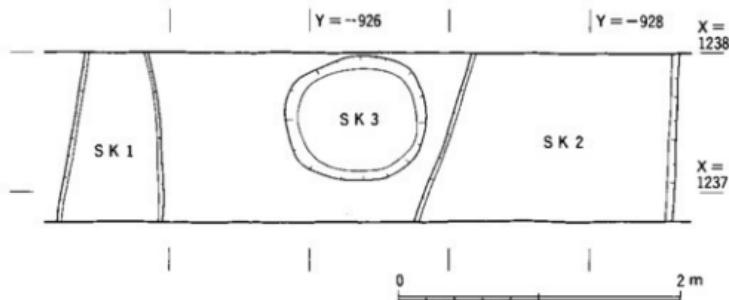


図9 土坑SK1・SK2・SK3 縮尺1/40

遺構と遺物

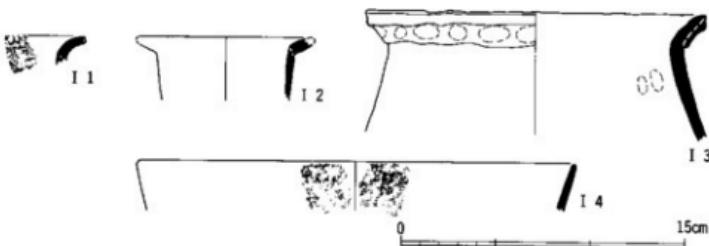


図10 SK 1出土遺物（I 1）SK 2出土遺物（I 2）SK 3出土遺物（I 3～I 4）

28.6m（50cmの高低差）を測る。

（梅木謙一）

3 遺構と遺物

確認した遺構は、大きく2つに分かれる。第3層上面において検出された古墳時代～中世までの遺構と、第3層中および第4層上面で検出された縄文時代晩期～弥生時代の遺構である。前者の遺構埋土は赤褐色土であり、後者の遺構埋土は黒色土、茶褐色土、濃黒褐色土である。遺構は、調査地の西半分に多く分布するものの、大多数の遺構が遺物を伴わない。

（1）I 区

遺構 第2層上層で土坑1基、第3層中および第4層上面で土坑6基、ピット6基を検出した（図9、図版4-2）。

土坑SK 1 調査区東部に位置する（図版4-1）。トレンチ幅120cmのため北および南が未検出であり平面形は確定できない。南北120cm、東西75cm、深さ31cmである。床面は水平で、埋土は砂を含む黒色土である。

土坑SK 2 SK 1の東2.3mに位置する。SK 1同様北および南が未検出であり平面形が確定できない。南北120cm、東西125cm、深さ14cmである。床面は水平で、埋土は粘質の強い濃黒褐色土である。

土坑SK 3 SK 1の東1.8mにある（図版4-2）。平面形は円形で90cm×100cm、深さ20cmを測る。第3層中の検出であり、埋土は濃褐色土を測る。

（梅木謙一）

遺物 SK 1・SK 2・SK 5から遺物が出土している（図10、図版9）。I 1はSK 1出土の如意状口縁甕で弥生前期前半に属する。I 2はSK 2出土の甕で、口縁が幾分肥厚し

文京遺跡第8次調査

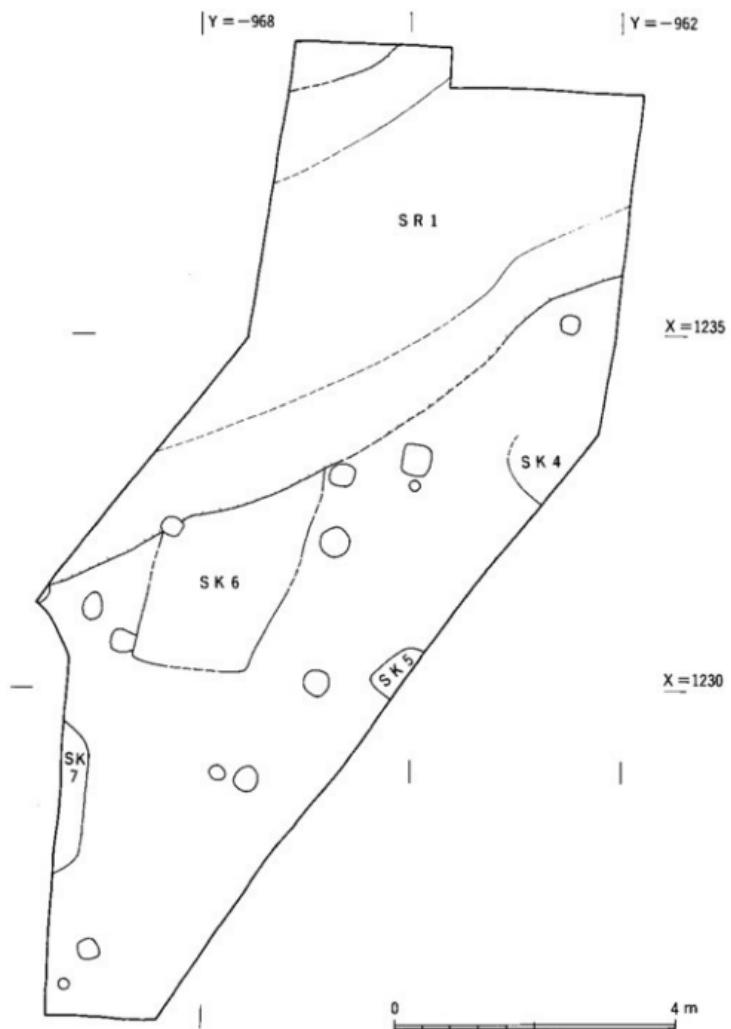


図11 土坑SK4・SK5・SK6・SK7 流路SR1 縮尺1/20

遺構と遺物

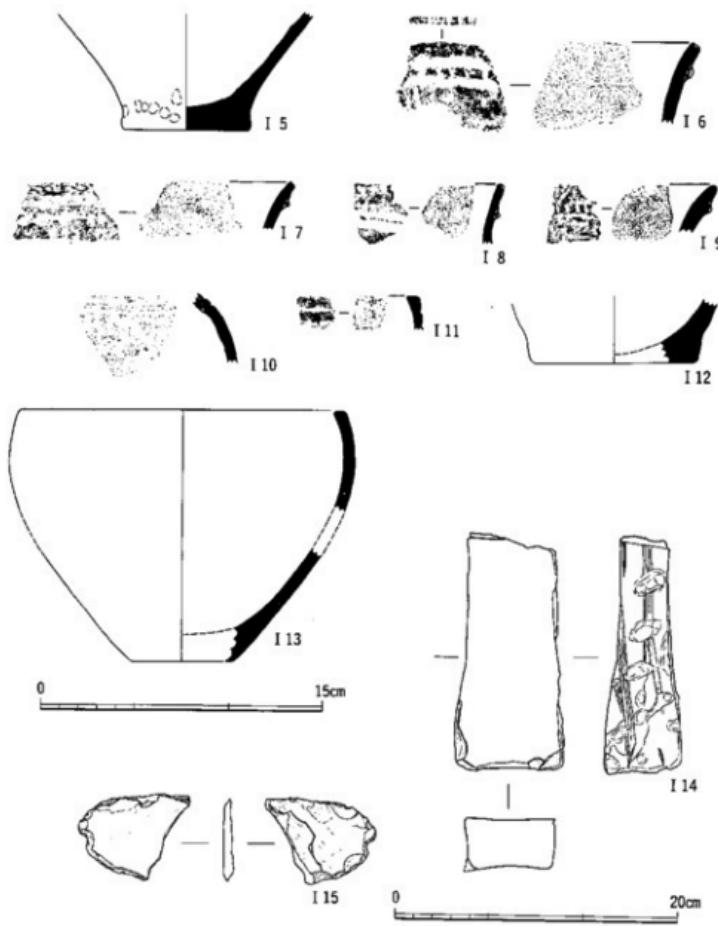


図12 SK 4出土遺物（I 5）、SR 1出土遺物（I 6）、第3層下部出土遺物（I 7～I 10）、
第4層出土遺物（I 11～I 13）、第2層出土遺物（I 14）、横乱出土遺物（I 15）
縮尺 I 14・I 15のみ1/4

ており、凸帯文土器深鉢の系統に属する可能性があるが明確ではない。I 3・I 4はSK 3出土の弥生前期前半の壺と鉢である。I 3は口縁端部に粘土帯を貼り付け段を形成するもので、段上部には指頭圧痕を残している。これらの特徴は、本地域で最も古い弥生土器壺の形態を示すものの一つで、北部九州の板付II a式に併行するものとしておきたい。I 4は、内面に刷毛目を残す鉢である。

(宮本一夫)

(2) II 区

遺構 第4層上面で土坑4基、ピット14基、自然流路1条を検出した(図11、図版3-1)。人为的遺構は全て自然流路の南側地にある。土坑4基は、いずれも範囲が調査外におよんでおり全様は不明である。かつ土坑SK 5～SK 7は遺物の出土もないため性格も断定できない。

土坑SK 4 調査区東端に位置する(図版5)。遺構の北半部は配水管工事により消滅している。平面形は長方形になるものと考えられ、60cm×70cmで、深さ40cmを測る。南東隅の床面に径10cm、深さ10cmの小ピットが2基ある。第3層中より掘り込まれており、埋土は濃黒褐色である。

流路SR 1 調査区北半に位置する。第4層上面の検出で、第3層が覆う(図5、図版3-1)。幅は4.1m～4.3m、深さ99cmで、東北東から西南西に方位をとる。川底には幼児頭大の石があり、埋土には大きく二つの疊層(3cm～5cm大の角疊)が観察され、埋積するまでに最低3度の流路(流水)の変化があったことが認められるが、図示はしていない。埋土最上部の砂層とこの直上の第3層(砂を多く含む)中には、縄文時代晚期刻目凸帯文系の土器片が含まれている。従って、SR 1は縄文晚期後葉以前のものと考えておきたい。

(梅木謙一)

遺物(図12、図版7-9) I 5はSK 4出土の弥生土器壺底部である。底部近くの側面には指頭圧痕が残り、弥生前期のものであろう。I 6はSR 1の埋土最上部から出土したものである。刻目凸帯文土器で、口唇を面取り、口端を刻むものである。包含層出土の遺物はI 7～I 14である。I 7～I 10は第3層下部から出土している。I 7～I 9は刻目凸帯文土器深鉢である。I 7・I 8は口唇を面取り、口端部を刻むものである。I 9は口唇が丸味を帯び刻目を持たないものである。これらの深鉢の凸帯上の刻目はみなV字刻目である。I 10は弥生土器壺の肩部とみられ、3条以上の平行沈線が施される。おそらく弥生前期前半のものであろう。従って、第3層下部は縄文晚期後葉から弥生前期前半までの時代幅をもったものであろう。I 11～I 13は第4層出土の縄文後期の遺物である。I 11の深鉢

遺構と遺物

は平行沈線が施されるが、表面が摩滅しており、磨消絆文が施されたか不明。I 12は深鉢底部。I 13は内外面を研磨しており、同一固体と思われるものである。I 14は第2層出土の砥石である。第2層は中世の包含層であるが、この砥石の所属時期は明確でない。砥石の側面には沈線がみられるが、これは砥石を裁断する際に使われたものである。I 15はサヌカイト製の打製包丁である。これは攪乱出土のものであるが、本来は第3層の弥生時代に属するものと思われる。

(宮本一夫)

(3) III 区

遺構 第3層中および第4層上面で土坑5基、ピット11基、自然流路1条を検出した(図13、図版2-1)。土坑SK8～SK12の土坑5基はいずれもその範囲が調査区の東外地におよんでおり全様は不明である。かつ遺物の出土もないため性格も断定できない。なお

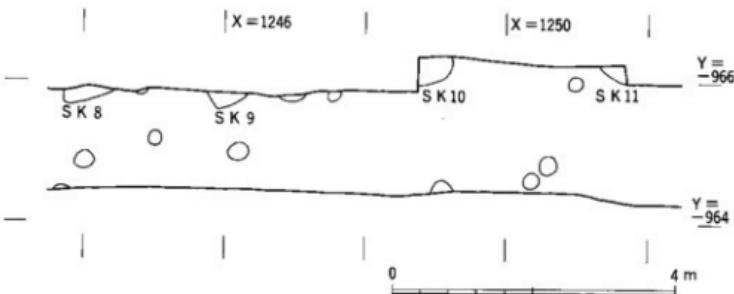


図13 土坑SK8・SK9・SK10・SK11・流路SR2 縮尺1/40

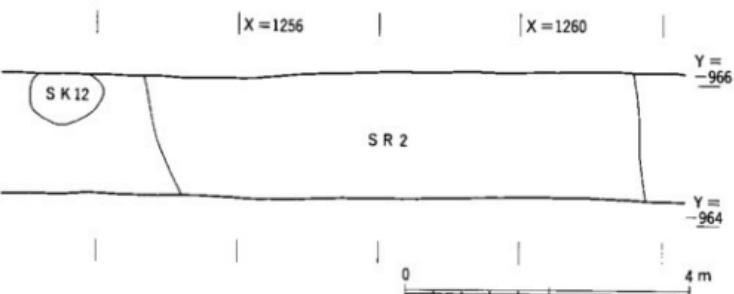


図14 土坑SK12・流路SR2

文京遺跡第8次調査

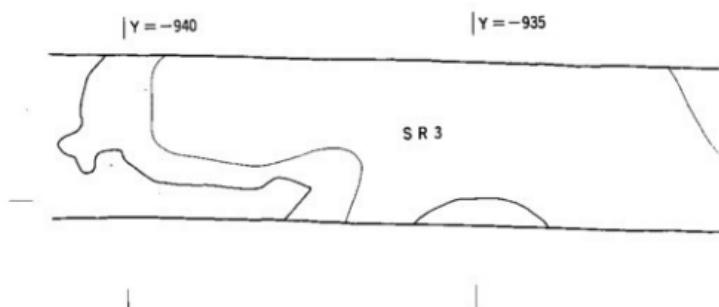


図15 土坑SK13 流路SR3 柱穴SP206 縮尺1/80

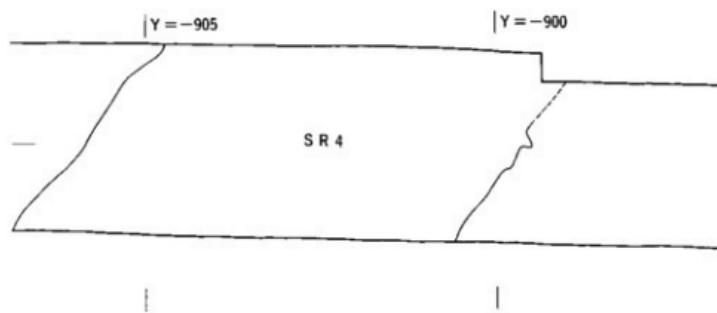


図16 流路SR4 溝SD1 縮尺1/80

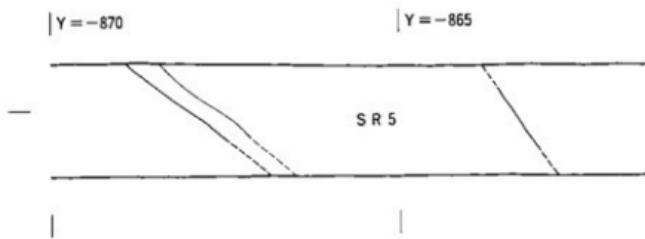
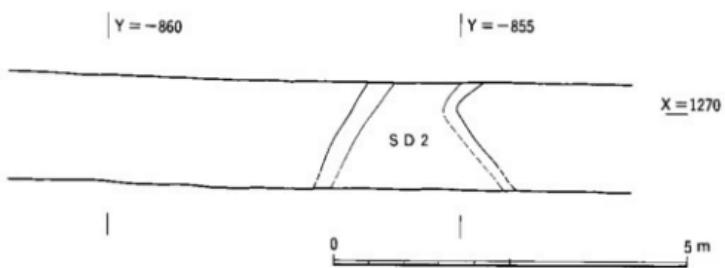
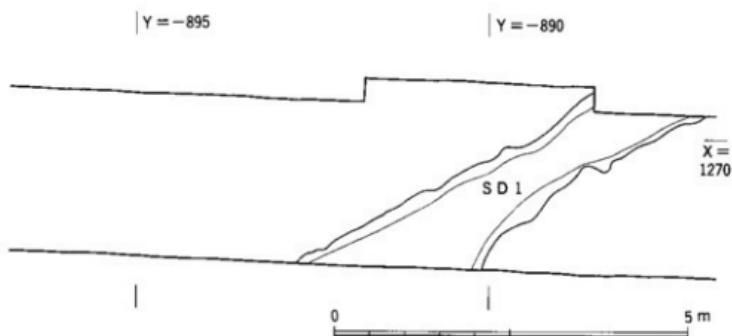
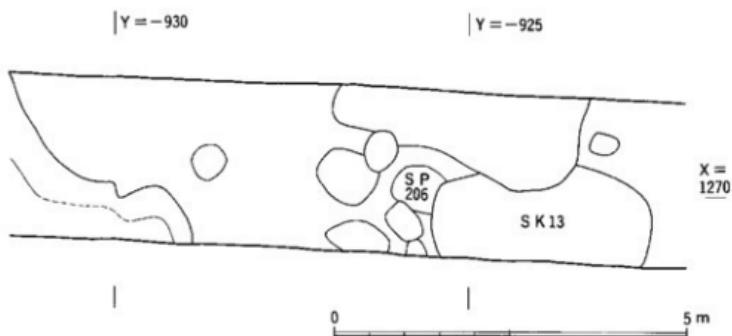


図17 流路SR5 溝SD2 縮尺1/80

遺構と遺物



文京遺跡第8次調査

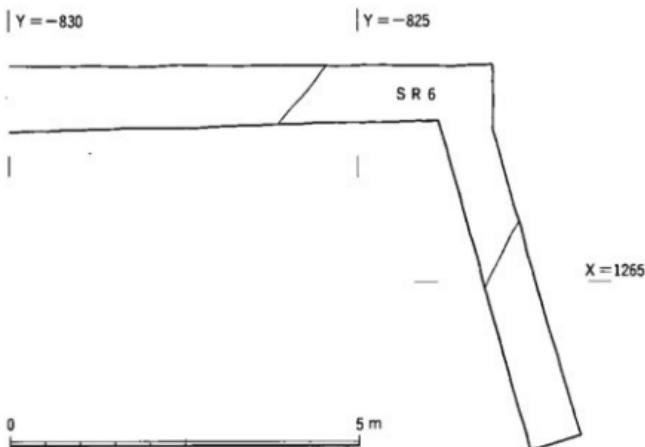


図18 流路SR 6 縮尺1/80

当地区の南端でII区の流路SR 1の北岸を検出している。III区でみられたこれらの遺構は、みなIII区南端部に位置している。従ってII区SR 1に隣接する地域に遺構が多いことは興味深い。

流路SR 2 調査区北端に位置する。第4層上面で検出された。幅は9.1m、深さ1.5mで東北東から西南西に方位をとる(図6・14)。川床には酸化鉄がみられる。埋土は、2cm～3cm大の角礫と砂である。遺物の出土はない。
(梅木謙一)

(4) IV区

遺構 第3層上面および第4層上面で土坑5基、ピット5基、溝2基、自然流路4条が検出された(図版2-2)。特に調査区西側のSR 3(図15)とSR 4(図16)にはさまれた地域で縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物を含む遺構が集中的に検出された。なお土坑SK13以外の土坑は遺物の出土がなく、性格は不明である。またピットのうち、SP206(図15)以外はほとんど遺物の出土がなく、その性格は不明である。

流路SR 3 調査区西側に位置する(図15)。第3層を切り、第2層が覆う。幅6m、深さ約90cmで北西から南東に方位をとる。埋土は粗砂である。川底に近い地点から小量の弥生土器、6世紀代の須恵器が出土した。

流路SR 4 SR 3の東22mに位置する(図16、図版6-1)。第4層上面の検出で、第

遺構と遺物

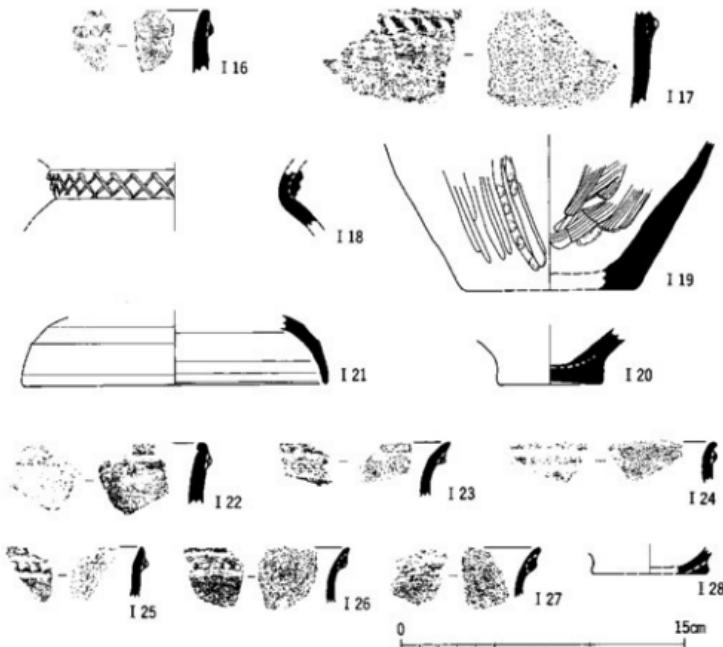


図19 SR 3出土遺物 (I 16~I 20), SK 13出土遺物 (I 22~I 28)

3層が覆う、幅5m、深さ63cmで北東から南西に方位をとる。埋土は3~6cm大の角礫と粗砂である。遺物の出土はない。

流路SR 5 調査区東側に位置する(図17)。第3層を切り、第1層が覆う(第2層は削平されている)。幅3.8m、深さ90cmで北西から南東に方位をとる。埋土は2cm大の角礫、3~5cm大の円礫、粗砂である。遺物の出土はない。

流路SR 6 調査区の東端に位置する(図18)。第4層上面の検出で、第3層が覆う。幅3.8m、深さ83cmで北東から南西に方位をとる。埋土は淡灰色粗砂で5cm大の角礫をわずかに含む。遺物の出土はない。

溝SD 1 調査区の中央部に位置する(図16、図版6-2)。第3層を切り、第2層が覆う。断面「U」字状で、幅1.1m、深さ70cmである。北東から南西に方位をとる。溝床に酸

文京遺跡第8次調査

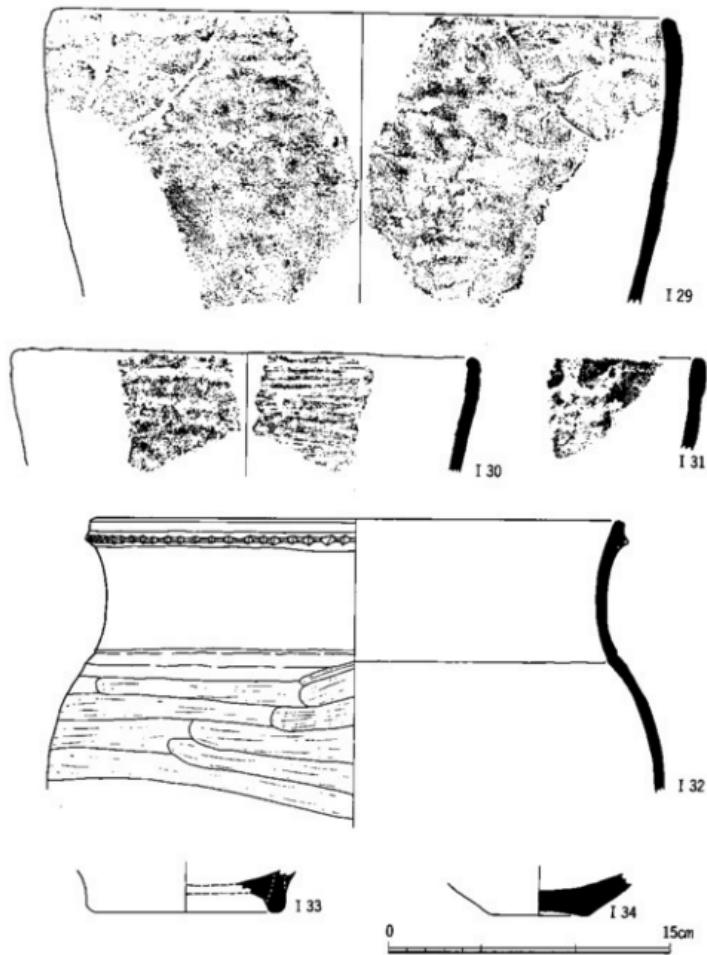


図20 SP 206出土遺物 (I 32), 第4層出土遺物 (I 29~I 31・I 33・I 34)

遺構と遺物

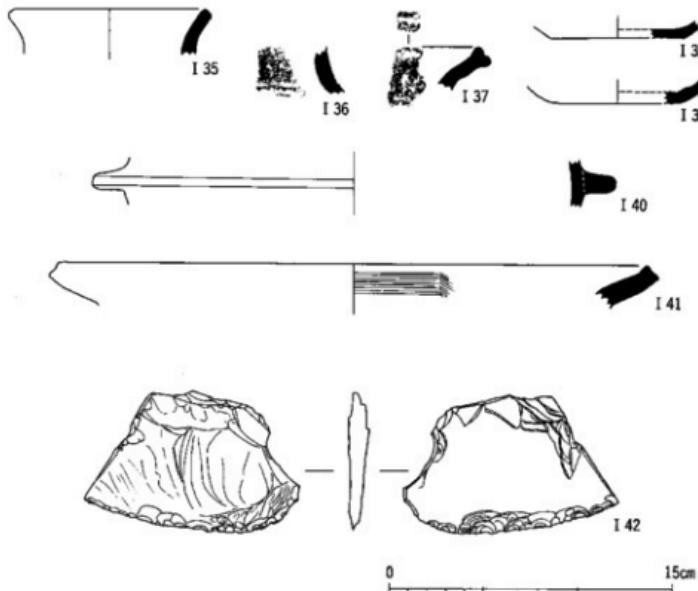


図21 第4層出土遺物（I 42）、第2層出土遺物（I 38～I 41）、擾乱出土遺物（I 35～I 37）

化鉄が多くみられる。埋土は2cm～3cm大の円礫と砂である。遺物の出土はない。

溝SD2 SR5の東7.4mに位置する（図17）。第3層を切り、第1層が覆う（第2層は削平されている）。断面「U」字状で幅2.9m、深さ28cmを測る。北北東から南南西に方位をとる。溝床に酸化鉄が多く見られる。埋土は小角礫と粗砂である。遺物の出土はない。

以上の流路や溝は出土遺物が限られているため、正確な年代の不明であるものが多いが、それらの検出面の層位関係や出土遺物から、SR4・SR6が縄文晩期後葉・弥生前期初頭以前、SR5・SD1・SD2が赤生前期以降、SR3は古墳時代後期以降の流路・溝と考えられる。

土坑SK13 SR1の東3.6mに位置する（図15）。第3層中での検出である。平面形は長楕円形を呈し（南端は調査区外となる）、長径3.1m、短径1.4cm、深さ6cmを測る。中央部の1m四方の範囲で、かつ床面より5cm上部の地点より縄文時代晩期刻目凸帯文系の土器

文京遺跡第8次調査

片、弥生時代前期の壺形土器片が10数点出土した。埋土は濃黒褐色土である。

柱穴S P206 S K13に西で接し、S K13に切られる（図15）。平面形は円形を呈し径60cm、深さ10cmを測る。埋土には炭が混入している。出土遺物は、縄文時代晩期の深鉢形土器1点である。
(梅木謙一)

遺物（図19～図21、図版7～9） I 16～I 21は流路S R 3出土遺物である。I 16・I 17は縄文晚期後葉の凸帯文土器深鉢。I 16は凸带上に刻目が施されないとともに、口唇に刻目を有せず、口端を面取るもの。I 17は肩部の凸帶でV字刻目が施されるもの。I 18～I 20は弥生土器。I 18は壺の頸部に降帯を貼りつけ、格子状に沈線を施すもの。弥生第III様式に属するであろう。I 19・I 20は底部。I 21は須恵器杯蓋である。杯蓋は既に天井部と口縁部を分ける稜線を失っており、6世紀後半代のものである。従ってS R 3は、6世紀後半以降に埋積したものといえよう。

I 22～I 28はS K13出土の凸帯文土器深鉢である。I 22～I 26は口唇を丸く納めて刻目を施さず、口端からやや下ったところに断面三角形状の刻目凸帯を貼るもの。I 22は口唇部内面に1条の沈線が施されるところに特徴がある。I 27は口唇に刻目をもつもので、凸带上には刻目が施されない。またI 28は平底を呈しており、上記の凸帯文土器深鉢の底部になるものであろう。なお、これらの凸帯文土器深鉢が、肩部に凸帯を有しているか否かは不明である。

I 32は晩期後葉の刻目凸帯文土器深鉢である。I 32は弥生の包含層である3層の下面で検出されたS P206の出土遺物である。上記したS K13も同様な層位関係に位置している。I 32は口唇を面取りしているものの刻目を有せず、口端から下ったところに断面三角形の凸帯を貼り、凸带上にV字刻目が施される。凸帯以下の口縁部外面は撫で調査が施され、肩部のくびれ部には1条の沈線が施される。沈線以下は横方向の削り調整がなされる。これら

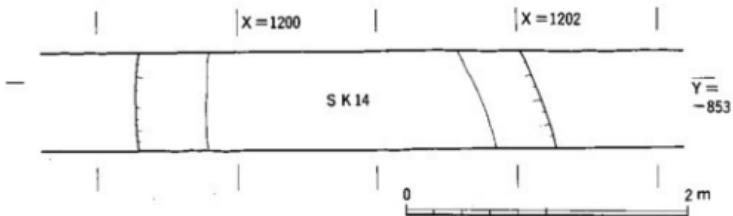


図22 土坑SK14 縮尺1/40

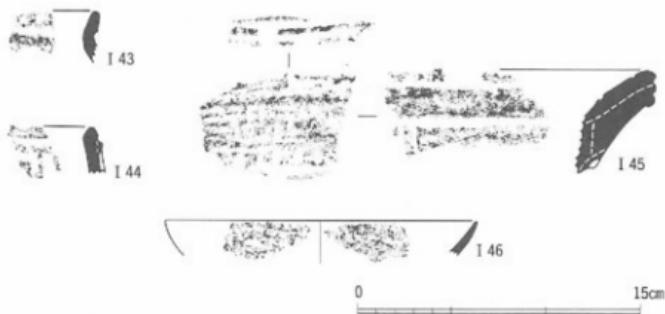


図23 SK14出土遺物 (I 143~I 146)

の特徴は、本地域においては大瀬式の新段階に属するものと考えられ、型式学的には口唇の形状からSK13やII区第3層下部出土の凸帯文土器の方が新しいものと考えられる。

I 29~I 31・I 33・I 34は第4層出土縄文土器である。いずれも粗製深鉢で、I 29が第4層中部、それ以外が第4層上部より出土している。I 29・I 31は内外面とも撫で調整される。I 30は外面が撫でられ、内面に巻貝条痕が施されるものである。I 33・I 34は上げ底状の底部をなす。これら第4層の縄文土器は縄文後期の特徴を示すが、所属型式は不明である。また、第4層内で層位的上下関係があるものの、型式学的時間差は見出しづらい。なお、第4層からは、サヌイカイト製のサイドスクラーペが出土している。I 42である。縦11.2cm、横7.0cm、厚さ9.9mmの大型の板状剝片の側辺に細部調整を施したものである。また、初剥離面が2側面に認められる。

I 35~I 37は弥生土器壺である。みな攪乱から出土したもので、明確な層位的把握は困難である。I 36は壺頸部に1条の平行沈線文が施されるもので、I 35と同様に弥生前期のものである。I 37は口唇部に凹線分が施される壺で、弥生中期末のものである。I 38~I 41は第2層出土の中世の遺物である。I 38・I 39は土師器皿底部で、底部外面には糸切り痕を残すものも認められる。I 40は土師器羽釜、I 41は土師器鍋である。これら第2層の中世土器は出土量が少ないため、詳細な年代観は得られない。

(宮本一夫)

(5) V 区

遺構 第3層上面でピット3基、第4層上面で土坑1基を検出した。

土坑SK14 東側トレンチの中央部に位置する(図22)。第4層上面で検出され、第3

文京遺跡第8次調査

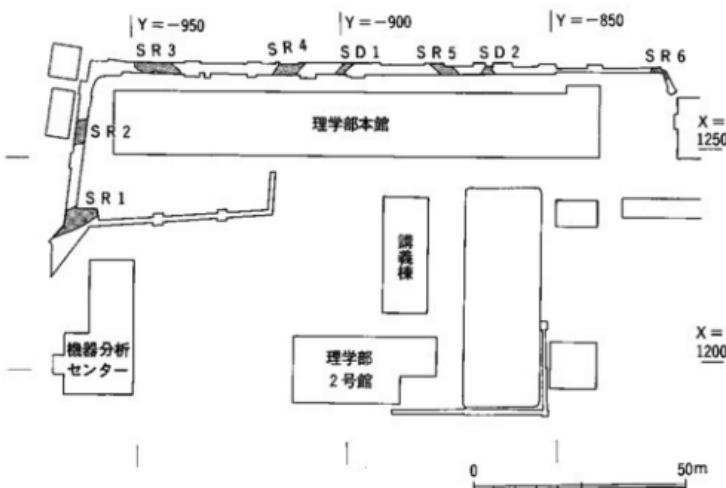


図24 流路SR1・SR2・SR3・SR4・SR5・SR6 溝SD1・SD2 縮尺3/4000

層が覆う。平面形は断定できない。東西3m、南北70cm、深さ35cmを測る。埋土は黒色でやや粘質の弱い土である。

(梅木謙一)

遺物 I 43～I 46はSK14出土遺物である(図23、図版9)。I 43は口唇に接して凸帯を貼り付け、口端・凸帯とも刻目が施されない刻目凸帯文土器系の深鉢である。I 44は、口唇に平行に隆帯を貼り、その下端から垂下隆帯を施す。器形不明の土器。I 45は大型の弥生土器壺である。口端に2条の沈線が施され、口端角に刻目が施される。また口縁外面の肥厚部に刻目が施される。さらに口縁内面にも2条の平行沈線と平行沈線下方に2条の垂下沈線が施される。この大型壺は、樽味遺跡SD4⁽³⁾の大型壺より型式的には先行する形態のものといえよう。I 46は浅鉢である。このようにSK1出土遺物は、I 43・I 46のような縄文晚期の凸帯文土器の系譜をひくものと、I 45のような弥生前期前半の大型壺が一括して出土している。すなわち、弥生前期初頭の1例といえ、一応樽味遺跡SD4併行期としておきたい。

(宮本一夫)

4 小結

本調査の成果で最も重要な点は、縄文後期後葉から弥生前期前半の遺構ないし包含層と

小 結

縄文後期の包含層が明瞭に区分できた点である。このあり方は、近隣の南海放送遺跡の堆積環境と同様な傾向を示している。文京遺跡に於て、第11次調査では縄文後期の炉跡が検出されており、第4次調査では弥生前期前半の住居址が発見されている。すなわち、少なくとも縄文後期と縄文晚期後葉から弥生前期前半の2段階の遺構面が存在することになり、今回の調査結果はこのことを追認することになった。また、出土している縄文晚期後葉の遺物は、大渦式などよりも後出する傾向にあり、南海放送遺跡の段階に近い。すなわち、大渦式の後半から南海放送式段階のものと考えられる。続く弥生前期前半のものが、同一包含層から出土していることからも、これらはごく近接した時期のものと考えられ、縄文晚期の終末から弥生前期初頭に連続している生活面をもった遺跡であるといえよう。さらに弥生前期前半の遺物には、刻目凸帯文土器系統の土器も存在し、樽味SD4と同様な傾向を示している。このように、これらの資料は弥生時代への移行を考える際の、好材料になるものと思われる。

別に、本調査区からは自然流路が5基発見されている(図24)。第3層以前と以後、すなわち縄文晚期後葉ないし弥生前期初頭以前と弥生前期以降から中世までの2段階に区分される自然流路である。前者はSR1・SR2・SR4・SR6、後者はSR3・SR5・SD1・SD2である。第6章の地形復元の際に詳述することになるが、本調査区付近は、舌状台地から谷部へ落ちる境界付近に位置している。現在の等高線からも小規模な谷部が数条に渡ってできており、ここに数条の自然流路が時代を異にして流れ出ていたことが推定できよう。本調査区付近は自然流路が流れやすい地形環境をなしていたのである。また、本調査区に隣接する理学部構内の機器分析センター付近や、第5次調査の生協前においては、暗茶褐色土下で自然流路と思われる砂礫層が発見されている。第5次調査のものは、本調査区のSR1・SR2・SR4・SR6など弥生前期初頭以前の自然流路の延長と予想される。従って、本調査区付近から生協建物に向かっては、谷部への落ち込みにともなって、各時期に流路方向を幾度かかえながら、自然流路が流れていたものと想定される。

(宮本一夫)

(注)

- 1 第3層は、厚い地点で50cmの堆積をしており、人為的に10cm前後の厚さで掘り下げを行ったため、掘り下げごとに順次遺構検出を行ったため、第3層中で確認した遺構も幾つかある。
- 2 宮本一夫「道後平野における縄文から弥生へ」『鷹子・樽味遺跡の調査』(『愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ』) 1989年

文京遺跡第8次調査

- 3 宮本一夫「樽味遺跡の調査」「鷹子・樽味遺跡の調査」(『愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ』) 1989年
- 4 西尾幸則「道後城北RN B遺跡」(『松山市埋蔵文化財調査報告Ⅱ』) 昭和62~63年度 1989年
- 5 前掲注2文献

第3章 文京遺跡第9次調査

宮本一夫

1 調査の経過

昭和62年度に、愛媛大学城北地区プール浄化装置の増設が計画された。プール浄化装置増設地は、城北地区キャンパスの北西隅、体育館とプールの間に位置している（図25、図版10-1）。当時、文京遺跡が連続してこの位置まで延びているか否かについては、全く認識されていなかった。そこで、昭和62年11月13日に試掘調査を行ない、遺跡の存在の有無

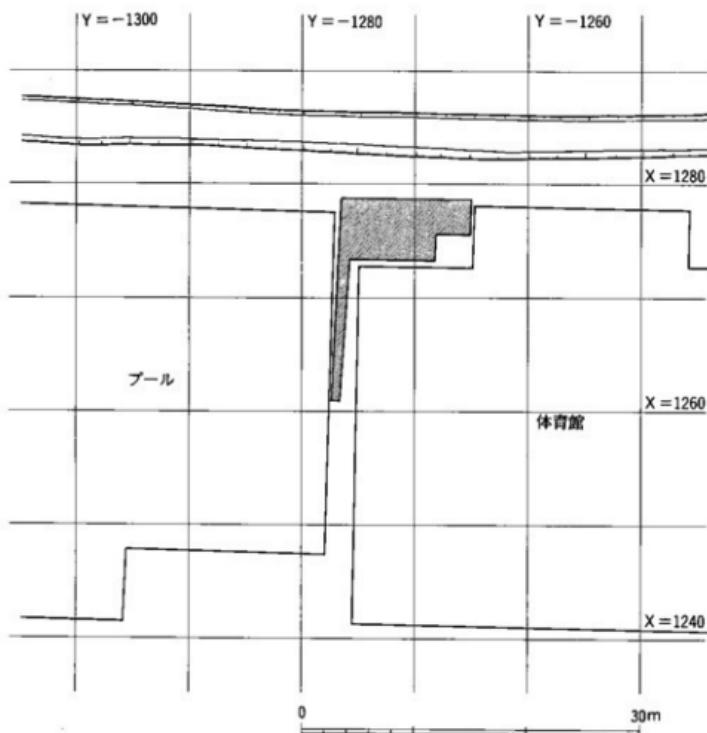


図25 調査区の位置（斜線部分調査区地点）縮尺1/500

文京遺跡第9次調査

を確認することにした。その結果、これまで地山として無遺物包含層と認識されていた土層の中から、縄文土器片が検出され、発掘調査の必要性が認められた。また、この発掘調査により、城北地区キャンパス一体の扇状地の形成過程の一端が分かるものと期待された。この発掘調査が文京遺跡第9次調査にあたる。以下、発掘調査にあたって組織した調査委

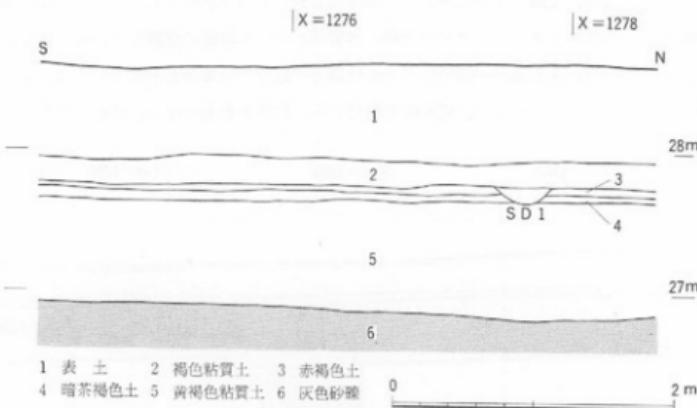


図26 調査区西壁の層位 縮尺1/40

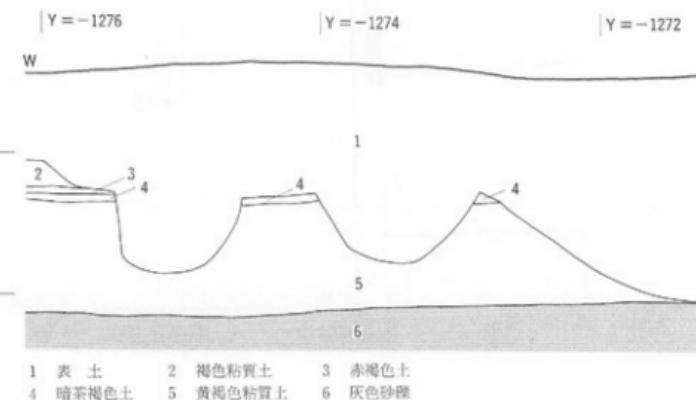


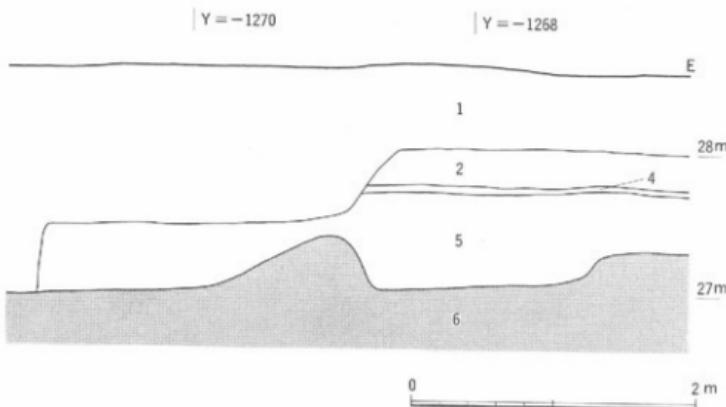
図27 調査区北壁の位置 縮尺1/40

調査の経過

員会および調査班の構成を述べる。なお、職名は当時のものを用い、敬称と愛媛大学関係者の大学名を省略した。

文京遺跡第9次発掘調査組織

| | |
|-------|---|
| 調査地点 | 松山市文京町3番 愛媛大学城北地区プール浄化装置増設予定地 |
| 発掘期間 | 昭和63年1月11日～1月29日 |
| 発掘面積 | 62m ² |
| 発掘主体 | 愛媛大学埋蔵文化財調査室 |
| 調査室長 | 下條信行（法文学部教授） |
| 調査委員 | 坂上 英（学長）、美山 靖（法文学部長）、下條信行（法文学部教授）、須賀俊夫（教育学部長）、石川勝二（教育学部教授）、仙波 敏（理学部長）、福西 亮（医学部長）、鈴川恭三（工学部長）、浅田泰次（農学部長）、森田 勝美（教養部長）、松原弘宣（教養部助教授）、一宮正明（事務局長）、深澤 信雄（庶務部長）、今井兼吉（経理部長）、湯本巖（施設部長） |
| 調査員 | 宮本一夫（法文学部助教授） |
| 専門員 | 平井幸弘（教育学部講師）、松原弘宣（教養部助教授） |
| 調査補助員 | 宮崎直栄（施設部事務補佐員） |
| 作業員 | 6名 |



2 層位と遺構

本調査区は、城北地区キャンバス北西隅に位置している。地形的には、北東から南西方向へ緩傾斜しているが、調査区内の地表面はほぼ平坦である。図26(図版12-1)に示すように、調査区西壁の南北方向では、層序はほぼ安定して堆積している。上から表土、褐色粘質土、赤褐色土、暗茶褐色土、黄褐色粘質土、地山の順に堆積する。褐色粘質土は近世以降の耕土の可能性がある。赤褐色土・暗茶褐色土は、遺物がごく僅かであるため、その正確な時期を把握することができないが、文京遺跡のこれまでの調査から、赤褐色土は中世、暗茶褐色土は弥生時代の包含層であると想定される。暗茶褐色土より下のシルト層である黄褐色粘質土は、地山としてこれまで認識してきたが、この層に縄文後・晩期の遺

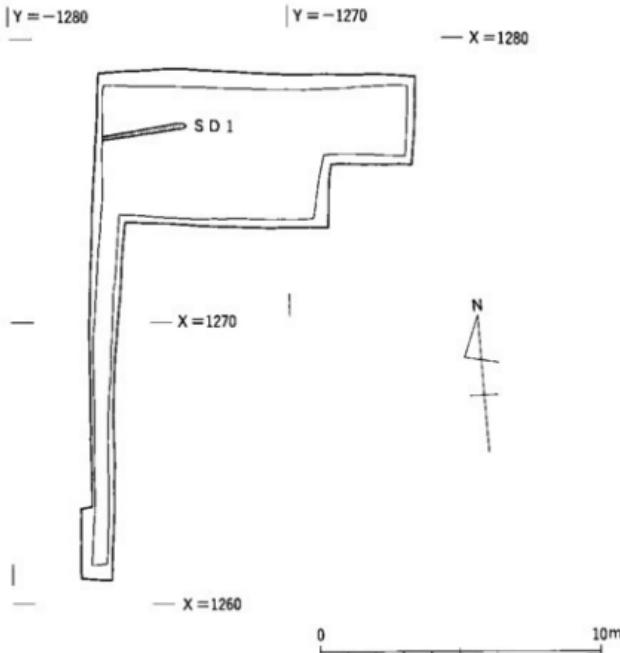


図28 溝 S D 1 緯尺1/200

層位と遺構

物が包含されており、縄文後・晩期の堆積層と判断された。黄褐色粘質土層の下は、旧石手川系の砂礫層である。調査区北壁の東西面（図27、図版12-2）も、西壁とほぼ同様な層序関係を示すものの、旧石手川系の砂礫層である地山は、東から西に向けて緩傾斜を示している。また、部分的に盛り上がって堆積しており、旧石手川系河川の堆積状況をよく示すものと考えられる。また、地山の傾斜面に応じて、地山より上部に堆積する赤褐色土・暗茶褐色土・黄褐色粘質土も、やや東から西に向けて傾斜して堆積している。そのため、よりレベルの上がった調査区東側部分では、赤褐色土が削平を受け、堆積することができなかったものと判断される。また、近世以降の褐色粘質土は、ほぼ水平に堆積しており、この段階で、旧地形の水平化が計られたものと考えられる。

遺構としては、溝SD1（図28、図版10-2）があげられる。赤褐色土を切る形で形成

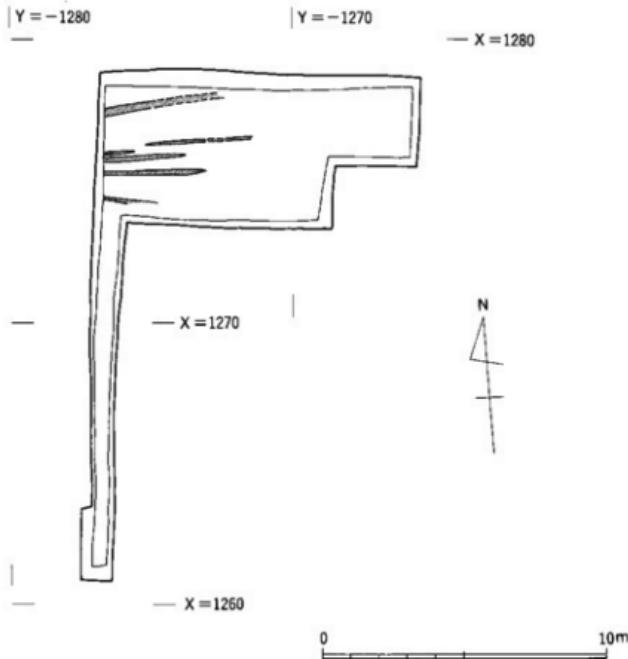


図29 暗茶褐色土上面検出溝群（斜線部分溝） 縮尺1/200

されており、中世以降すなわち、近世以降の耕土である褐色粘質土に伴う遺構と考えられる。従って、中世以降の耕作に伴う構と判断されよう。また、暗茶褐色土上面では東西に延びる溝群（図29、図版11）が検出された。これらは、埋土に砂質土壤を含み暗茶褐色土とは明瞭に区分できるものの、深さはごく浅い。従って調査区西壁には、これら溝群の断面を示すことができなかった。おそらく中世の耕作によるものであろう。

3 遺 物

II 1～II 21は、黄褐色粘質土出土繩文土器である（図30、図版13）。黄褐色粘質土は厚さ約80cmに渡って堆積しており、漸移的に上部から下部に向かって粘質から砂質に変化する。これは、安定した水性堆積によるものと思われる。従って、発掘に際しては、人工的に黄褐色粘質土を3層に分けて分層発掘を試みた。その結果、繩文土器は、上部の上・中層からのみ出土し、下層からは検出されなかった。また、以下説明するように、繩文土器は3類に分類できるものの、これらの違いは層位的には確認できず、混在して出土している。

出土繩文土器は3類に分類できる。II 1～II 4はI類である。I類は無文を呈する。この内、II 1・II 2は比較的器壁が厚く、II 3・II 4は器壁が薄い。それぞれI 1類、I 2類とする。後者のI 2類の器面はかなり摩滅を受けており、II類の繩文施文が剥落している可能性もある。II類はII 5～II 12に示され、器壁外面に繩文施文されることに特徴がある。II 5～II 7はR Lの繩文施文が施される。II 5は口唇に接して、帯状に繩文施文され、それ以下は撫で調整されている。II 10もR Lの繩文施文であるが、やや節が乱れている。II 8・II 9はL Rの繩文施文である。II 11は1段のR Lの繩文施文と考えられるもの。II 12は繩文施文が施されているが、器壁の残りが悪く、無節か単節か不明なものである。II 13～II 21のIII類は、器壁外面を掠り消され、器壁内面に巻貝条痕調整が施されるもの。これらは、器壁外面の依存状態が悪く、II 13・II 14のように、外面の条痕調整の痕跡が残るものもあり、本来は、内外面に巻貝条痕が施されるか、あるいは、外面に条痕調整の後、掠り消されたものと考えられる。I 2類の位置づけは不明であるものの、I 1類は、理学部構内IV区出土の粗製深鉢と類似した形態を示し、繩文後期に属する。II類も同様に後期の繩文施文の土器と考える。III類は巻貝条痕が施され、後期の可能性が考えられるが、器壁がかなり薄いところから繩文晚期前葉まで下る可能性がある。以上のように、黄褐色粘質土出土の繩文土器は、繩文後期から晚期前葉のものと判断される。

II 22～II 27は表土や褐色粘質土出土遺物である（図31）。II 22は弥生土器底部、II 23は7

遺物

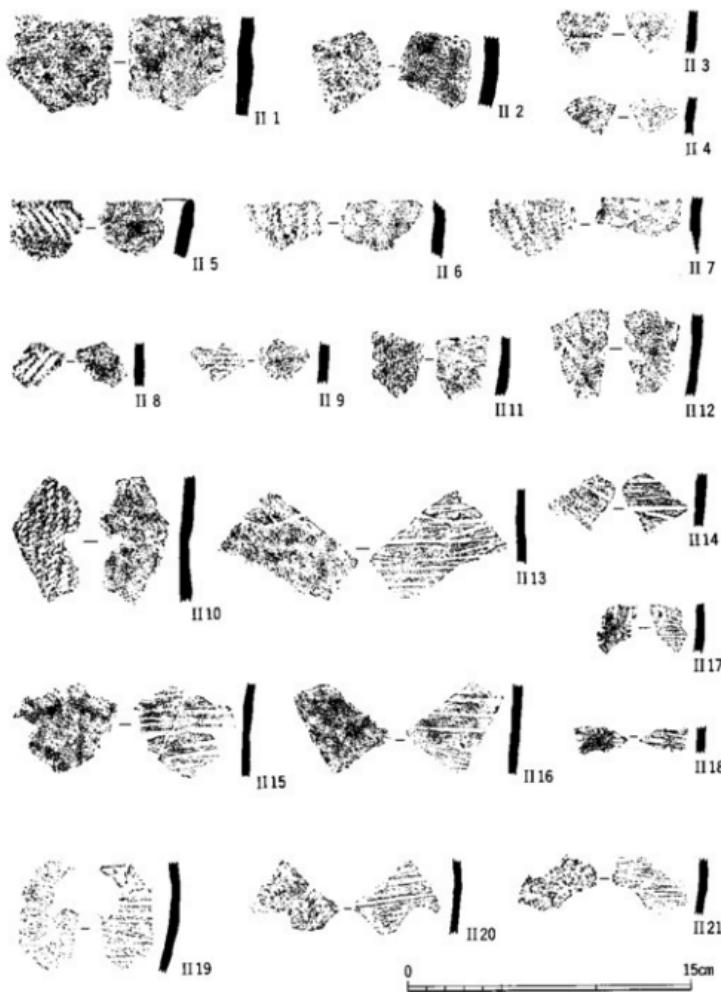


圖30 黃褐色粘質土出土遺物 (II 1 ~ II 21繩文土器)

文京遺跡第9次調査

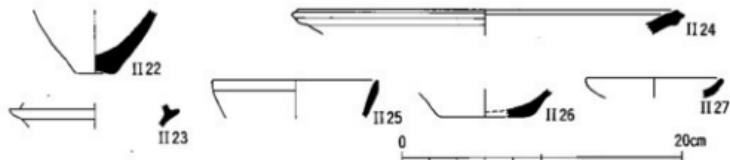


図31 表土・褐色粘質土出土遺物（II22弥生土器、II23・II24須恵器、II25～II27土師器）縮尺1/4
世紀前葉の須恵器杯身。II24は須恵器壺口縁部。II25～II27は土師器。II25・II26は褐色
粘質土出土遺物であり、土師器杯である。中世後期の様相を示す。II27は土師器皿であり
内外面に煤が不着しており、灯明皿として利用されたものであろう。なお、褐色粘質土には
近世後半の遺物も混じっており、近世後半以降の土層と考えている。

4 小 結

文京遺跡第9次調査において特筆すべきは、これまで地山として確認されていた黄褐色
粘質土層から、縄文後・晩期の遺物が出土したことである。その出土遺物からは、黄褐色
粘質土中・上層は縄文晚期前葉以前に堆積したものと判断される。既に平井幸弘氏によっ
て、地山の灰色砂礫層を、最終氷期最盛期頃、城北地区から堀江低地にかけて流れでてい
た石手川系の堆積物である『下部礫層』との指摘がある。⁽¹⁾従って、最終氷期最盛期頃、主
に堆積した地山の灰色砂礫層は、その後、その上に、縄文後・晩期の安定した堆積作用に
よって、シルト質の黄褐色粘質土が堆積させられたものと考えられる。同様の状況は、理
学部構内の文京遺跡第8次調査によっても確認されている。さらに近隣の南海放送跡から
は、縄文後期と縄文晚期後葉の包含層がそれぞれ層を上下にして安定的に堆積している。⁽²⁾
本調査区では、黄褐色粘質土が時期的に細別できるように層をなして堆積していない。縄
文後期から晩期前葉の遺物が混在して、黄褐色粘質土中・上層に堆積しているのである。
こういったあり方は、必ずしも縄文後・晩期に城北地区の扇状地が一律に同時に形成さ
れたのではなく、それぞれの地形環境に応じて、縄文後・晩期の期間の間に、順次形成さ
れていったものといえよう。

[注]

- 1 平井幸弘「石手川扇状地域北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境」[愛媛大学教育
学部研究紀要第III部(自然科学)] 第9巻 1989年
- 2 西尾幸則「道後城北RNB遺跡」[松山市埋蔵文化財調査年報] 昭和62年～63年度 1989年

第4章 文京遺跡第11次調査

宮本一夫

1 調査の経過

文京遺跡第11次調査は、法文学部2号館入口北側付近で行われた（図32）。ここに、平成元年度、法文学部講義棟身障者用昇高機取扱の計画がなされたためである。本調査区は、弥生中期後半～後期の住居址が7棟発見された第3次調査の法文学部8階教棟から僅か30mしか離れておらず、弥生集落の延長が存在するものと予想された。そこで1989年8月に発掘調査を実施することにした。弥生集落の範囲とその変遷を明らかにすることが、本調査の目的である。以下、発掘調査にあたって組織した調査委員会および調査班の構成を示す。

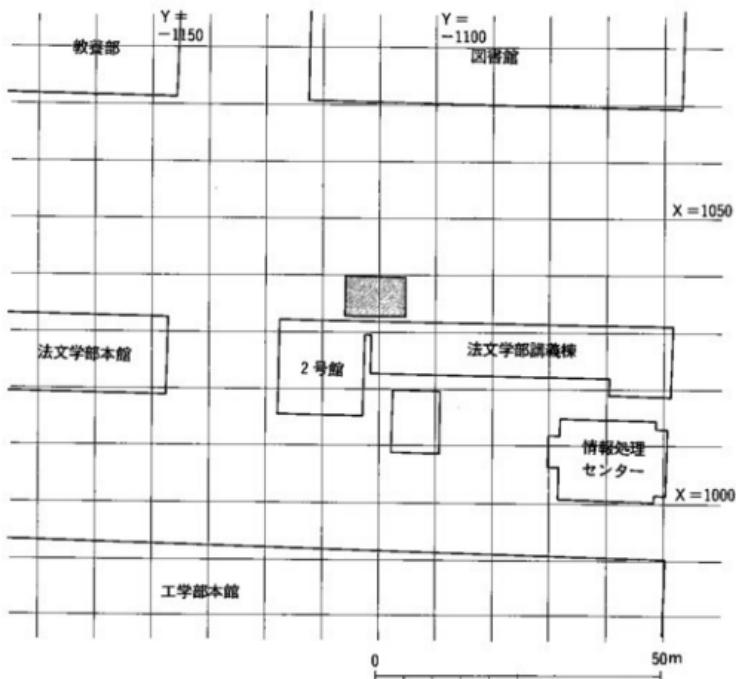


図32 調査区の位置（斜線部分調査地点）縮尺1/1000

文京遺跡第11次調査

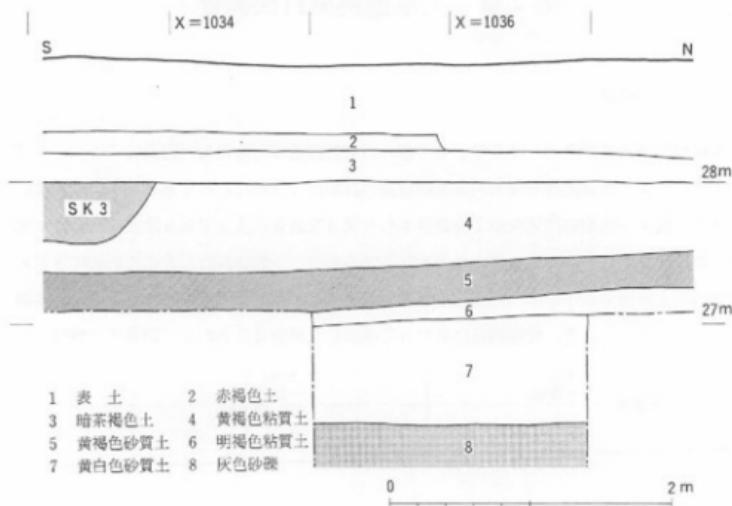


図33 調査区西壁の層位 縮尺1/40

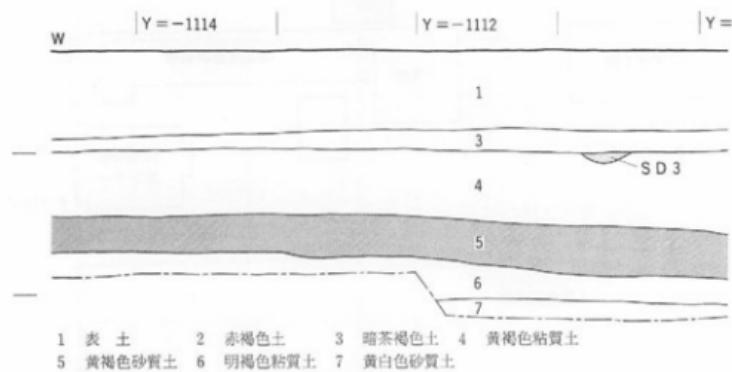


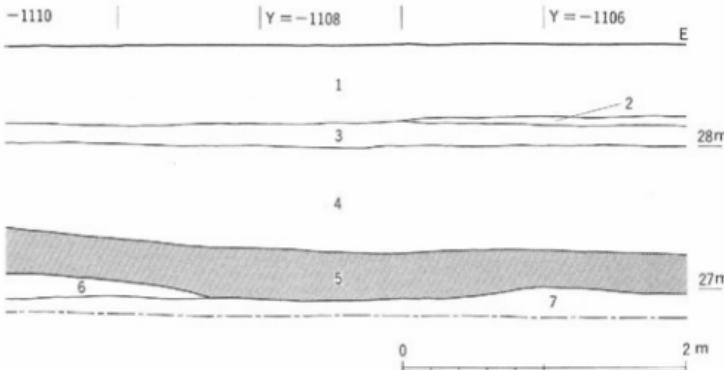
図34 調査区北壁の層位 縮尺1/40

調査の経過

す。なお、職名は当時のものを用い、敬称と愛媛大学関係者の大学名を称略した。

文京遺跡第11次発掘調査組織

| | |
|-------|---|
| 調査地点 | 松山市文京町3番 愛媛大学法文学部講義棟身障者用昇高機取設地 |
| 発掘期間 | 平成元年8月1日～8月29日 |
| 発掘面積 | 85m ² |
| 発掘主体 | 愛媛大学埋蔵文化財調査室 |
| 調査室長 | 下條信行（法文学部教授） |
| 調査委員 | 浅田泰次（学長）、美山 靖（法文学部長）、下條信行（法文学部教授）、河瀬計明（教育学部長）、宮内正義（教育学部教授）、仙波 敏（理学部長）、福西 亮（医学部長）、二神浩三（工学部長）、佐藤晃一（農学部長）、森田 勝美（教養部長）、松原弘宣（教養部助教授）、日下弘（事務局長）、藤本誠造（庶務部長）、大久保輝男（経理部長）、石原輝男（施設部長） |
| 調査員 | 宮本一夫（法文学部助教授） |
| 専門員 | 平井幸弘（教育学部助教授）、松原弘宣（教養部助教授） |
| 調査補助員 | 宮崎直栄（施設部事務補佐員）、越智真由美・山田由美子・山本昌弘・檜垣芳江・上原秀樹・石崎康昌（以上法文学部学生） |
| 作業員 | 4名 |



文京遺跡第11次調査

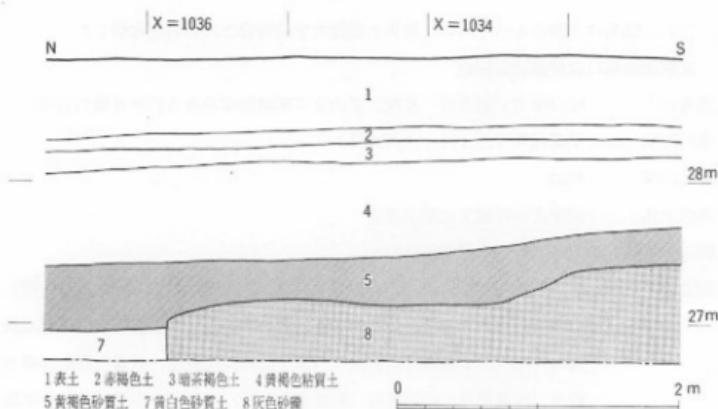


図35 調査区東壁の層位 縮尺1/40

2 層 位

上から、表土、赤褐色土、暗茶褐色土、黄褐色粘質土、黄褐色砂質土、明褐色粘質土、黄白色砂質土、灰色砂礫の順に堆積している（図33、図版16-1）。赤褐色土は中世、暗茶褐色土は弥生中期末の遺物が主体として包含されている。縄文後期の遺物は黄褐色粘質土下半から出土し始め、黄褐色砂質土に最も多くの遺物が含まれる。明褐色粘質土には若干の遺物が含まれるもの、黄白色砂質土には遺物は含まれていない。なお、明褐色粘質土は、調査区の西半しか堆積していない（図34、図版16-2）。また、調査区東南隅で灰色砂礫が垂直に切られる部分がみられる（図35）。これは、一度灰色砂礫が堆積して後、別な流路の形成により、流路の攻撃面として、垂直に切られたものと判断している。西壁で確認した黄白色砂質土の堆積は、この流路内に堆積したものであり、流路の深さに対応するものと思われる。従って、流路部分に黄白色砂質土が堆積して、扇状地が平坦化して後、一部高さの低い調査区西半部に明褐色粘質土が堆積する段階から、本扇状地は縄文人の生活面として利用され始めている。黄褐色砂質土は調査区全面に安定的に堆積しており、縄文土器が集中的に出土している。また、この黄褐色砂質土中には屋外炉2・3が、黄褐色砂質土上面に屋外炉1が検出されている。この黄褐色砂質土の堆積する段階に、縄文人の生活面があったといえよう。

3 遺構と遺物

(1) 中世～古墳時代

中世の遺構は暗茶褐色土上面で検出されている。中世の遺構としては柱穴1基があげられるが、建物跡を構成するには致らず、図示していない。また遺物が僅少のため、中世の詳細な年代付けは不明である。別に溝SD1・SD2が検出されている(図36)。両者はともに灰色砂を包含しているが、深さは浅く、一時的に流れ出た自然流路と考えられる。SD1・SD2は須恵器壺の胴部片を包含しているものの、その詳細な年代は不明であり、古代～古墳時代の遺構といえよう。文京遺跡第10次調査でも、古墳時代後期の溝が同じように暗茶褐色土上面で検出されており、同時期であれば、この時代には自然環境の不安定さが想定され、興味深い。

(2) 弥生時代

弥生時代の遺構は、埋土の質の差から2時期に分けられる。弥生時代第1次遺構と第2次遺構である(図版14-2)。

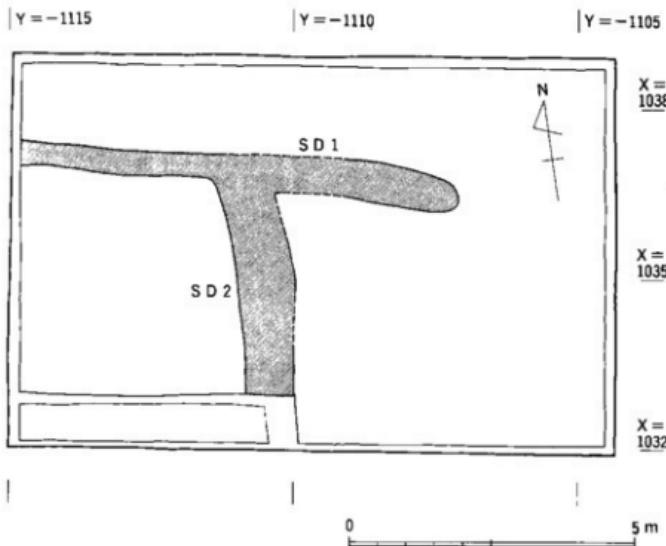


図36 溝SD1・SD2

文京遺跡第11次調査

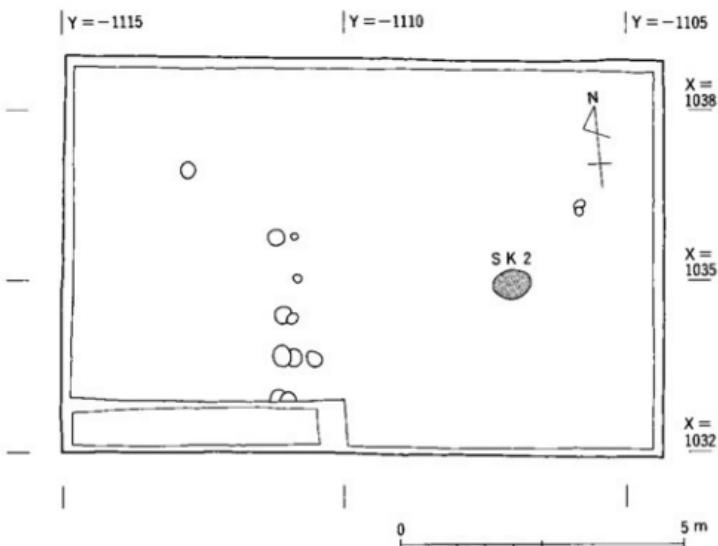


図37 弥生時代第1次遺構 縮尺1/100

弥生時代第1次遺構としたものは、柱穴と土坑からなる（図37）。柱穴は作り替えをしたもののが対になって3組並んでいるが、それらの遺構としての性格は不明である。また土坑SK 2の性格も不明である。

弥生時代第2次遺構としたものは、第1次遺構によって切られているところから、第1次遺構より古いものであることは明白である。第2次遺構は、溝SD 3、土坑SK 3、柱穴などからなりたつ（図38）。SD 3は浅い溝であるが、SD 1・SD 2のように灰色砂を包含せず、流路状の遺構とは考えられない。板状鉄斧が出土したSK 3（図版15-1）は、弥生中期末の遺構である。

これら弥生第1次遺構と第2次遺構の詳細な年代については、遺物が僅かであるため、明確にし難い。ただ、第2次遺構のSK 3が弥生中期末であるところから、第2次遺構をほぼ中期末段階に、そして第1次遺構をそれよりやや新しい段階のものと考えておきたい。

III 1～III 7・III 17はSK 3出土遺物である（図39・40、図版17）。III 1は口端部に凹線を有する壺。III 2は頸部に断面三角形状の隆帯を併行に貼る壺。III 3は頸部に1条の隆帯を貼り、隆帶上に刻む壺である。III 4は頸部に短い斜線文を施す小形の壺である。III 5は壺

遺構と遺物

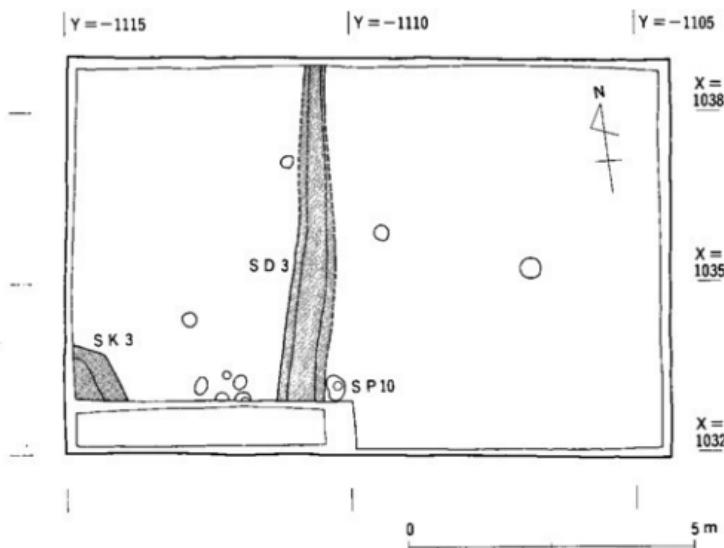


図38 弥生時代第2次遺構 縮尺1/100

の底部。III 6は端部に凹線を施す高杯の脚部である。III 7は口唇をつまみ上げる特徴をもつ壺である。III 2はやや古い段階の特徴を示すが、その他のIII 1・III 3・III 4・III 6・III 7は、中期末の凹線文土器の特徴を示しており、SK 3はその段階のものと考えられる。なお、SK 3からは、III 17の板状鉄斧が出土している。幅3.9cm、残長11.8cm、厚6~8mmで、刃部側の先端部が欠けている。文京遺跡では、第3次調査に統いて2例目の出土例である。

III 8は弥生時代第2次遺構の柱穴SP 10の出土のものである(図39)。おそらく中期末段階のミニチュアの壺と思われる。

III 9~III 16は暗茶褐色土出土遺物である(図39)。III 9は壺の頸部で、隆帯上に布の圧痕を残した刻みを施すものである。III 10は高杯の脚部。III 11~III 13は壺の口縁部。III 11は頸部に1条の隆帯を貼り、細い刻目を施す。III 12~III 13は口唇部をつまみあげる特徴をもつもの。III 14~III 16は壺の底部。III 11が中期中葉、III 10が後期前葉の特徴を示すが、その他は中期末の特徴を示している。なお、赤褐色土内からは、III 18のような分銅型土製品の下半部が出土している。(図40)

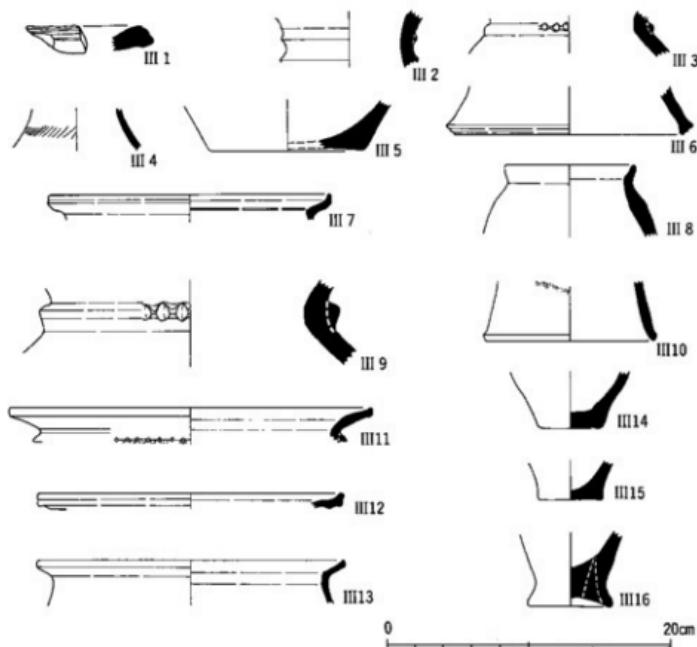


図39 土坑SK3出土遺物（III 1～III 7）、柱穴SP10出土遺物（III 8）、
暗茶褐色土出土遺物（III 9～III 16） 縮尺1/4

(3) 繩文時代

屋外炉3基が検出されている（図41、巻首図版）。屋外炉1は黄褐色砂質土上面で検出され、焼土面は薄く、ごく短期間の使用が推定される。縦80cm、横45cmの橢円形の範囲の土が焼けている。屋外炉2・3は黄褐色砂質土中で検出されている（図42）。屋外炉2は直径40cmの円形を描き、深さ5cmの炉である。炉の覆土には焼土を含んでいる。屋外炉3は直径30cmの円形のプランをなし、深さ3cmである。覆土内には明確な焼土塊はみあたらないものの、多くの炭化物が認められる。屋外炉3は屋外炉2とごく近接しており、一連のものとの可能性があるものの、一応分離して検出でき、両者とも屋外炉と認定しておきたい。なお、これらの炉は、周辺に住穴や住居址の肩部が検出できなかつたため、住居址内の地

遺構と遺物

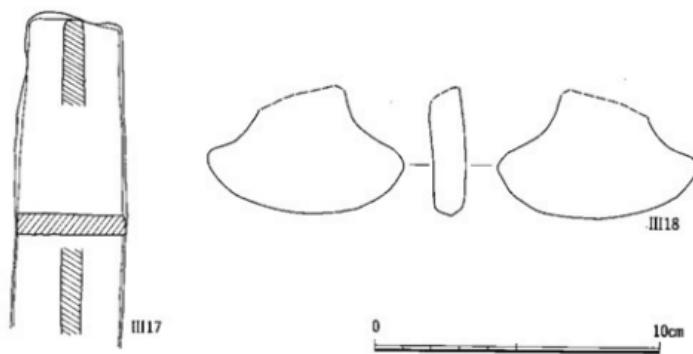


図40 SK 3出土遺物 (III-17 赤褐色土出土遺物 (III-18) 鏡尺2

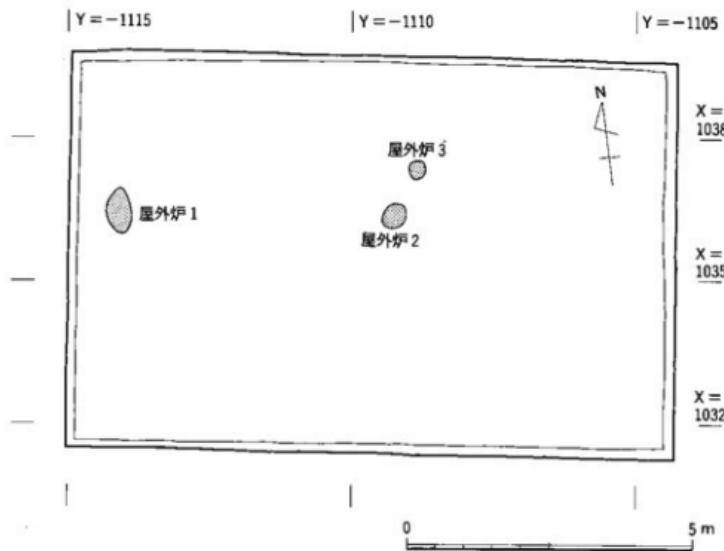


図41 屋外炉1・2・3

文京遺跡第11次調査

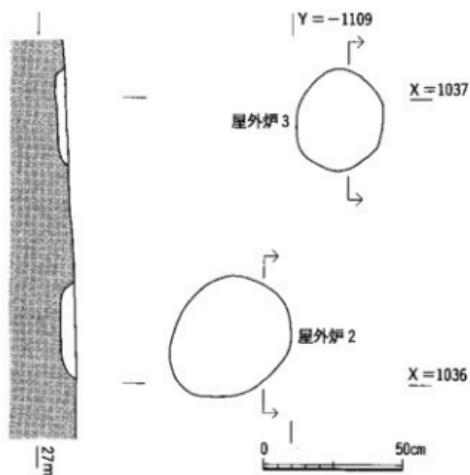


図42 屋外炉 2・3 比尺1/20

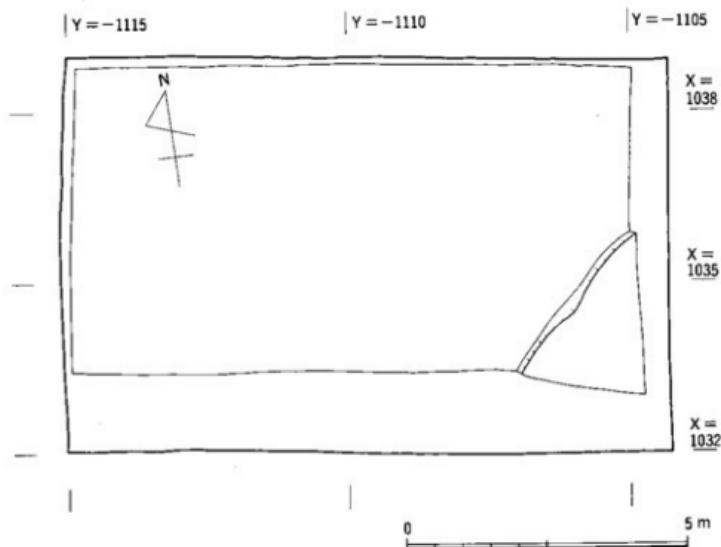


図43 旧河道肩部

遺構と遺物

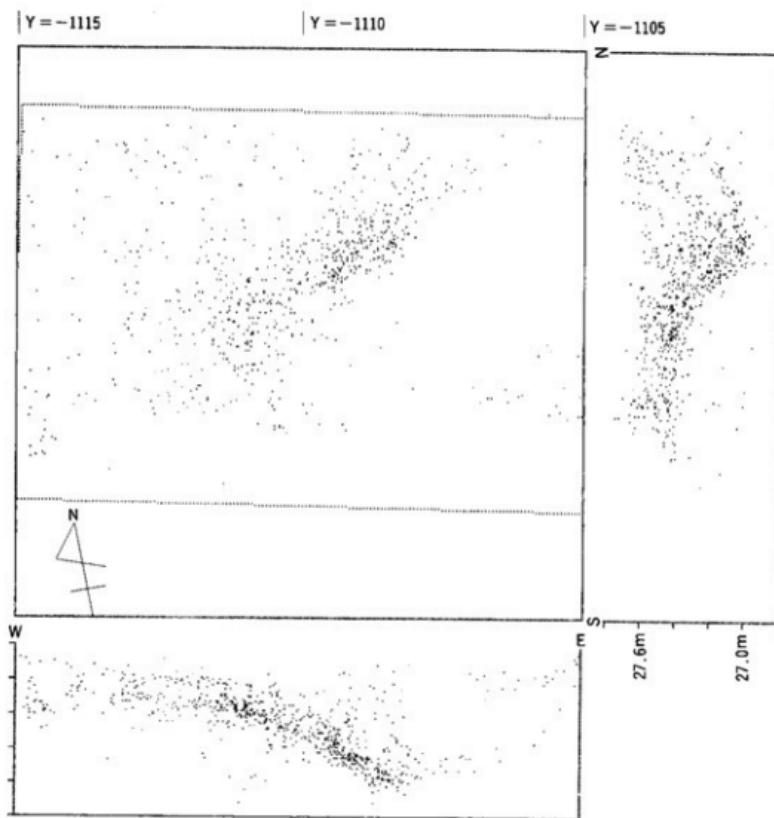


図44 繩文土器・石器の分布 縮尺1/100

床炉とは判断できず、屋外炉と認定しておきたい。

出土した縄文土器や石器は、当初黄褐色粘質土以下の分層が不可能であったため、すべて原位置を記録して取り上げた。815点に達する。取り上げにあたっては図版18~21に示すように、深さ約10cm単位の人工層位を設定し、面ごとに遺物の原位置を記録して取り上げた。なお、そこでいう第1面とは黄褐色粘質土以下で最初に縄文土器が検出された面を第

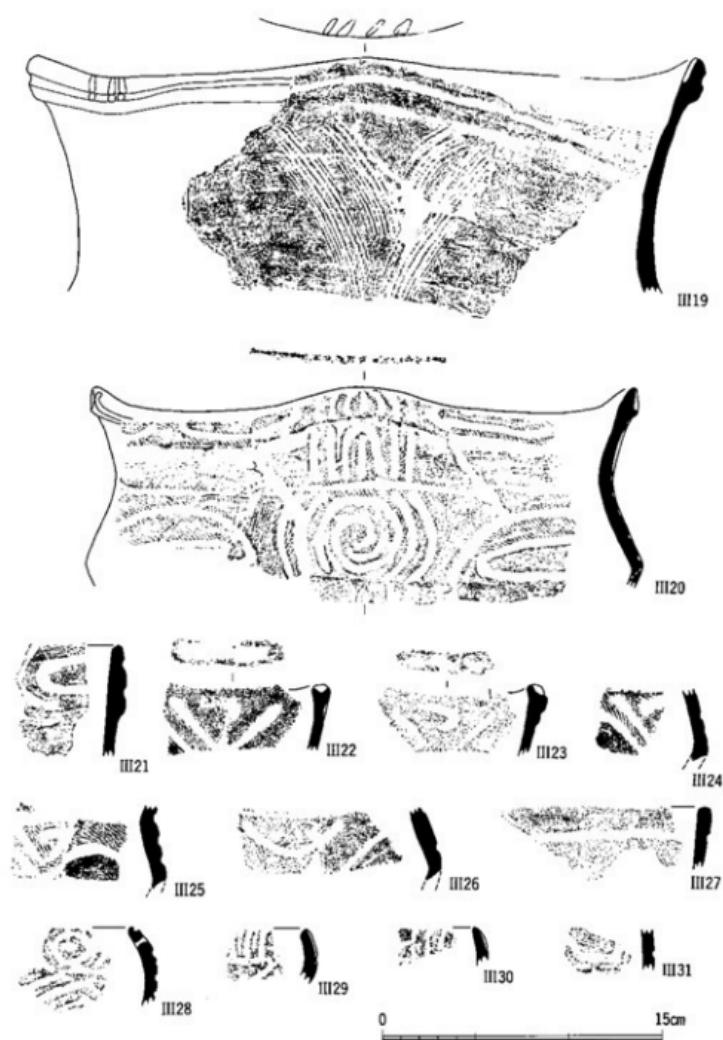


図45 有文深鉢A類 (III21), 有文深鉢B類 (III19), 有文深鉢C類 (III20),
有文深鉢D類 (III22~III26), 有文深鉢E類 (III27), 有文鉢a類 (III28~III31)



図46 有文鉢 b類 (III32~III36)

1面とし、以下厚さ約10cm単位で人工層位的に面を設定し、堀り下げられて後、第9面までが設定された。さらにそれらの資料は、パーソナルコンピューターを使って浜崎一志らが開発したデータベースと出土分布表示プログラムに入力され、土器や石器の分布を明らかにしてみた。図44である。この図からは、縄文時代の遺物が、調査区の東北から南西に向って帯状に集中的に分布し、しかも擂鉢状に堆積している状況が明らかであろう。これは、層位の説明で示した調査区南東隅の灰色砂礫の落ち込みに符号している。すなわち、これら遺物の堆積時は、図43に示す旧河道の攻撃面によってできた灰色砂礫の落ち込みにより、旧地形はこの部分で急激に傾斜しており、それに伴って遺物の堆積がこの落ち込み部分に集中したものといえよう。同時に、この遺物集中地点は地焼炉1・2の位置にも相當している。従って、旧地形による堆積しやすい地形環境とともに、生活面として利用された地点に遺物が集中しているということも推測できるのである。

以下、出土縄文土器の説明を行う。有文深鉢、有文鉢、粗製深鉢、浅鉢、底部の順に、説明したい。これを説明するにあたって、有文深鉢はA～E類の5類に、有文鉢はa、b2類に細別した。また粗製深鉢はI～V類に区分できる。I類は口縁外面が肥厚する粗製深鉢形土器、II類は口縁内面が肥厚する粗製深鉢、III類は条痕調整による粗製深鉢、IV類は撫で調整による粗製深鉢、V類は荒い指撫で状の調整が施される粗製深鉢である。

有文深鉢 (図45、図版23・24-1) 有文深鉢はA～E類の5類に細分できる。

A類 (III21) : 口縁が幅広く肥厚して、肥厚部に方形区画帯をもつもの。縁帯文土器であり、近畿でいえば北白川上層1期、瀬戸内東部では津雲A式にあたる。

B類 (III19) : A類に比べ肥厚の幅が狭く、方形区画帯も消失して1条の沈線となって

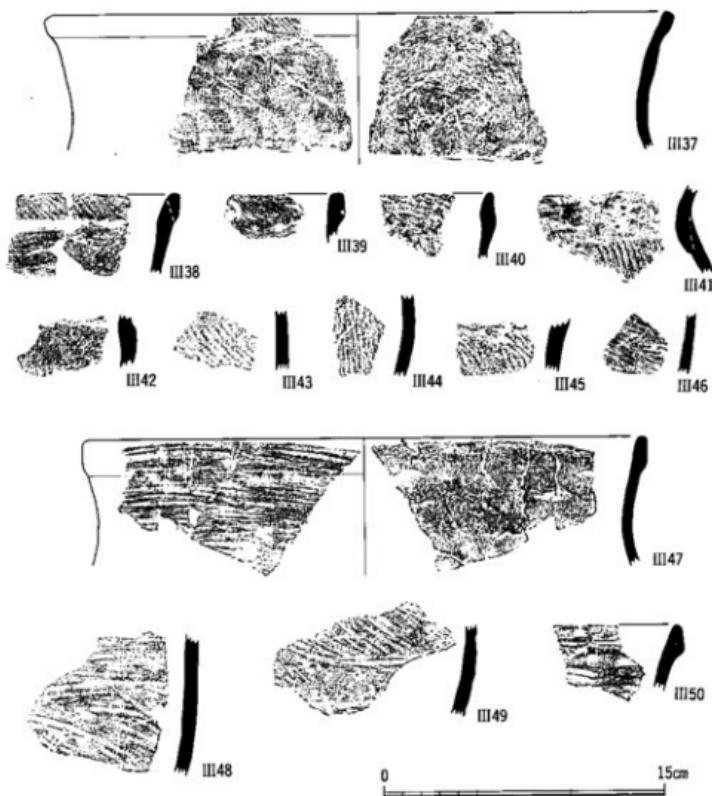


図47 粗製深鉢 I a 類 (III37~III46), 粗製深鉢 I b 類 (III47~III50)

いるもの。波頂部の内面には口唇に接して4条の短沈線が刻まれる。また、波頂部間の最も低くなっている肥厚部外面には、少なくとも3条以上の垂下沈線と円点文が施される。波頂部の例から推測すると、これは4条になる可能性が強いと思われる。また、頸部には櫛歯状の斜線文が施されている。縁帶文土器の範疇に入るが、縁帶部の幅が短く、方形区画帯をもたないところから、A類より型式学的には新しいものと考える。

C類 (III20) : B類と同様な肥厚帯をもつが、肥厚帯にR Lの繩文を施し、頸部以下の

遺構と遺物

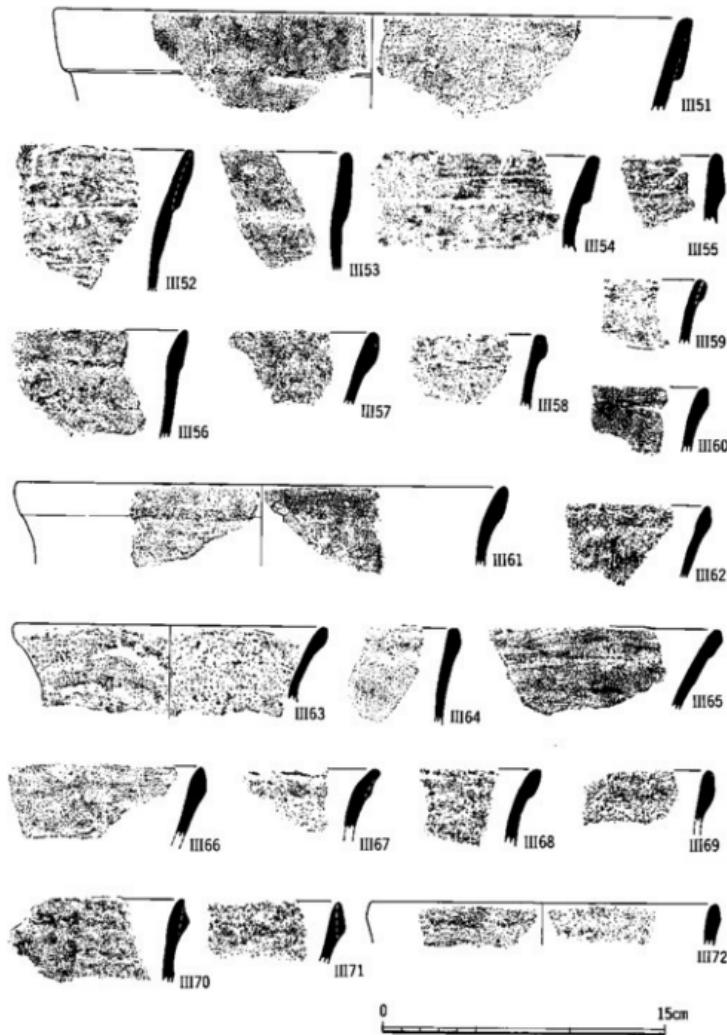


図48 粗製深鉢 I a 類 (III51~III55), 粗製深鉢 I b 類 (III56~III72)

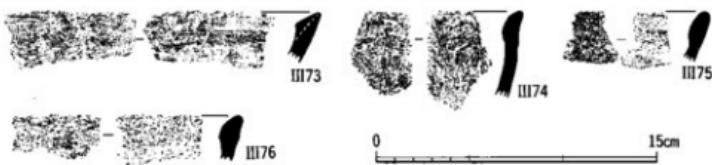


図49 粗製深鉢II類 (III73~III76)

文様がB類と異なる。また胎土もB類に比べ精良で、色調も明褐色を呈しており、B類と異なる。器形はB類に比べ胴部のはりが鋭く頸部も短い。波頂部の肥厚帯に7条の沈線を施し、波頂部口唇のみに8つの刻み目を施す。波頂部から横に延びる1条の沈線文は波頂部間で1度切れ、円点文が施される。頸部は、波頂部下に5条の垂下沈線文と逆U字形の沈線文が施され、沈線文付近のみRLの繩文が施される。胴部は1条の横沈線で区画され、渦巻文と弧線文が交互に繰り返されるものと想定される。胴部は羽状のRL繩文が施される。主文の文様構成は、西南四国の中平城II類にみられるものと類似している。

D類 (III22~III26) : III22・III23は波頂部で、A~C類のような肥厚部をもたない。波頂部口端面は少し窪められている。逆三角形状の沈線が2重に施され、RLの繩文が充填されるとともに、三角形状沈線内には沈線文が施される。III24~III26はC類のような胴部屈曲部にあたる。沈線文間にRL繩文が充填される。これら胴部と波頂部は胎土や焼きの類似性と、II22~III26にみられる三角形状沈線文の文様構成の類似性から、同一個体の可能性が高いと判断される。

E類 (III27) : 直口口縁で、一条の沈線間にRL繩文が充填されている。有文浅鉢である可能性も高い。

有文鉢 (図45・46、図版24-2) 有文深鉢に比べ口径が小さく小型であり、鉢型土器として区別できる。a類とb類が存在する。

a類 (III28~III31) 口縁部が幾分内湾する鉢形土器であり、胎土・焼きの具合から1個体と考えられる。口縁部には、渦文を中心に弧文を配し、そこから横方向に直線文が延びるもので、基本的には有文深鉢C類の縁帶部や有文鉢b類の口縁部文様と同一である。なお口縁部以下の沈線文の構成は不明である。

b類 (III32~III36) 胎土、焼き、文様の特徴から同一個体と考えられるものである。口縁の中心部に、10条の垂下沈線が4条と6条で互いに弧状に向かいあいつつ施され、その端から横方面に1条沈線文が延びるものである。文様の構成は基本的に有文深鉢C・有

遺構と遺物

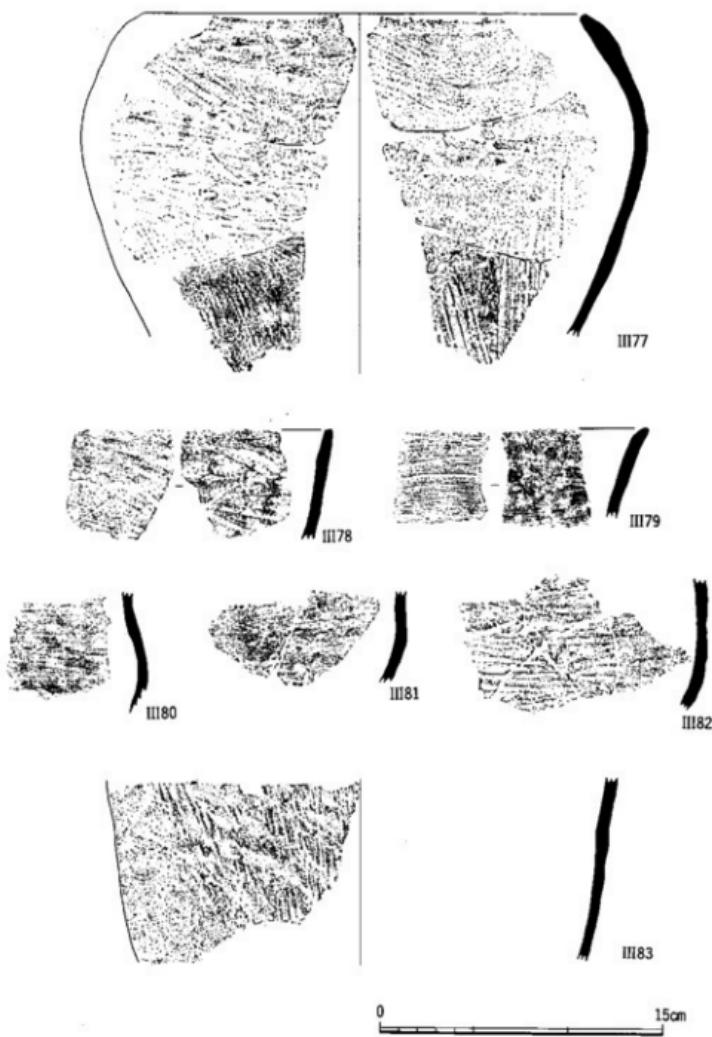
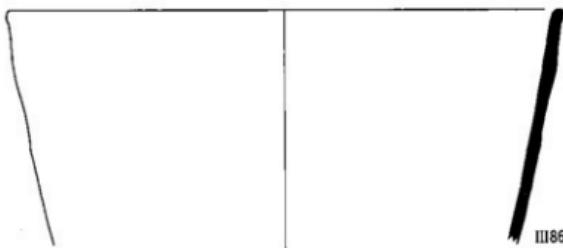
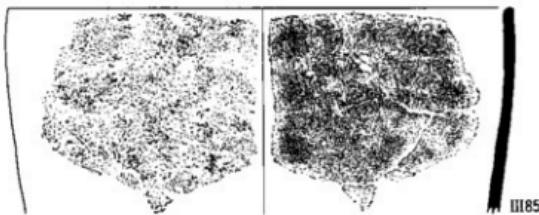


図50 粗製深鉢Ⅲ類 (III77~III83)

文京遺跡第11次調査



0 15cm

図51 粗製深鉢IV類 (III-84~III-87)

遺構と遺物

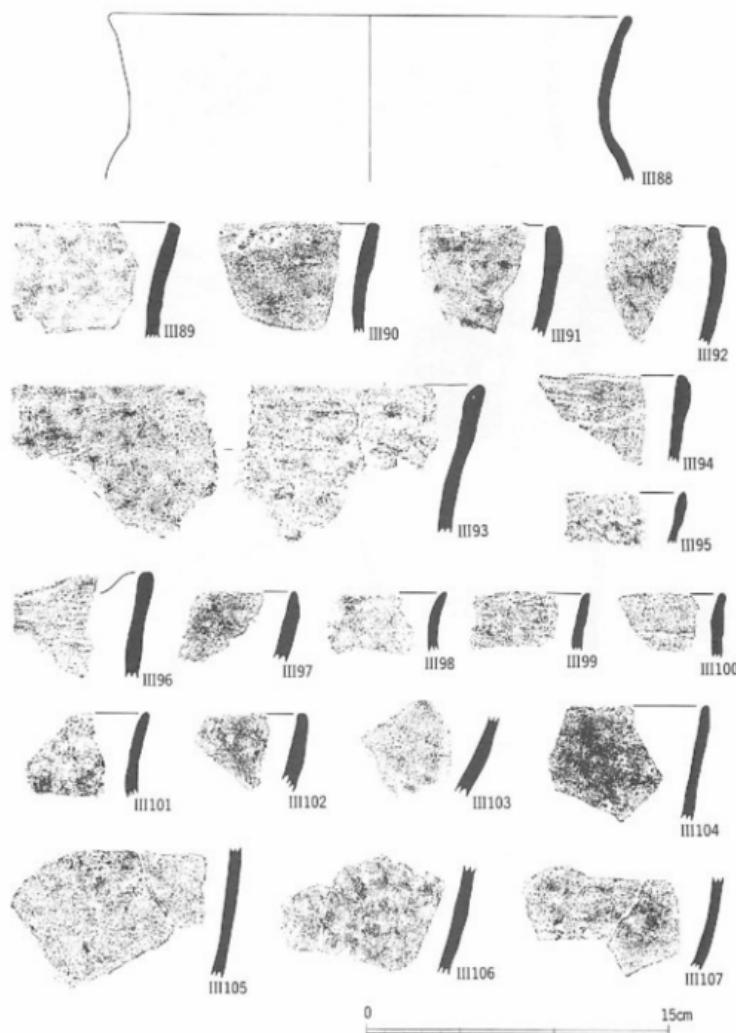


図52 粗製深鉢IV類 (III88~III107)

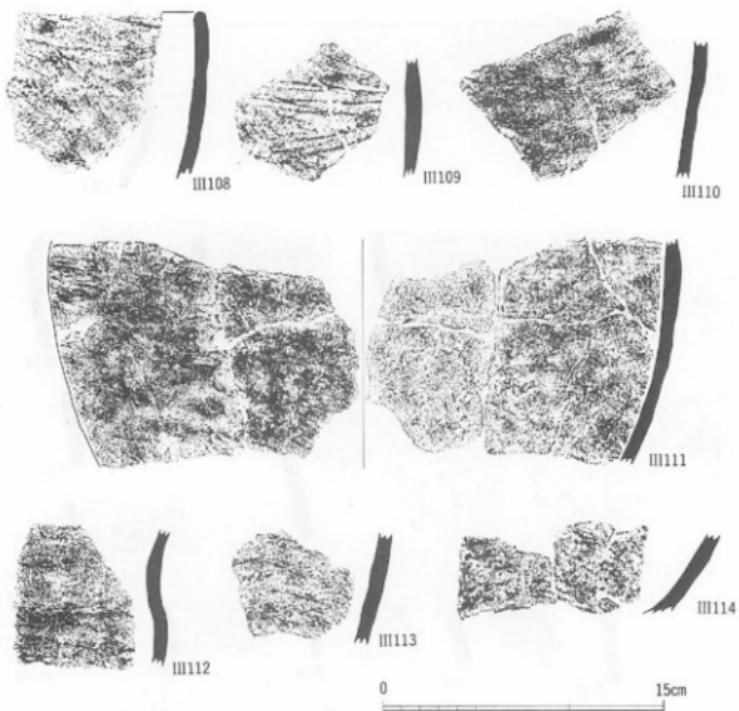


図53 粗製深鉢V類 (III108~III114)

文鉢a類に共通する。口縁部文様以下は、3本沈線の絡み手文からなりたつ。3本沈線間にR L繩文が施される。III34~III36は、この土器の底部近くの文様構成を示している。

粗製深鉢 I~V類に区分する。

I類 (図47・48) クの字状に口縁が外反し、口縁が肥厚する粗製深鉢形土器で、Ia ~ Id類の4類に細分できる。

Ia類 (III37~III46, 図版25-1) : 口縁部がクの字状に外反し、肥厚部分にR Lの繩文を転すもの。またこのタイプの深鉢は胴部以下にも繩文が施される。III37~III40が口縁部肥厚部分。III40は肥厚が若干弱めであるが、繩文帯は頸部との区別が意識されている。III39は肥厚部に円点文が施される。III41~III46は胴部以下のR L繩文帯である。III43は頸



図54 浅鉢 (III115・III116)

部と胴部の境に1条の沈線が施される。

I b類 (III47～III50, 図版25-1) : I a類と同様に口縁部がくの字状に外反し、口縁が肥厚する器形を呈する。外面の調整が巻貝条痕地であるところに特徴がみられる。III48～III50は、胎土や色調から、III47と同一個体であると思われるものを図示した。

I c類 (III51～III55, 図版25-2) : 器面の調査が撫で調整されるもので、肥厚部の幅が幅広であるものをさす。III51・III53～III55は同一個体と考えられる。

I d類 (III56～III72, 図版25-2・26-1) : I c類と同様に器面調整が撫でである。肥厚部はI c類より幅が狭く、I a・I b類と同様ないしそれ以下のものである。また肥厚部は、断面方形状のものとともに断面三角形状の肥厚の弱いものもみられる。III63・III72に認められるように、小型の粗製深鉢も存在する。なお、III58～III60, III67・III68, III70・III71はそれぞれ同一個体と考えられるものである。

II類 (図49, 図版26-1) 口縁部内面が肥厚する粗製深鉢である。III73～III76が該当し、みな撫で調整がなされる。

III類 (図50, 図版26-2) 巾貝条痕が器壁外面に施される粗製深鉢である。III77～III79は器壁内面にも巻貝条痕が認められる。器形としては、III78・III79のように直口口縁を呈するものや、III80・III81のように胴部で一度屈曲して口縁がくの字状に外反するものなどがある。また、III78のように口縁が内湾するものもあり、口縁部の巻貝条痕は横方向、胴部下半は縦方向の巻貝条痕が施されている。III83は、III78・III79のようにおそらく直口

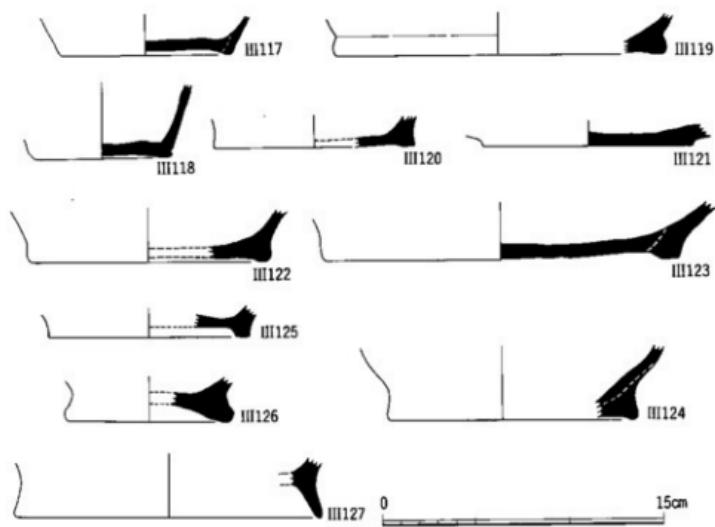


図55 底部 (III117~III127)

口縁を呈する粗製深鉢であろう。

IV類（図51・52、図版27・28-1） 器面が撫で調整される粗製深鉢である。III84~III86は直口口縁を呈するもの。III87・III88は口縁が外反し肩部が形成される深鉢で、深鉢a・b類やIII類と器形的には共通する。その他のIII89~III95・III97~III101はどちらの器形を呈するか不明なものである。III93のように器壁内面に巻貝調整を残すものもみられる。また、口唇部は、面取りがなされるIII84~III91と、口唇が丸味を帯びるIII92~III107に分かれる。なお、III102・III103は同一個体であり、色調が明褐色であり他の土器群と区別される。III104~III107も同一個体と考えられる上で、直口口縁を呈するであろう。器壁外面を丁寧に撫で調整されるところに特徴がみられる。III96は波状口縁を呈している。その他、III85・III86、III89・III90は、それぞれが同一個体と考えられるものである。

V類（図53、図版28-2） 指撫で状の荒い撫で調整が施される粗製深鉢である。III108・III109のように撫での単位がよく残っているものもみられる。これらは同一個体の可能性が強い。口唇は丸味をもって終わっている。III110~III113は胴部部分であるが、III112のように口縁がくの字状に外反する器形も認められる。III114は底部付近である。

浅鉢（図54、図版24-2） 浅鉢として認められるものは2点しかない。III115は有文浅

遺構と遺物

| | | | | | |
|---------|-------------|----|---------|---------|--|
| 精 製 深 鉢 | 有 文 深 鉢 A | 1 | 5 | 7(13%) | |
| | 有 文 深 鉢 B | 1 | | | |
| | 有 文 深 鉢 C | 1 | | | |
| | 有 文 深 鉢 D | 1 | | | |
| | 有 文 深 鉢 E | 1 | | | |
| | 有 文 鉢 a | 1 | 2 | | |
| | 有 文 鉢 b | 1 | | | |
| | 粗 製 深 鉢 I a | 4 | 4(9%) | 45(83%) | |
| | 粗 製 深 鉢 I b | 1 | | | |
| | 粗 製 深 鉢 III | 3 | | | |
| | 粗 製 深 鉢 I c | 2 | 37(82%) | | |
| | 粗 製 深 鉢 I d | 12 | | | |
| | 粗 製 深 鉢 II | 4 | | | |
| | 粗 製 深 鉢 IV | 18 | | | |
| | 粗 製 深 鉢 V | 1 | | | |
| 浅 鉢 | | 2 | | 2(4%) | |
| | | | 計54 | | |

表2 11次調査資料土器組成

鉢である。3本の幅広の平行沈線文が施され、それ以下は5本単位の垂下沈線文が施される。器面の依存情況がやや悪いため、3本沈線間に網文が転がされたかどうかは不明である。III116は無文の浅鉢で、器壁内外面が丁寧に撫でられているもの。

底部（図55） 平底と高台状に脚部が発達するものに分かれる。前者がIII117～III124、後者がIII125～III127である。またIII118は器壁が薄く、やや特異な様相を示す。これら底部の大半は深鉢に伴うものと思われる。

以上眺めてきた網文土器については、これらが单一の時期のものであるかが問題となる。有文深鉢・有文鉢について振り返って考えてみよう。有文深鉢B類と有文深鉢C類は、口縁部形態の類似性から同一時期のものと判断された。この内、有文深鉢B類は瀬戸内來の縁帶文土器、有文深鉢C類は南西四国の文様構成の系統をひくもので、系統差が明確である。また、有文深鉢C類、有文鉢a・b類は、器形は異なりながらも、口唇に接して施される口縁部文様帶の文様構成の類似性が指摘でき、同時期の様式的な把握が可能である。有文深鉢D類に関しては、その位置づけが不明であるものの、器形的に有文深鉢C類に近い形のものと想像される。ただ有文深鉢A類に関しては縁帶文部分が幅広く有文深鉢B類に型式学的には前出する傾向を示すものの、僅か1点の少片であることから、様式的な把握としては除外して考えたい。そうすると、これら有文深鉢、有文鉢は、それぞれ

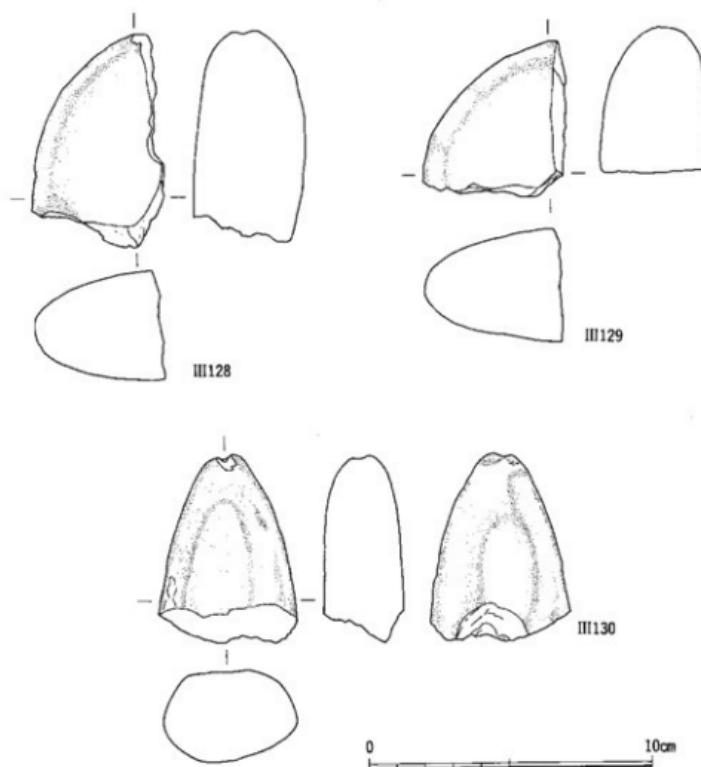


図56 磨石（III128・III129）、磨製石斧（III130）縮尺1/4

様式的把握の属性は異なりながらも、全体的には比較的単一時期のものと考えられる。図版22-1に示されるように、有文深鉢・有文鉢の分布傾向には、層位的な差も認められず、擂鉢状の落ち込み部に向けて落ち込んで散在する土器群としての把握が適切であろう。従って有文土器を比較的一括性の高いものと見做すならば、粗製深鉢土器や浅鉢土器も同一段階のものと考え得る。ちなみに粗製深鉢I～V類の分布差を図版22-2で眺めてみると、大きな堆積状況の差も認められず、上記の見方の傍証になるものと考えられる。従つて有文深鉢B類を津雲A式新段階と認定するならば、本調査で発見されたこれらの資料

遺構と遺物

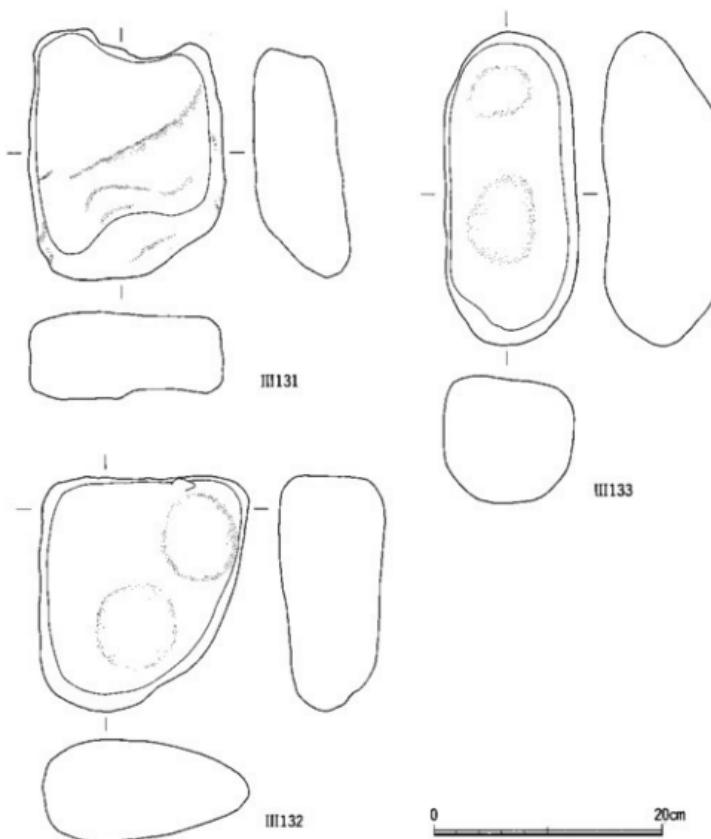


図57 石皿 (III131~III133) 縮尺1/5

は瀬戸内西部における津雲A式新段階のセット関係を示すものといえよう。そこには有文深鉢C類のように南西四国の系統をひくものもみられ、本地域の特色をよく示している。また、これらを一括遺物と考えるならば、精製深鉢や浅鉢の数量が粗製深鉢に比べ遙かに低いことが認められる。これを客観的に示すために、口縁部破片を個体識別法によって個体数を算出し、その量比を表したのが、表2である。この表によって、粗製深鉢の数量比

が精製深鉢や浅鉢より高いことが認められよう。おおよそ浅鉢を含めた精製土器と粗製土器の量比は1:4といえよう。また、粗製土器の内、縄文が施される粗製深鉢Ia類、巻貝条痕が施される粗製深鉢Ib・III類、撫で調整が施される粗製深鉢Ic・Id・II・IV・V類は、それぞれ9%、9%、82%と圧倒的に撫で調整が多いところに特徴がみられる。これらの傾向は、僅か80m²たらずの調査地での傾向であるので信用し難い面もみられるが、今後比較資料を増やすことによって、当該地域の津雲A式新段階の客観的なあり方になることを願いたい。

出土した石器は、石斧、磨石、石皿である(図56・図57、図版29)。石鎌や石錐は発見されていない。III130の磨製石斧は暗茶褐色粘質土中より出土したものである。刃部側が欠損している。残長6.5cm、幅4.8cm、厚さ3.1cm、重さ140g。変斑柄岩(metagabbro)製である。この石材は、地質構造区分上、中央構造線の南側に位置する三波川帯および御荷鉢帯に分布する。¹⁶⁾すなわち大洲市、喜多郡長浜町、伊予郡双海町・中山町で産出する。従って、道後平野では採集できない石材であることに興味がもたれる。III128・III129は磨石である。ともに砂岩製で欠損している。III129は焼けた痕跡を残す。III128は残長7.5cm、残幅4.6cm、厚さ3.9cm、重さ160g。III129は残長5.5cm、残幅5.0cm、厚さ3.7cm、重さ130gである。III131～III133は石皿である。これらの石皿は、凹部を有さないものの、磨面がみられる。III131～III133は砂岩製である。III131は長さ22cm、幅17cm、厚さ7.8cm、重さ5kg。III132は長さ20.6cm、幅18cm、厚さ9.5cm、重さ5kg。III133は長さ27.5cm、幅11.6cm、厚さ11.1cm、重さ5.5kgである。なおIII131は側面に焼けた痕跡がみられる。

4 小 結

本調査区は、弥生時代の集落址が発見された第3次調査地点から僅か30mしか離れていないところから、その集落の延長が存在するものと当初予想された。ところが、調査面積が僅か80m²であることも手伝って、明確な住居址などを検出することはできなかった。ただ土坑SK3からは、弥生中期末の板状鉄斧が出土しており、周辺には弥生時代の生活遺構が検出される可能性は否定できない。また板状鉄斧は、文京遺跡において第3次調査に次ぐ出土例であり、注目されよう。

さらに最も注目すべきことは、弥生時代遺構面下の黄褐色砂質土上面あるいは黄褐色砂質土中において屋外炉が3基検出されたことである。従来黄褐色粘質土以下の土層で発見された縄文土器を、旧石手川系の灰色砂礫の埋積後に黄褐色土が埋積する際に流れ込んだ

小 結

ものと判断していた。しかしながら、屋外炉の発見によって、少なくとも黄褐色砂質土の堆積段階には、周辺の畠状地は安定しており、生活面として利用されていたことが明らかとなった。また、この時期、本調査区では南東から北西に向けて旧地形は急激に落ち込んでいたと判断される。これは灰色砂礫の埋積時に、旧石手川の攻撃面として形成された段差に基づくものであろう。その地点に屋外炉が2基存在するとともに、傾斜地形に応じて、縄文土器が壇鉢状に集積している。これらの縄文土器は一括性の高い資料であり、縄文後期の津雲A式新段階に相当している。瀬戸内西部では、この段階の遺物がまとまって出土したのは初めての例である。それらの土器群は、瀬戸内系の縁帶文土器もみられるが、南西四国の平城II類に類似した文様構成や特異な器形を呈するものもみられ、本地域が瀬戸内と南西四国の両系統の土器の交錯する地帯であることを特徴づけている。その位置づけについては第5章で詳述される。また、縄文土器とともに出土した石器は石皿や磨石からなる。その出土量は少ないものの、屋外炉の存在からも、本調査地区が堅果類を加工する場として利用されていたと想定することも可能であろう。従って、周辺には縄文集落の存在も予想される。第7章で想定した古地形からも、その集落は、本調査地で幾分高い面をなす南東部分より東側に位置する微高地上ではないかと想像できよう。

なお、発掘調査終了後、層位ごとに柱状ブロックサンプリングを行い、中村純高知大学名誉教授に花粉分析を依頼したが、縄文時代に相当する黄褐色粘質土以下では花粉は検出できなかった。従って、花粉分析による縄文時代の古環境の推定は、本調査区では不可能であった。

最後に、花粉分析を行っていただいた中村純氏、さらに石材を教えていただいた愛媛大学教養部鹿島愛彦教授には、心より感謝の意を表したい。また遺物分布表示プログラムの使用を許可された京都大学埋蔵文化財研究センターの浜崎一志氏にも感謝したい。

[注]

- 1 愛媛大学埋蔵文化財調査室『愛媛大学埋蔵文化財調査室ニュース3』1989年
- 2 浜崎一志「マイクロコンピュータと遺跡調査－光波タキオメータとマイクロコンピュータによる遺物分布図の作成－」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度 1984年
- 3 泉拓良「後期の土器－近畿地方の土器－」『縄文化の研究』4 1981年
- 4 千葉豊「縁帶文系土器群の成立と展開－西日本縄文後期前半期の地域相－」『史林』第72巻第6号 1989年
- 5 木村剛郎ほか『平城貝塚』1982年
- 6 愛媛大学教養部鹿島愛彦教授の御教示による。

第5章 文京遺跡第11次調査出土の縄文土器の検討

宮本一夫

1 はじめに

文京遺跡第11次調査出土の縄文土器（以下、11次調査資料と略する）は、第4章で述べたように、包含層資料であるものの比較的一時的にかたまとった一括資料としての性格が強い。津雲A式新段階の範疇に入るものであり、愛媛県下ではまとまった資料としては初めての出土例である。11次調査資料に近接する時期のものに瀬戸内西部では川原谷式や谷田⁽¹⁾ III式⁽²⁾が相当しよう。これらの型式は、その実態が明確でなかったり、一括性の保証がなかったのに対し、11次調査資料は、その欠を補い、セット関係を把握するのに好適な材料となっている。また、瀬戸内西部の本時期の様相は、これまで不明瞭であり、その特質が理解されていなかった。縄文後期の縁帶文土器に相当する型式は、瀬戸内東部では津雲A式、彦崎K I式、彦崎K II式、四国西南部では平城II式が相当している。これら両地域の土器型式群と、11次調査資料がいかに関係しあうのかを理解すること、さらに九州の土器型式群との関係を明らかにすることは、瀬戸内西部の当該期の様相と瀬戸内海を通じた東西交流の基点としての本地域の役割が理解できるであろう。本稿では、上記の目的を果たすため、11次調査資料を分析することから始めたい。

2 11次調査資料の分析

第4章で述べてきたように、11次調査資料の有文土器は、有文深鉢A類を除けば1時期としての様式的把握が可能な土器の属性を有している。1つには口縁部の肥厚帯すなわち縁帶部であり、また1つには口縁部に構成される文様帶の類似である。前者の縁帶部は、幾分幅が狭く古式の縁帶文より型式学的には年代が下がるものである。後者の文様帶の類似は図示したように、中心部分の文様とそれをつなぐ直線文に特徴がある。これは、田中良之・松永幸男氏らの分析によれば、口縁部主文様⑤類と呼ばれているものに近い。有文深鉢C・有文鉢a・b類のそれぞれの口縁部文様を想像をまじえて模式的に示すと図58のようになる。それぞれは中心文様の一部が若干異なりながらも、ほぼ同一の文様帶を構成しているといってよいであろう。従ってこれら3者は同一時期のものとして認め得る。なお、深鉢A類は縁帶部の肥厚帯がしっかりしており、かつ口縁部文様に方形区画帯をもつことから、有文深鉢B・C・有文鉢a・b類よりも型式学的には前出するものである。と

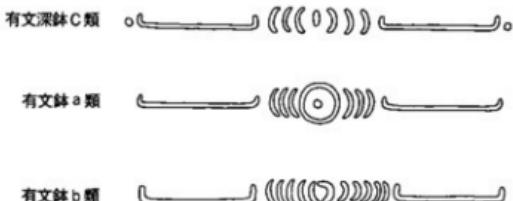


図58 有文深鉢C類、有文a・b類 口縁部文様式図

ところで、有文深鉢D類は文様構成や波頂部の形態が他の土器に比べて特異である。これと有文深鉢C類とほぼ同じ口径と推定して復元を試みると図59の有文深鉢D類のごとくなる。器形は有文深鉢C類に類似しながらも、口縁部や胴部の文様は逆三角形文様を主体とした文様からなる。第4章で示したように、出土状況において有文深鉢D類は他の有文土器と同様な堆積状況を示しており、同一時期のものとして捉えてかまわないであろう。また、他の精製深鉢や浅鉢も堆積状況からは一括遺物としての可能性が非常に高い。そこでこれらの土器の構成を示したのが図59である。この土器群を瀬戸内東部や近畿と対比してみるとどう位置づけできるであろうか。

近畿の縁帯文土器を編年的に細別したのは、泉拓良氏による北白川上層式1～3期までの細分がある。⁽¹⁾ また、これに併行させた形で、瀬戸内東部の編年を試みたのは千葉豊氏である。⁽²⁾ 津雲A式→彦崎K1式→彦崎K2式の推移がほぼ北白川上層式1期から3期に対応している。11次調査資料の内、有文深鉢A類の特徴は北白川上層式1期や津雲A式に該当するものとみて間違いないであろう。しかしながら先に示した有文土器の口縁部文様は、北白川上層式1期や津雲A式のものよりやや退化したものである。その他、粗製深鉢Ia類は北白川上層式1・2期、津雲A式・彦崎K1式に該当する。同じく口縁外面が肥厚するIb・Id類の特徴は近畿でいえば北白川上層式2期の特徴を示す。また有文土器の有文深鉢B類の頸部文様に使われる櫛描条線文も近畿でいえば北白川上層式2期に多用されている。従って、11次調査の資料は、北白川上層式1期や津雲A式の主体的特徴よりや年代的に下がる傾向を示している。ところが、瀬戸内東部でその時期に後続する彦崎K1式の段階では、口縁部内面肥厚帯に複合鋸歯文が施されるところに特徴があるが、11次調査資料にはみられない。これを時期差とみると、地域的な特徴の違いとみるか議論の分かれるところである。ともかく彦崎K1式の主体的特徴が11次調査資料にみられないところ

文京遺跡第11次調査出土の縄文土器の検討



図59 文京遺跡第11次調査資料組成図 缩尺1/6

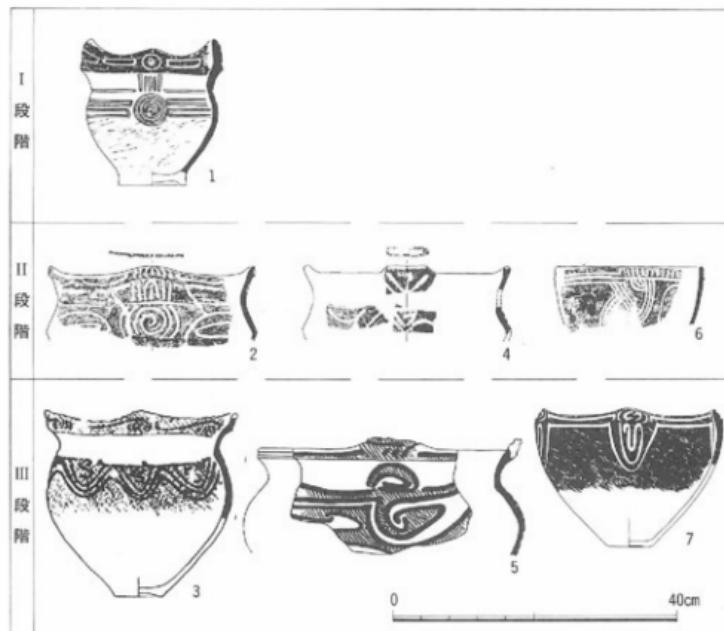


図60 平城II式から平城I式への変化過程

から、11次調査資料を彦崎K1式より古い津賀A式の新段階に相当するものとしておきたい。

次に有文土器の系譜について考えてみたい。口縁部形態は異なるもののほぼ同様な土器形態を呈する有文深鉢C・D類はどうであろう。有文深鉢C類（図60-2）の文様構成は、南西四国の平城II式と呼ばれるもの（同1）と同様である。ただ平城II式より縁帶部の肥厚が弱まり、縁帶文の文様も方形区画帯が省略され、単沈線文となっている。また平城II式にみられた渦文も重弧文となって幾分退化している。同じく胴部に於て、平城II式では渦文の両側に配される横方向の2条の区画帯が、有文深鉢C類の場合、弧線と1条の区画帯に省略されるとともに、意識的な繩文の充填がなされている。おそらくこの次の段階と考えられるものに平城II式の別のタイプ（図60-3）がある。これは、縁帶文の肥厚帯が退化し、図60-3で示したように、口縁よりやや下がった位置に粘土紐を貼りつけて縁帶部を形成するもので、一連の肥厚帯の省略過程にあたるものと考える。同時に縁帶部の文

文京遺跡第11次調査出土の縄文土器の検討

様は横方向への連結を意識するかの動きが認められる。また胸部文様の消失とともに、胸部文様も横方向への連続性がみられる。この胸部文様は、有文深鉢D類（図60-4）にあった逆三角形文様のモチーフの省略化ともみられよう。ところで西脇対名夫氏は、九州の鐘崎式の成立過程を論ずる際に、平城II式から平城I式へ推移することを論証し、これまでの定説を覆す議論を行っている。⁽¹⁾この議論を肯首するならば、有文深鉢D類（同4）にあった逆三角形文様モチーフは、平城I式（同5）の胸部文様につながっているのではないかと想定される。同様に、平城I式（同5）の口縁部形態は、先に例示した平城II式の退化縁帶部（同3）の作りと同一であり、様式的にこの段階に併行しよう。従って、これまで平城式をI式とII式として区別されてきたものを、11次調査の有文深鉢C・D類を加えることにより、大きく3段階の変遷を読みとくことができるようになった。すなわち、縁帶部の発達した平城II式の1部（図60-1）から、有文深鉢C（同2）・有文深鉢D類（同2），そして、縁帶部の退化した平城II式の1部（同3）と、同様な口縁部形態を示し、横方向施文の盛んな平城I式（同5）といった変化過程である。また、このことは、有文深鉢C・有文深鉢D類と同時期である有文鉢a・b（同6）類が、平城I式にみられる鉢（同7）へと変化することでも立証できる。そこでは、深鉢と同様に口縁部文様の省略化と胸部文様の単沈線化として捉えられる。こういった平城式の変遷が認められる時、他の11次調査資料の系譜はどう理解できるであろうか。これを探るために、11次調査に隣接した南海放送遺跡の縄文後期の包含層資料の内容を検討してみたい。

3 南海放送遺跡資料の分析

南海放送遺跡は、縄文晚期後葉の凸帯文土器を有する包含層と縄文後期の包含層が明確に分層できた遺跡である。⁽²⁾第6章の地形復元で説明するように、この遺跡と11次調査地区

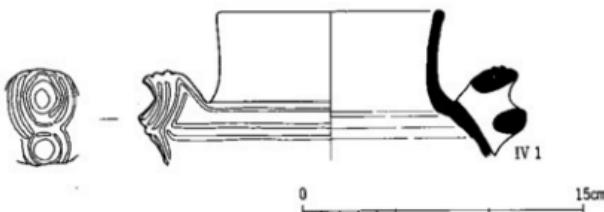


図61 南海放送遺跡1類(IV)

南海放送遺跡資料の分析

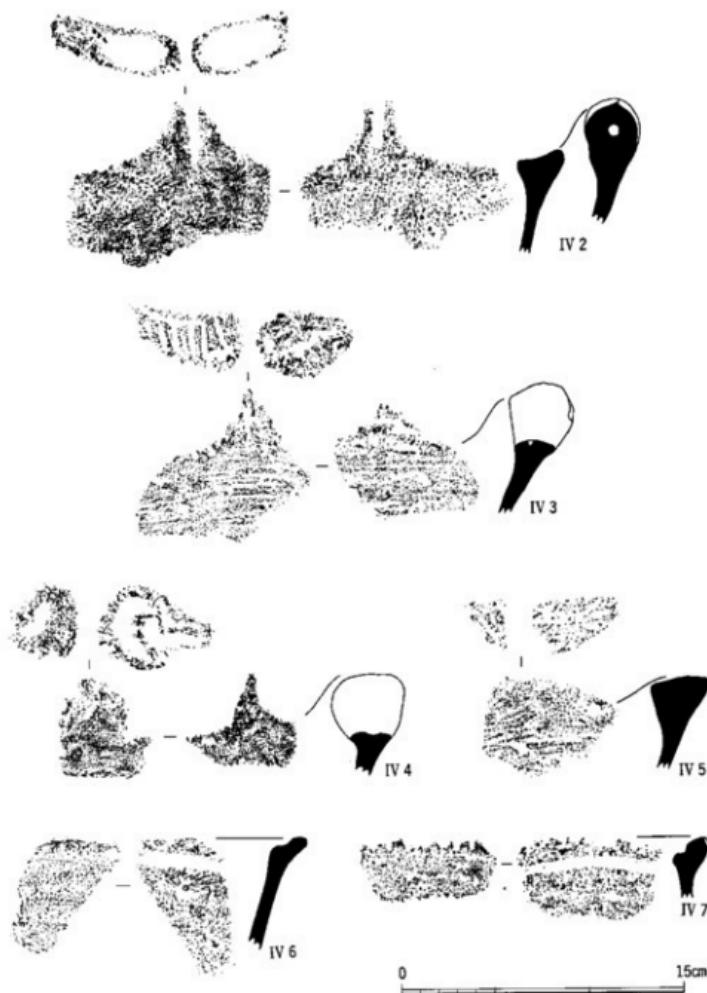


図62 南海放送遺跡2類 (IV 2 ~IV 7)

文京遺跡第11次調査出土の縄文土器の検討

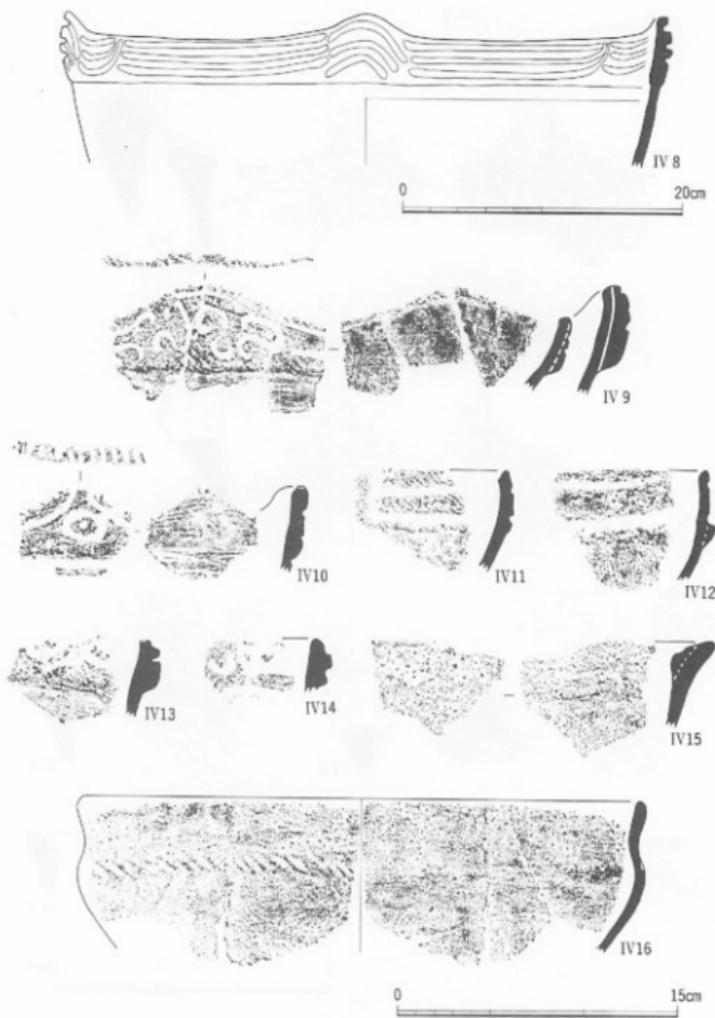


図63 南海放送遺跡3類 (IV 8～IV14), 4類 (IV15), 5類 (IV16) 縮尺IV 8のみ1/4

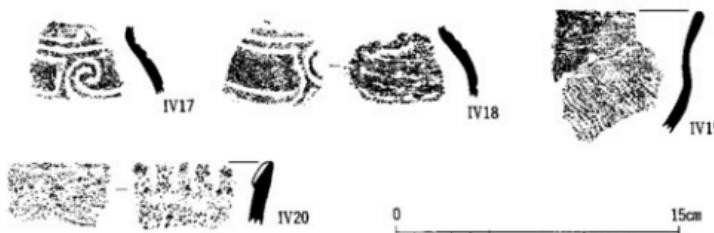


図64 南海放送遺跡 6類 (IV17・IV18), 7類 (IV19), 8類 (IV20)

とは谷を挟んで別々の尾根筋に立地している。しかしながら直線距離にして僅か400mしか離れておらず、同一の集落領域に入るものと思われる。本遺跡の後期の土器は、以下のように型式学的に細分することができる。以下、有文土器、無文土器、底部の順に説明していく（図61～図67、図版30～33）。

有文土器

I群

1類 (IV1) 壺形土器で、対向する把手を有する。中期末から中津式にこの種の壺がよく伴うところから、その段階に属するものと思われる。

II群

2類 (IV2～IV7) IV2～IV5は波状口縁の波頂部である。口縁部内面が肥厚するものである。IV3・IV5は波頂部側面に沈線文が施されるものである。なお、IV5は波頂部の先端が欠損している。IV6・IV7も同様に口縁部内面が肥厚するもので、口唇部に1条の凹線が形成される。なおIV7は口端部に刻目が施される。これら2類は、近畿でいう「四ツ池式」期あるいは千葉豊氏のいう広瀬土坑40・洗谷に相当しよう。

III群

3類 (IV8～IV14) 口縁外面が幅広く肥厚するIV8は、波頂部と波頂部内に口縁に沿って平行3本沈線が施され、最下段の直線文が立ち上ることによって文様が切れている。方形区画を意識した文様意匠と思われる。IV9・IV10はIV8と同様に幅広く肥厚する縁帶部が特徴である。IV9の波長部の文様は特異であるが、IV9・IV10ともに口端部が刻まれている。IV11は口縁部に方形区画文が施され、R Lの綱文が転がされている。IV12も同様の文様意匠と思われる。

4類 (IV15) 口縁部内面が肥厚するものであるが、2類のような凹線文は消失している。

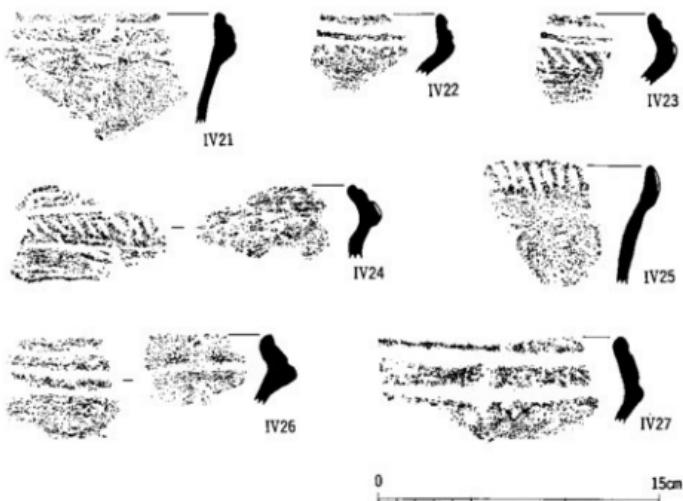


図65 南海放送遺跡 9類 (IV21~IV26), 10類 (IV27)

5類 (IV16) 浅鉢である。胸部の最大口径部に斜線文が刻まれているところに特徴がある。香川県善通寺市永井遺跡 S R8601に類例がみられる。津雲A式に属する。

3~5類のIII群は、以上のように津雲A式の特徴を示すものと考えられる。

IV群

6類 (IV17・IV18) 口縁部の形態は不明である。IV17・IV18は同一個体と思われる。横方向に連続する文様構成に特徴がある。類似した文様は、鳥取県崎ヶ鼻2式にみられる。

7類 (IV19) 小型の鉢である。口縁部の纏文帯は消失しており、胸部下半のみR L纏文が施される。

8類 (IV20) 口縁部内部の肥厚は微弱であり、内面の肥厚部を刻む。4類の系譜をひく退化型式と考える。

9類 (IV21~IV26) 口縁が肥厚せずに「く」の字形に屈曲するもの。口縁に平行沈線

V群

10類 (IV27) 口縁部の形態は不明である。側面の縦溝が複数ある。

南海放送遺跡資料の分析

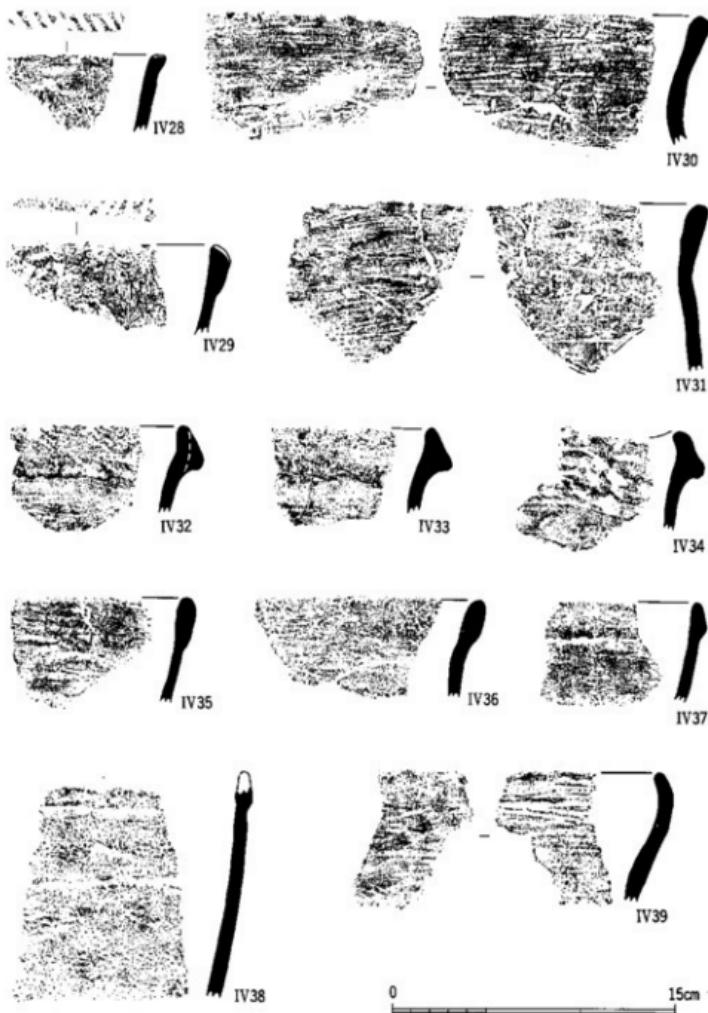


図66 南海放送遺跡11類 (IV28・IV29), 12類 (IV30・IV31), 13類 (IV32～IV34),
14類 (IV35～IV38), 15類 (IV39)

文京遺跡第11次調査出土の縄文土器の検討

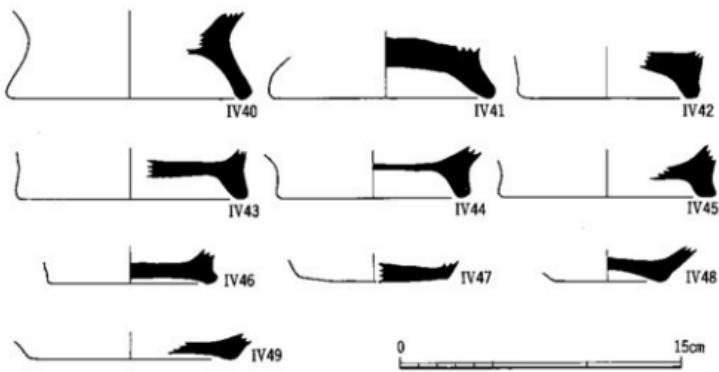


図67 内海放送遺跡底部

を施すものが多い。またIV23・IV24のように口縁屈曲部分に斜線文が付加されるものもある。IV25は口縁に斜線文のみが施される。

10類 (IV27) 9類に比べ、口縁の屈曲がしっかりしている。口縁には平行沈線が施されるが、沈線内の文様構成は器面が磨滅しており不明。

V群土器は、¹⁸口縁の屈曲形態から本地域でいう上野IV式に属し、南西四国の片柏・広瀬上層・伊吹町式に併行しよう。従って近畿でいえば、北白川上層式3期から元住吉山1式に、瀬戸内東部の彦崎K2式に相当しよう。

無文土器

11類 (IV28・IV29) 口端部が面取りされ、その口端部に刻目が施されるもの。器表面は撫で調整されている。

12類 (IV30・IV31) 器面には巻貝条痕が施され、口端部が心持ち膨らむもの。口縁は若干外反気味である。

13類 (IV32～IV34) 口縁が肥厚するもの。IV32は肥厚部にR Lの縄文が転がされている。有文土器のIII群に属するものであろう。

14類 (IV35～IV38) 13類に比べ口縁の肥厚が弱いものである。

15類 (IV39) 器面には巻貝条痕が施され、口縁は若干内湾気味に屈曲する。

これら無文土器のうち11・12類は、有文土器のI群あるいはII群に伴うものであろう。13・14類は口縁が肥厚する縁帯文土器であり、それぞれ有文土器の縁帯文土器であるIII・

11次調査資料の位置づけ

IV群に共伴するものと考えられる。口縁が内湾ぎみの15類は、器形の類推から有文土器のV群と同一時期のものと推測できる。

底部は、高台がつくIV40～IV46が多い。このうち、IV40・IV41は高台が最もしっかりとしており、上げ底気味になっている。IV47は僅か1例の平底である。IV48・IV49は底部が窪むものである。この凹底の底部は、V群の土器群によく認められる。

以上のように南海放送遺跡の資料は、有文土器を中心にI～V群に分けられ、それらに伴う形で無文の粗製土器のセット関係が想定された。そこでこれらの資料と11次調査資料を比較するならば、以下のようなようになろう。まず津雲A式に併行するIII群と11次調査資料を比較すれば、III群の縁部の肥厚の顕著さと、縁部の方形画区帯を意識した文様意匠は、11次調査資料より型式学的に先行するものである。また、彦崎K1式に併行するIV群は、6類の胴部の横方向の文様構成、7類の口縁部の繩文帯の消失、8類の口縁内面肥厚帯の退化形態から、11次調査資料のほうが前出することになろう。ただし、III群・IV群とも資料数が少く、それぞれの型式ごとに、系譜的に11次調査資料との関係を明確にすることはできない。相対的に、III群→11次調査資料→IV群→V群という推移を考えておきたい。これにより、近畿でいう「四ツ池式」期式から元住吉山I式まで、道後城北地区で連続的に土器群を把握することができた。すなわち、繩文後期前葉から後期中葉にかけて、城北キャンパス一帯の微高地には繩文人が嘗々と生活し続けてきたことが明らかとなったのである。そしてその開始は中期末から後期初頭にまで遡る可能性があるのである。微高地一帯で、集落の拠点を時代ごとに少しづつ移動させながら、生活環境を維持してきた可能性は高いものと思われる。

4 11次調査資料の位置づけ

これまで11次調査資料と南海放送遺跡資料との比較により、11次調査資料の相対的位置づけが明らかとなった。南海放送遺跡III群→11次調査資料→南海放送遺跡IV群である。南海放送遺跡III群は津雲A式併行、南海放送遺跡IV群は彦崎K1式併行と想定できることから、11次調査資料は両型式の間に位置することになる。従って、第2節で想定したように、11次調査資料を彦崎K1式より型式学的に古いということを強調することにより、津雲A式新段階という位置づけが妥当性を帶びることになった。また、有文土器C・D類の系譜関係から、西脇対名夫氏のいう、平城II式から平城I式への変化過程を妥当なものとしたわけであるが、平城I式すなわち北部九州でいう小池原上層式の位置づけは、どうなるのであ

文京遺跡第11次調査出土の縄文土器の検討

| 北部・東部九州 | 南西四国 | 瀬戸内西部 (道後平野) | 瀬戸内東部 | 近畿 |
|----------------|---------------|---------------------|-------|-----------------|
| 小池原下層 | + | 南海放送II群 | (洗谷) | 四ツ池 (広瀬土坑40) |
| 山鹿4類a 小池原上層 | 平城II式 平城I式 | 南海放送III群 11次調査資料 | 津雲A | 北白川上層式1期 |
| 鐘崎 | + | 南海放送IV群 | 彦崎K1 | 北白川上層式2期 |
| 北久根山 | 三里 | 南海放送V群 | 彦崎K2 | 北白川上層式3期 |

表3 地域別編年の併行関係

ろう。小池原上層式から鐘崎式が成立することはほぼ合意が得られるところである。その場合、鐘崎式は、近年香川県永井遺跡において、彦崎K1式に伴って出土している。¹⁰ そうすると、先に想定した平城II式から平城I式への3段階の変遷は、津雲A式段階から彦崎K1式へ移行する段階の細かな動きとして捉えられよう。そこで、こういった併行関係を整理する意味で、瀬戸内東部以西の千葉豊氏の該期の編年、さらに九州での鐘崎式成立過程を述べた西脇対名夫氏の編年を参考にして、当該地域の編年を位置づけてみると表3のようになろう。この場合、津雲A式や北白川上層式1期併行段階の編年がやや複雑になるものの、土器変遷を西日本共通の基盤でみなされるものとするならば、妥当なものと思われる。これによって、これまで明確でなかった、瀬戸内を媒介とする北部九州と近畿地方の編年あるいは土器変遷の併行性が理解できるものと思われる。また、両地域の交錯する地帯としての瀬戸内西部の特質が理解できるであろう。なお、北部・東部九州で、津雲A式・北白川上層式1期古段階併行としたものは、西脇対名夫氏が縁帶文土器成立期とした山賀4類a¹¹で代表させておく。

5 まとめ

これまで11次調査資料の位置づけを行なうことにより、瀬戸内東部の津雲A式から彦崎K1式へ変化する段階の瀬戸内西部の細かな過程を想定した。これは、南海放送遺跡の資

ま　と　め

料を加えることにより、縁帶文土器の瀬戸内東部での変遷を示すものでもあった。また西脇対名夫氏の南西四国・平城II式から平城I式への変化方向の想定を追認することになり、当該期の編年関係の整理を行ったことになろう。同時に、11次調査資料の有文深鉢C・D類のように、南西四国から東部九州に系譜が求められる一群も当該地域には存在している。また有文深鉢B類のように、瀬戸内東部や近畿の縁帶文土器の系譜をひくものもみられる。このことは、本地域が、近畿から瀬戸内東部にかけての系譜と、南西四国から東部九州にかけての系譜といった、大きく2つの系譜関係の影響を受けながら、独自の地域圏を構成していたということも想定できるのである。また、11次調査資料の分析からは、精製土器と粗製土器の比率が1:4と遙かに粗製土器の比率が高いことも明らかとなっている。今のところ正確な比較資料をもちえないが、該期の近畿などに比べれば粗製土器の比率が高いように思われ、本地域の特色をなすものになるかもしれない。一方粗製土器の調整法は撫でや巻貝条痕が主であり、かつ縄文の燃りもR Lが主であることは、瀬戸内東部の該期の傾向と一致している。これは瀬戸内を通した共通の特徴をしめしているものといえよう。

さて11次調査資料と南海放送遺跡資料を比較することにより、谷部を狭んだ2つの尾根状微高地に位置するそれぞれの遺跡は、今のところ遡って中期末ないし後期初頭から始まり後期中葉まで続き、そして晩期後葉にまた遺跡が出現するといった土地利用時期が明示された。さらに第9次調査の出土遺物を勘案すれば、縄文後・晩期にわたって遺跡は連続している可能性がある。従って、その時期には、城北キャンパス一帯の微高地部における堅果類や根菜類あるいは小動物を生業の背景として、縄文人たちが連續と生活し続けたことが明らかとなったのである。

京都大学埋蔵文化財研究センターの千葉豊氏、京都大学文学部大学院修士課程の西脇対名夫氏には、種々御教示頂いた。記して感謝します。また、南海放送遺跡の資料の使用を快諾して頂いた松山市立埋蔵文化財センターの西尾幸則氏にも感謝したい。

[注]

- 1 犬飼徹夫「狩猟・漁獵の生活と文化」「愛媛県史 原始・古代 I」1982年
- 2 長井數秋・八木弘・土居陸子「谷田II遺跡（上野遺跡）」「愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書II」1982年
- 3 田中良之・松永幸男「広域土器分布図の諸相－縄文時代後期西日本における類似様式の並立－」「古文化談叢」第14集 1984年

文京遺跡第11次調査出土の縄文土器の検討

- 4 泉拓良「北白川上層式土器の細分」『京都大学構内遺跡調査年報』昭和54年 1980年
- 5 千葉豊「縄帶文系土器群の成立と展開－西日本縄文後期前半期の地域相－」『史林』第72巻第6号 1989年
- 6 平城I・II式の細別については、前掲注1犬飼文献によった。また、木村剛郎氏の分類によれば、平城I式は平城第1類、平城II式は平城第2類にはば相当している。(木村剛郎ほか『平城貝塚』1982年、木村剛郎「土佐における後期縄文文化について」『高知の研究1 地質・考古篇』1983年)
- 7 西脇対名夫「鐘崎式考」伊木力遺跡』1990年
- 8 犬飼徹夫「愛媛県平城貝塚の再評議」『考古学ジャーナル』1976-1
木村剛郎「土佐における後期縄文文化について」『高知の研究1 地質・考古篇』1983年
- 9 西尾幸則「道後城北RNB」「松山市埋蔵文化財調査年報II」昭和62~63年度 1989年
- 10 京都大学埋蔵文化財研究センター千葉豊氏の御教示による。
- 11 泉拓良・玉田芳英「文様系統論－縄帶文土器－」「季刊考古学」第17号 1986年
千葉豊「備前市新庄西畠遺跡採集の縄文土器」「古代吉備」第9集 1987年
- 12 前掲注5文献
- 13 渡部明夫「各遺跡の調査－永井遺跡」「四国横断自動車道建設にともなう埋蔵文化財発掘調査実績報告」昭和61年度 1987年
- 14 佐々木謙・小林行雄「出雲國森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺跡」「考古学」第8巻第10号 1937年
- 15 前掲注5文献
- 16 前掲注1文献
- 17 前掲注8木村文献
- 18 西健一郎「鐘崎式土器について」『九州文化史研究所紀要』第25号 1980年
- 19 香川県教育委員会渡部明夫氏の御教示による。
- 20 前掲注5文献
- 21 前掲注7文献
- 22 前掲注7文献
- 23 山鹿貝塚調査団「山鹿貝塚」1972年
- 24 前掲注5文献

第6章 文京遺跡の地形復元

宮本一夫

1 はじめに

文京遺跡を遺跡全体として眺めるためには、旧地形の復元は必須のことといえよう。遺跡の立地を地形環境との関連から解釈する必要性が存在するからである。文京遺跡について、地形と遺跡の関連を眺めようとしたものに、古代学協会四国支部が1988年に催したシンポジウム『松山道後城北遺跡をめぐって』で、谷若倫郎氏が発表した「道後城北遺跡の展開」⁽¹⁾の中の遺跡分布図(図68)があげられる。この図68の1-1~1-9までが、文京遺跡の第1次から第9次までの調査地を示している。文京遺跡第1次~第3次・第5次~第7次調査地点すなわち1-1~1-3・1-5~1-7までは弥生中期後半から後期の遺構が密集した地点であり、現地形の舌状台地上に弥生遺跡が広がっていることが、図68から読みとれよう。ところで旧地形を復原するためにはどのような方法がある。これまで、文京遺跡は第1次から第11次までの調査が行われてきており、これらの発掘調査で明

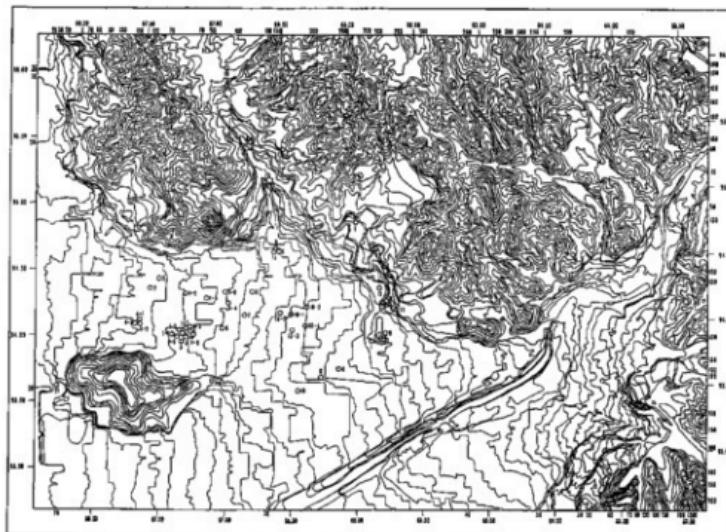


図68 道後城北弥生遺跡の分布

文京遺跡の地形復元

らかとなった黄褐色粘質土の上面、すなわち弥生遺構の立地面をつなげあわせることにより、少なくとも弥生遺跡が立地する地理環境は明らかになるものと思われる。ただ、11次にわたる調査は、文京遺跡全体のごく一部であり、地形復元するには資料が少なすぎる。そこでまず現地形の地形環境を正確に把握して後、これまでの調査結果を勘案して、地形復元を試みてみたい。

2 地形復元

文京遺跡の現地形を50cmコンターラインで示したのが図69である。これは、500分の1の都市計画図を基に、都市計画図記載の等高線を尊重し、等高線が引かれていらない部分は、地表の高さを考慮に入れながら、50cm間隔で等高線を引いたものである。この図は、先に示した図68をより鮮明にかつ詳細に示しているものである。特に、弥生遺跡の密集地である文京遺跡第1～3・5～7・10次調査地点が、舌状台地上に位置している点がより明らかになるとともに、その舌状台地の北側は谷部を形成し、繩文土器が出土した南海放送遺跡や文京遺跡第8・9次調査地点は、その谷部の北側に広がる別の台地部に位置していることが理解できよう。

ところで、弥生遺跡が立地していた黄褐色土上面の段階は、現地表面とほぼ同じ地形環境を呈していたのであろうか。これを理解するために、文京遺跡の発掘調査や立合調査によって明らかとなった黄褐色土上面の高さを図上におとしてみたい。

黄褐色土上面の高さが分る地点は、城北キャンパス一帯ではごく限られた地域である。従って、その高さを基に、黄褐色土上面のコンターラインを引くことは困難といえよう。ただこれまで最も発掘調査が密集している第1～3次・第5～7次・第10・11次調査地点において、黄褐色土上面のコンターラインを類推を含めて引いてみると、図70に示すようにほぼ現在の等高線に沿う形で引けそうである。また、理学部構内の第8次調査によって判明した黄褐色粘質土上面すなわち弥生遺跡形成時の地形面は、レベル差はあるもののほぼ現在の地形面と変わらない様相を呈していたと想像できる。さらに、各調査区で検出された地表から黄褐色粘質土上面までの厚さは、平均して約1mとすることができよう。従って、現在の地形面より約1m下に黄褐色粘質土上面の地形面があると想定して、旧地形のコンターラインを作図すると図71のようになろう。

文京遺跡の地形復元



図69 道後城北キャンパスの現地形 緯尺1/4000

遺跡の立地と地形

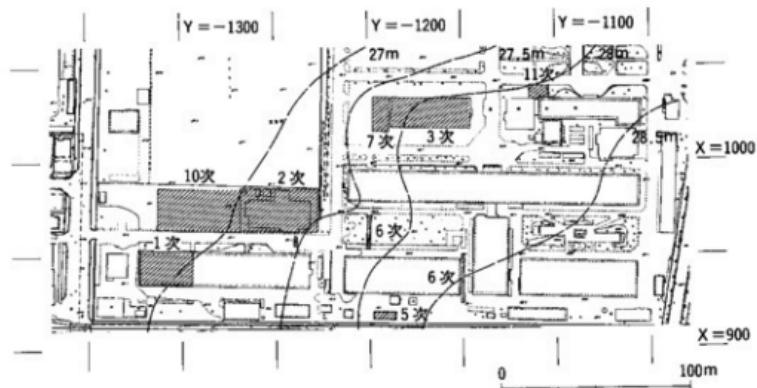


図70 黄褐色粘質土上面の地形 縮尺1/3000

3 遺跡の立地と地形

このようにして復元された地形を基に、遺跡の立地を考えるならば、まず弥生時代の拠点集落があった地点が、西から東に延びる舌状台地に占地している点が興味深い。とともにその舌状台地の北側は谷部を形成しており、理学部付近から生協前を通って西侧へ流れでる流路が流れ出でていたであろう。これは、第6次調査や第8次調査によって確認されている流路であるとともに、現地形の谷部の様相からも図71に想定したような流路方向であることは確かと思われる。そうすれば、微高地上に弥生時代の集落が営まれ、その北側の谷部の最も北側の山際には流路が流れていたことになり、この谷部に水田が形成されていた可能性が十分想定できる。このことは、ある程度弥生時代の中期末～後期前半の立地環境には合致した様相であると思われる。

一方、縄文時代、特に第11次調査で明らかとなった屋外炉の存在から、縄文後期には城北キャンパス一帯の地形は安定していたということができよう。また人間の生活がなされた住居址の存在の可能性も高い。ところで、第11次調査地点では、黄褐色粘質土下の灰色砂礫層の流路肩部が検出されている。この灰色砂礫層は、最終氷期最盛期頃に堆積した石手川系の堆積物と考えられている。⁽¹⁾従って、この流路を最終氷期の終末段階での流路方向を指すものと見做すならば、その方向はその後の地形面の等高線方向にほぼ沿う形となっ

文京遺跡の地形復元

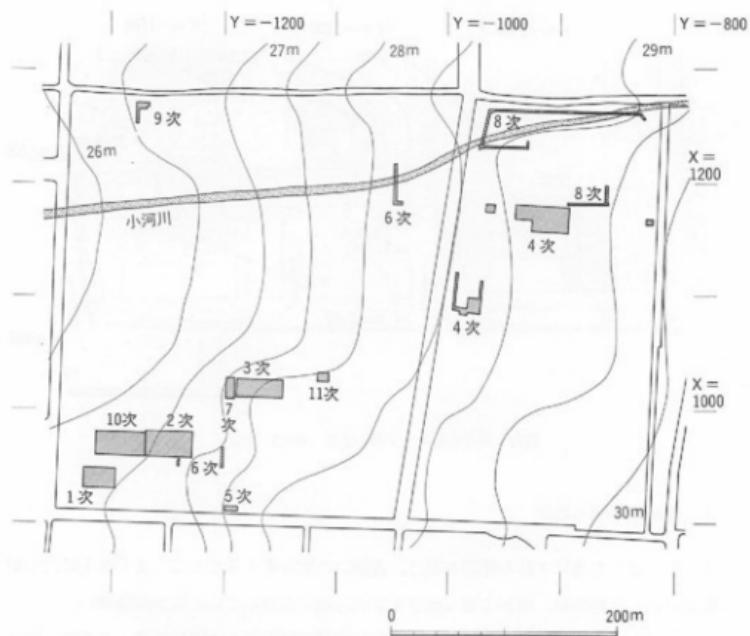


図71 黄褐色粘質土上面の地形復元 緯尺1/5000

ている。すなわち、こういった流路に伴う攻撃面の方向に沿って段差ができ、それに直交するように地形面は下っていった可能性が指摘できよう。あるいは、黄褐色粘質土堆積時やその後の地形面の形状は、こういった灰色砂礫層の堆積状況に左右されたものと考えられる。話をもう一度縄文後期に戻すならば、こういった過程で成立した該期の地形面が、現在や弥生時代の地形とほぼ変わらないと想定するならば、以下のようになろう。第11次調査地点の法文学部から工学部にかけて舌状台地が延び、その北側には谷部が形成され、弥生時代の想定と同じように谷部の北側の山際には流路が流れ、理学部から教育学部、南海放送の方向にむけて微高地が続くといった地理景観である。後者の微高地部は舌状の台地を形成する可能性もあるが、基本的には御幸寺山から延びる微高地部といえよう。こういった微高地部を背景に縄文後期の集落環境は整っており、一方谷部の湿地帯や流路は生活環境としても必須のものであったと考えられる。そしてこの微高地部や舌状台地を中心

小 結

に縄文後・晩期には、住居の立地を次々と変えていったものと想像される。

4 小 結

以上、現地形を基本にし、弥生時代の遺構面である黄褐色粘質土上面の地形復元を試みることにより、弥生時代の集落環境、さらには縄文後・晩期の集落環境を想定してきた。これにより、各時代の城北キャンパス一帯の扇状地の土地利用形態の推定が可能となったといえよう。同時に今後の発掘調査への指針となったものと思われる。また、現在進められている城北キャンパス内の建築計画へ、遺跡保存を前提として我々が積極的に発言することが可能となったといえよう。城北キャンパスはかなり手狭になっており、今後陸続として建物の建替えが行われよう。埋蔵文化財保護行政は、いうまでもなく受身の姿勢では遺跡の保存活用は計られない。今こそ積極的な姿勢で建築計画の計画段階からの話合いが必要な時期と思われる。その意味で、遺跡の広がりや遺跡の背景を想定することが必要であり、そのために地形復元は必須のことであったのである。

最後に500分の1の都市計画図を提供して頂いた松山市立埋蔵文化財センターの西尾幸則氏には感謝申し上げる。

(注)

- 1 古代学協会四国支部『松山遺後城北の弥生遺跡をめぐって』(シンポジウム資料) 1988年
- 2 平井幸弘『石手川扇状地域北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境』『愛媛大学教育学部紀要第10部(自然科学)』第9巻 1989年

第7章 文京遺跡第8・9・11次調査の成果と意義

宮本一夫

副題に「文京遺跡における縄文時代遺跡」としたように、第8・9・11次調査は縄文時代後・晚期の遺構・遺物が主眼となった調査であった。これは、これまで文京遺跡が弥生中期末から後期にかけての拠点集落としての位置づけがなされてきたのに対し、それ以前にも人間の生活の痕跡が残されていることを明らかにしたことに意義がある。特に第8次と第11次調査によって、縄文時代の遺構面として少くなくとも2面、すなわち縄文後期と縄文晚期後葉の2面が存在することが明らかとなった。従来、後者の縄文晚期後葉から弥生前期初頭に関しては、同じ文京遺跡内の松山市立東中学校における弥生前期初頭の住居址の検出例によって、このことはある程度予想されかつ認められてきた。すなわち、文京遺跡の開始期として、かつまた弥生時代の拠点集落の前段階としての位置づけがなされてきたのである。ところが、第8次調査の第4層すなわち黄褐色粘質土内で縄文後期の土器が発見されたとともに、第9次調査においても同じ層から縄文後期ないし晚期前葉の土器が検出された。さらに、第11次調査では、この黄褐色粘質土相当層から屋外炉が発見されるに至り、少くなくとも縄文後期前葉において城北キャンパス一帯の扇状地は安定しており、縄文人の生活環境が整っていたことが明らかとなったのである。かつまた、南海放送遺跡との比較により、この扇状地上には、縄文中期末ないし後期初頭から後期中葉まで連続して縄文人たちが生活していたことが明らかとなったのである。

こういった扇状地の生活環境としての利用の仕方は、ある程度、瀬戸内全体を通じてみられる傾向に合致しているといえよう。平井勝氏によれば、岡山県南部においては、生活立地の推移は以下のようになる。縄文前期以降活発に貝塚が形成され、それらは現沖積地の縁辺部山裾に位置する。ところが縄文後・晚期の自然環境の変化に呼応するように、こうした海浜集落は衰退し、広大な後背地への進出が認められる。あるいは、海岸線の後退にともなって新しく形成された沖積地への集落の移動がなされるのである。さて瀬戸内西部の近隣の遺跡をみた場合、貝塚遺跡の存続期間は、愛媛県越智郡波方町江口遺跡では縄文前期初頭から後期初頭まで前期中葉を除いてほぼ連続している。⁽¹⁾ と同時に後期初頭に於て、この遺跡は突然廃棄されているのである。こうしたあり方は、岡山県南部の様相と一致するものと考えられる。これに対し、縄文後期初頭ないし中期末から開始する文京遺跡を含めた城北キャンパス一帯の扇状地の生活利用は、広大な後背地への進出といった動きと同

文京遺跡第8・9・11次調査の成果と意義

様なものであろう。近年香川県において発見されている縄文後期の普通寺市永井遺跡や後期中葉の觀音寺市櫛ノ口遺跡などの立地環境は、この後背地にあたり、後背地の開発が始まった時期と符号しているのである。同じ道後平野においても、久米窪田森元遺跡⁽⁷⁾では縄文後期の縁帯文時期の土坑が検出されており、同様な後背地の開発に伴うものと考えられる。縄文後期の住居址が検出された久米窪田I遺跡⁽⁸⁾や上野遺跡⁽⁹⁾も、同様な状況に起因するものであろう。一方、岡山県南部にみられた後・晚期の沖積地の開発は、本地域では松山市大瀬遺跡などに認められており、岡山県南部と同様な現象を辿っている。

さて、この文京遺跡の集落環境に目を転じてみれば、以下のようなようになろう。第6章で地形復元を試みたように、文京遺跡第11次調査地と第9次調査地ないし南海放送遺跡との間には谷部を形成している。第11次調査地が舌状台地の縁辺部にあたるとすれば、第9次調査地と南海放送遺跡も同様な舌状台地ないし御幸寺山から延びる台地の縁辺部に位置しているのである。この様な台地部で確認された縄文後・晚期の遺跡群は、直径1km圏内にすべて納まるものであり、一時期において一つの生活圈あるいは経済圏として捉え得るものである。その中で、今のところ後期前・中葉を中心としてほぼ後期全時期の土器群が認められる可能性があるところから、この扇状地上に点々と居住位置を変えながら連続と後期を通じて生活がなされていたと判断される。また、文京遺跡第8次調査によって確認された流路や溝は、この谷部に向けて注ぎ込んでいる自然流路の痕跡であり、こういった流路と谷部の湿地帯は当時の生活においては、生活環境のみでなく生業の意味においても必要不可欠のものであろう。さらに台地部には、集落環境としての適地があるだけでなく、堅果類と根菜類が生息していたものと推測される。こうした環境こそ、後背地部に移動してきた縄文人に最適のものであったのである。集落環境の適地としては、文京遺跡第11次調査で屋外炉が検出されているところから、その1つの予想として、第11次調査地より南西の微高地部に集落が営まれたと判断される。従って、文京遺跡周辺は、これまでの弥生遺跡としての関心のみでなく、それ以前の縄文後・晚期の集落が存在する予想のもとに調査を進めて行く必要があると考えられる。

次に、文京遺跡第11次調査資料（以下11次調査資料と略する）を比較的一時期にかたまつた一括資料として認識するため、コンピューターの遺物標示プログラム⁽¹⁰⁾を利用して、その一括性を示した。それにより、11次調査資料の組成化を定量的に示すことができた。すなわち口縁部識別法により、精製土器と粗製土器の比が1：4と、圧倒的に粗製土器の量比が高いことが明らかとなった。そしてこれがまた本遺跡の特徴を示すものといえよう。

文京遺跡第・8・9・11次調査の成果と意義

さらに11次調査資料を瀬戸内東部の津雲A式から彦崎K1式へ移行する段階の土器群、すなわち津雲A式新段階の土器群として位置づけた。これは、近接する南海放送遺跡の土器群の型式学的分類によても、ある程度論証できたものと考えられる。一方、11次調査資料の有文土器には、縁帶文土器として瀬戸内東部の影響を強く受けながらも独自の地域色を示す有文深鉢B類と、平城II式に属するものである有文深鉢C・D類の2系統の土器群が同時存在することが明確となっている。これは、瀬戸内西部が、九州西部から南西四国にかけての土器地域圏と瀬戸内東部土器地域圏の両系統の影響を受けつつ、独自の地域色を示しているものといえよう。また、そこでの共時性が示される要素は、口縁部文葉帯の類似と縁帯部の肥厚帯の形状とすることができよう。こういった2系統の土器群のあり方を提示する一方、11次調査資料の有文深鉢C・D類を介在することによって、かつ平城II式を細分することによって、平城II式から平城I式への変化を3段階の変化過程で示すことが可能となった。これは、通説を逆転させ平城II式から平城I式への変化過程を想定した西脇対名夫氏の解釈¹⁾を、さらに肯定するものになったといえよう。平城I式ないし小池原上層式から成立した鐘崎式が、瀬戸内では香川県永井遺跡において彦崎K1式と共に伴っている。従って、11次調査資料を彦崎K1式より遡る土器群と認識したことと、整合的に符号るのである。11次調査資料を介在させた平城II式から平城I式への変化過程は、まさに津雲A式段階の細かな変化過程を示すものといえるのである。そしてまたこういった編年観を打ち立てることによって、これまで整理されてこなかった、該期の瀬戸内を通じた九州から近畿までの西日本の土器編年の秩序化につながるものといえよう。

以上、文京遺跡第8・9・11次調査によって、道後平野の縄文後・晩期の遺跡の立地のあり方を、瀬戸内を通じた該期の集落立地論に昇化させるとともに、道後城北地区の該期の生活環境を推定してきた。また、11次調査を中心に、縄文後期前・中葉の土器編年の再構成を試みてみた。今後の調査の進展によって、これらの仮説や推論がさらに強固なものになることを期待したい。

(注)

- 1 西尾幸則「文京遺跡」「愛媛県史 資料編 考古」1986年
西尾幸則「文京遺跡」「松山市資料集 第2巻 考古2・古代～中世・近世・文化編」1987年
- 2 西尾幸則「道後城北RN B遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報II」昭和62～63年度 1989年
- 3 平井勝「瀬戸内地域における縄文時代研究の課題－晩期農耕について－」「考古学研究」第32巻第1号 1985年

文京遺跡第8・9・11次調査の成果と意義

- 4 1989年5月、愛媛大学法文学部考古学研究室が行った江口遺跡第1次調査の成果による。
- 5 渡部明夫「各遺跡の調査－水井遺跡」「四回横断自動車道建設にともなう埋蔵文化財発掘調査実績報告」昭和61年度 1987年
- 6 片桐孝浩「櫛ノ口遺跡」「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和59～62年度 1988年
- 7 栗田茂敏「久米座田森元遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報II」昭和62～63年度 1989年
- 8 吉本拡「久米座田遺跡－久米座田I遺跡・久米座田II遺跡・久米座田III遺跡」「一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書II」1981年
- 9 水井教秋・八木武弘・土居隆子「谷田II遺跡（上野遺跡）」「愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書II」1982年
- 10 栗田茂敏「大洲遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報II」昭和62～63年度 1989年
- 栗田茂敏「愛媛県大洲遺跡」「日本考古学年報」40（1987年度版）1989年
- 11 浜崎一志「マイクロコンピューターと遺跡調査－光波タキオメータとマイクロコンピューターによる遺物分布図の作成－」「京都大学構内遺跡調査研究年報」昭和57年度 1984年
- 12 西脇対名夫「徳崎式考」「伊木力遺跡」1990年
- 13 香川県教育委員会渡部明夫氏の御教示による。

REPORT UPON ARCAEOLOGICAL RESERCH
ON THE CAMPUS OF THE EHIME UNIVERSITY,VOL.II

THE 8TH · 9TH · 11TH RESERCHES OF BUNKYO SITE

Editer: MIYAMOTO Kazuo
Contributors: SHIMOJO Nobuyuki
UMEKI Kenichi

contents

- ChapterI Research progress
 - II The 8th Excavation at Bunkyo
 - III The 9th Excavation at Bunkyo
 - IV The 11th Excavation at Bunkyo
 - V Investigation of Jomon Pottery found
at the 11th Excavation of Bunkyo
 - VI Geographical reconstruction of Bunkyo
 - VII Conclusion
- Appendix English Summary

March 1990

Archaeological Department, the Faculty of Law
and Literature
Research group for Archaeological Sites
at Ehime University
Ehime University, Japan

SUMMARY

Bunkyo site is located between Mt. Miyukiji and Mt. Katsuyama north of Matsuyama city in Ehime prefecture, Japan. This site is situated on the alluvial fan of the Ishite River. It is well-known that this site contains the remains of settlements from the middle to the late Yayoi period.

After the 8th • 9th • 11th excavations at Bunkyo, it was discovered that this site has a horizon of occupations in the Jomon period under the Yayoi layer. The 8th excavation showed that this site has two strata that are divided into the latest Jomon period and the late Jomon period. During the 9th excavation it was found that the Jomon period stratum contains pottery dating from the late Jomon period to the first half of the latest Jomon period. During the 11th excavation a fireplace in a dwelling pit was found at this site. Therefore it can be assumed that the Jomon period people lived at Bunkyo site from the late Jomon period to the latest Jomon period.

In Setouchi district, a shellmound was started in the early Jomon period and decayed during the late Jomon period because of changes in the natural environment. In the eastern Setouchi district, during the late and the latest Jomon periods, settlements near the sea decayed, and new settlements moved to the lower hill and the alluvial fan. The fact that settlement of the Bunkyo site began during the final middle Jomon period or the first late Jomon period accords with this movement of settlements to the lower hill in the eastern Setouchi district. In the Dogo plains it was also found that in the late Jomon period settlement started at the Obuchi site which was located in the lower alluvion. As was mentioned above, the environment of settlements in the western Setouchi district is similar to those in the eastern Setouchi district.

The materials from the 11th excavation at Bunkyo were proved by means of using a computer to be an assemblage. A peculiarity of this site is that the ratio of pottery with decoration to plain pottery is 1 : 4. In comparing materials of the 11th excavation with those at the Nankai broadcasting site, we determined that the

material of the 11th excavation fits in the chronology of Jomon pottery. Its position lies in the latter half of the Tsugumo A type. This hypothesis means that the old chronology of Jomon pottery in the Chugoku・Shikoku districts must be altered and that the chronology of the late Jomon period all over western Japan must be rearranged. The locality of pottery in the western Setouchi district was influenced by that of the eastern Setouchi district and western Kyusyu・southeastern Shikoku districts, whereas the western Setouchi district evolved in its locality by itself during the late Jomon period.

We expected to confirm this hypothesis with materials from new excavations in the area in the near future.

(Kazuo Miyamoto)

図 版

文京遺跡第8・9・11次調査

——文京遺跡における縄文時代遺跡の調査——

1～9 文京遺跡第8次調査

10～13 文京遺跡第9次調査

14～29 文京遺跡第11次調査

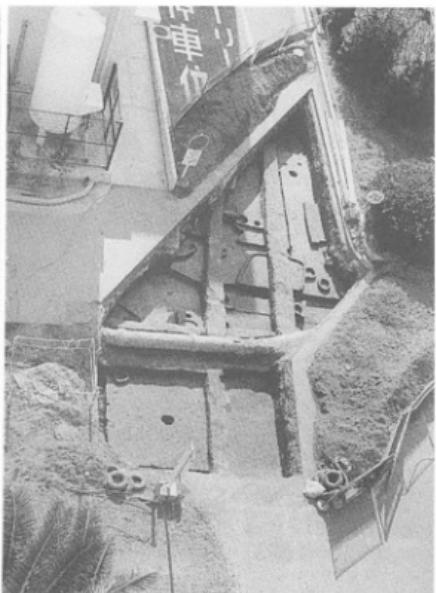
30～33 南海放送遺跡



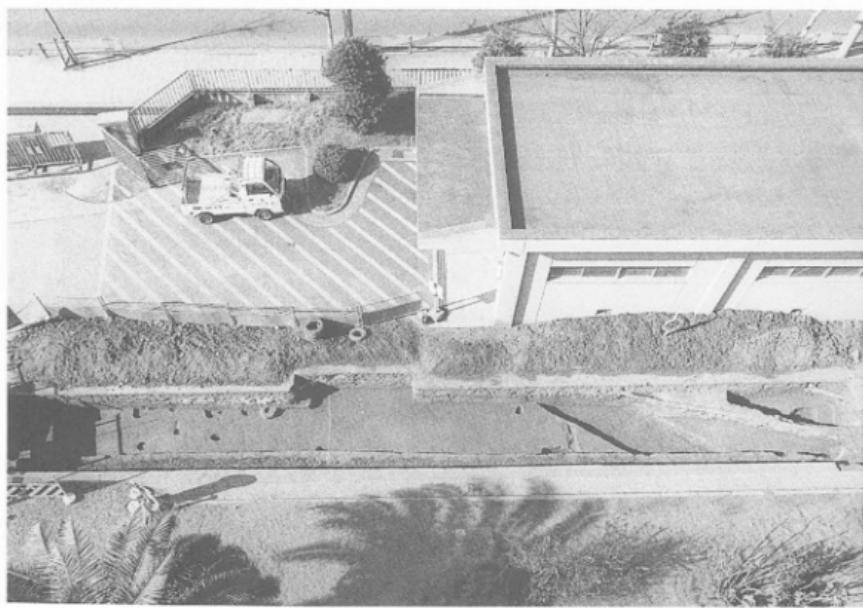
1 理学部遠景（西から）



2 I区全景（西から）



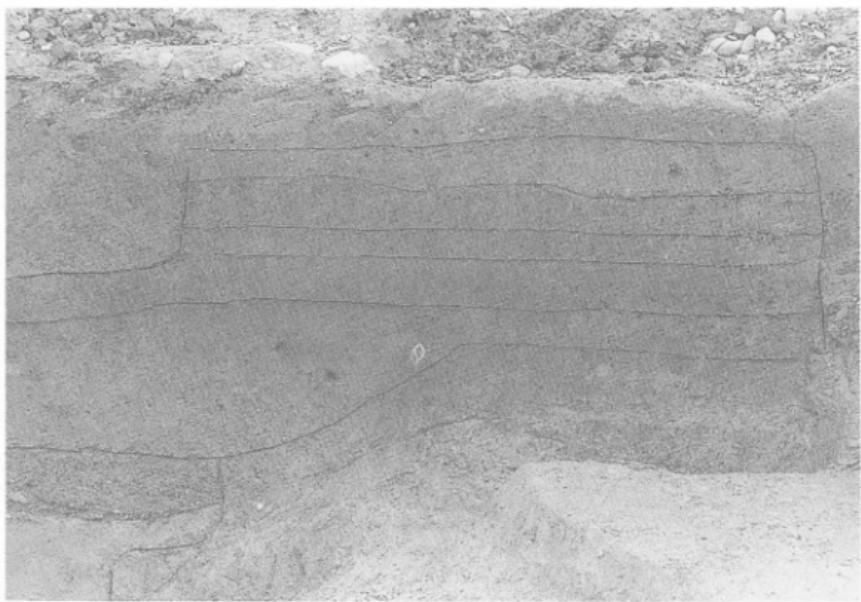
3 II区全景（北から）



1 III区全景（東から）



2 IV区全景（南から）



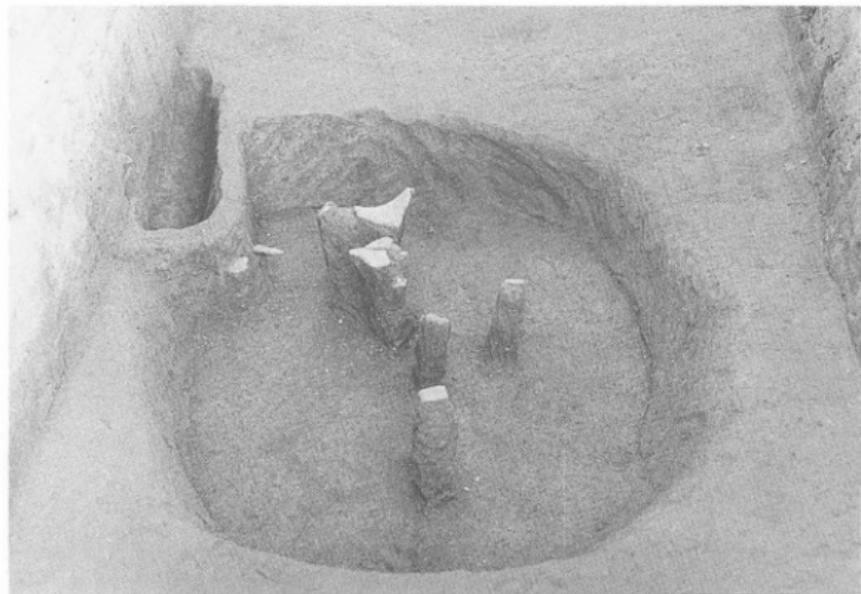
1 II区東壁（西から）



2 IV区第5層出土状況（南から）



1 土坑SK 1 (北から)



2 土坑SK 3 (西から)



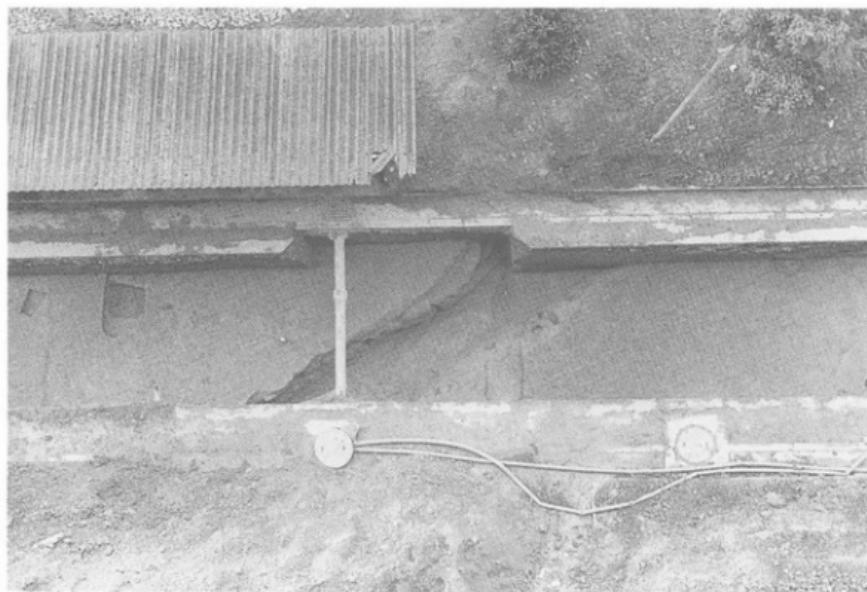
1 土坑SK4（南東から）



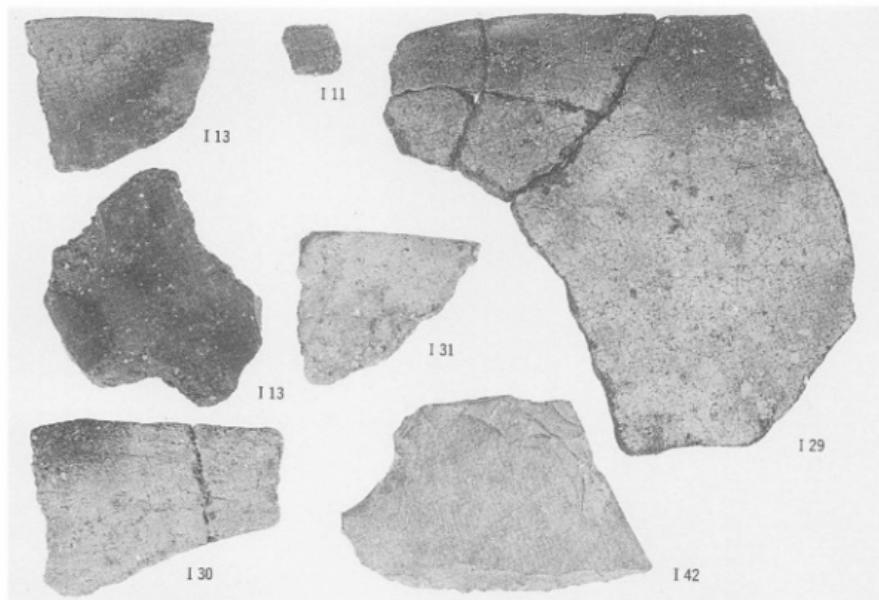
2 土坑SK4（北西から）



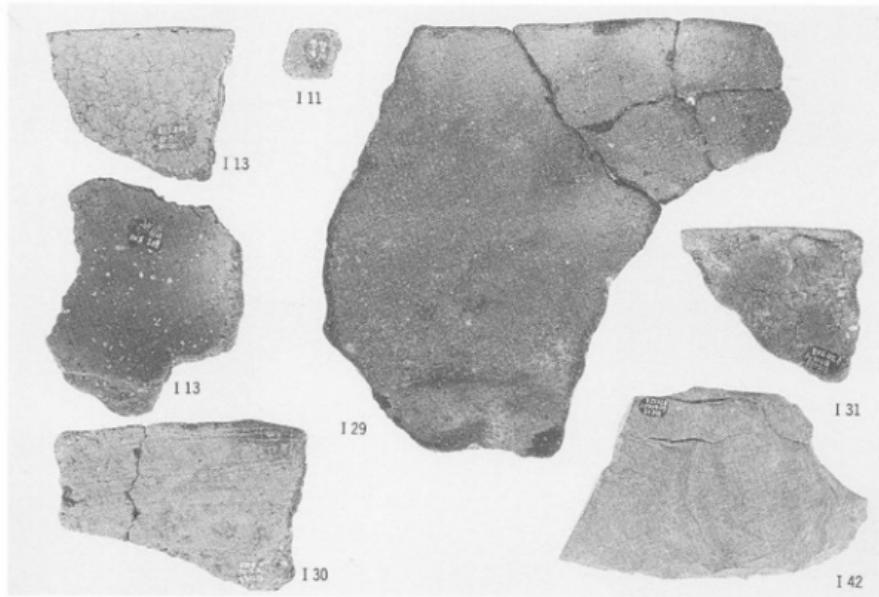
1 流路SR4（南から）



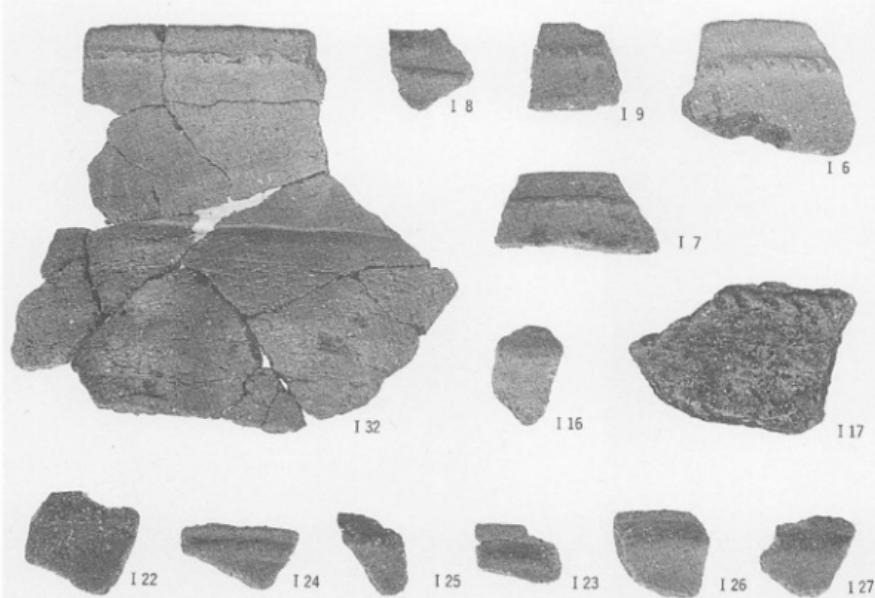
2 溝SD1（南から）



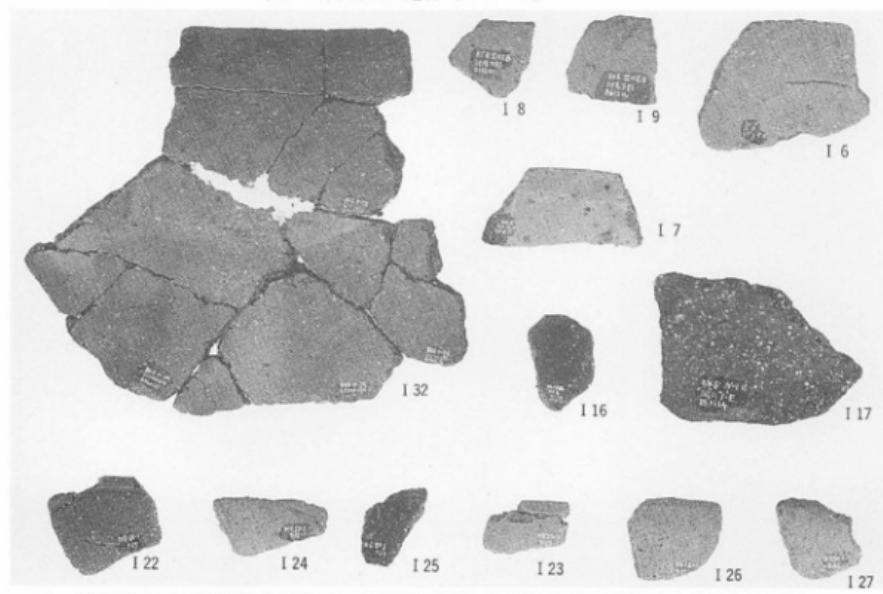
1 第4層出土土器（I 11・I 13・I 29・I 30・I 31）・石器（I 42）



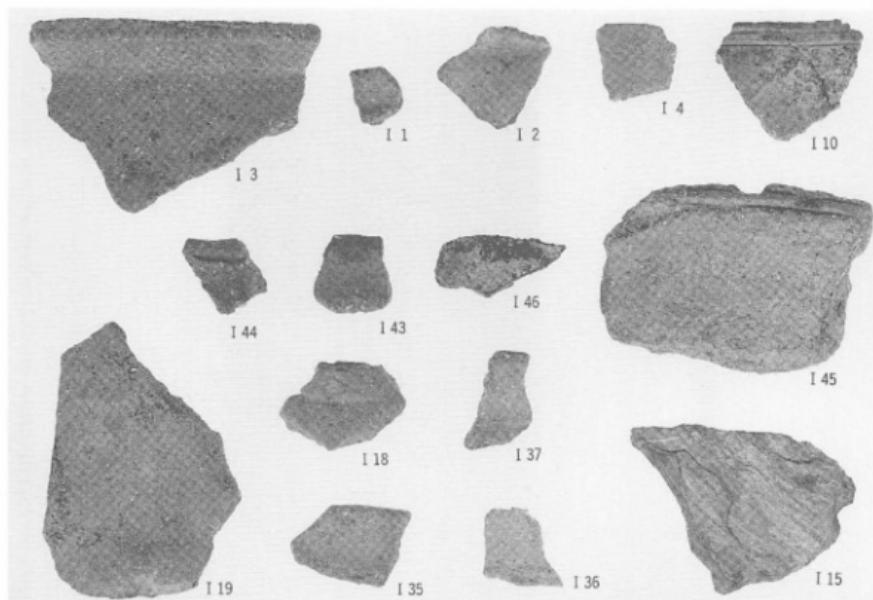
2 第4層出土土器・石器 内面



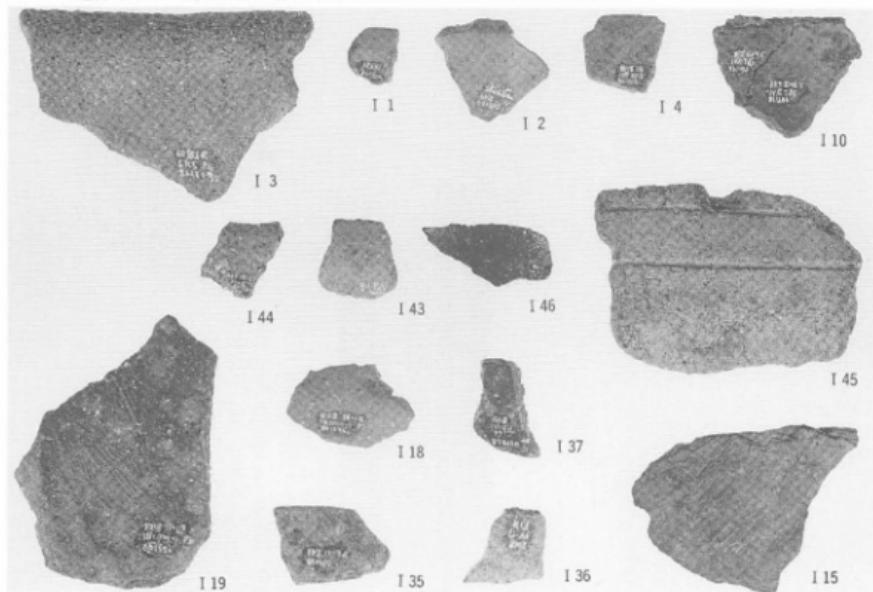
1 S P206出土遺物 (I 32), S R 1出土遺物 (I 6), S R 3出土遺物 (I 16・I 17), S K13
出土遺物 (I 22～I 27), 第3層下部出土遺物 (I 7～9)



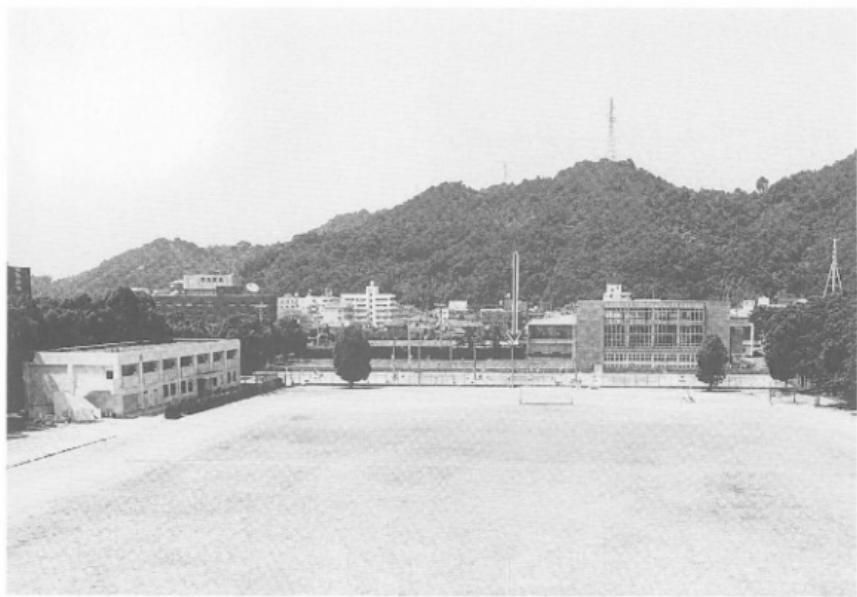
2 S P206出土遺物 (I 32), S R 1出土遺物 (I 6), S R 3出土遺物 (I 16・I 17), S K13
出土遺物 (I 22～I 27), 第3層下部出土遺物 (I 7～9)



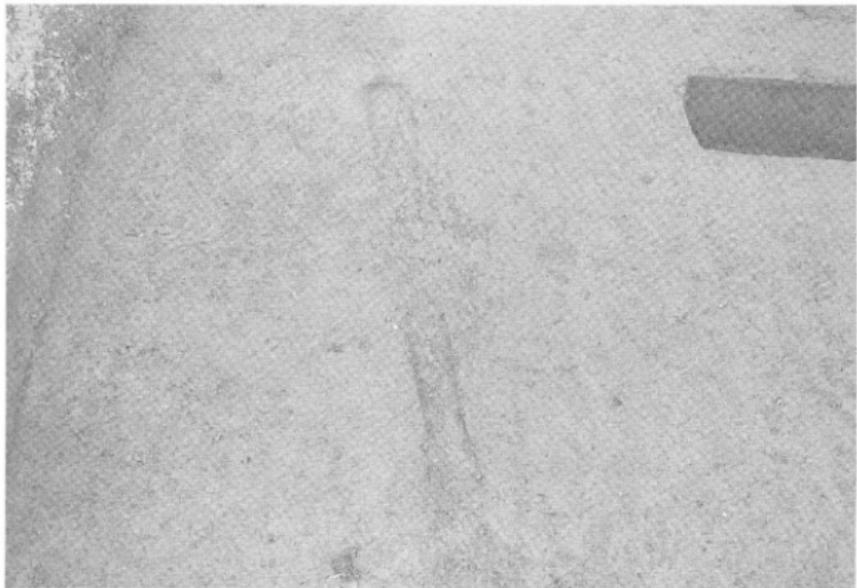
1 SK 1 出土遺物 (I 1), SK 2 出土遺物 (I 2), SK 3 出土遺物 (I 3・I 4), SK 14 遺物 (I 43~I 46), SR 3 出土遺物 (I 18・I 19), 第3層下部出土遺物 (I 10), 摂亂出土遺物 (I 15・I 35~37)



1 SK 1 出土遺物 (I 1), SK 2 出土遺物 (I 2), SK 3 出土遺物 (I 3・I 4), SK 14 遺物 (I 43~I 46), SR 3 出土遺物 (I 18・I 19), 第3層下部出土遺物 (I 10), 摶亂出土遺物 (I 15・I 35~37) 内面



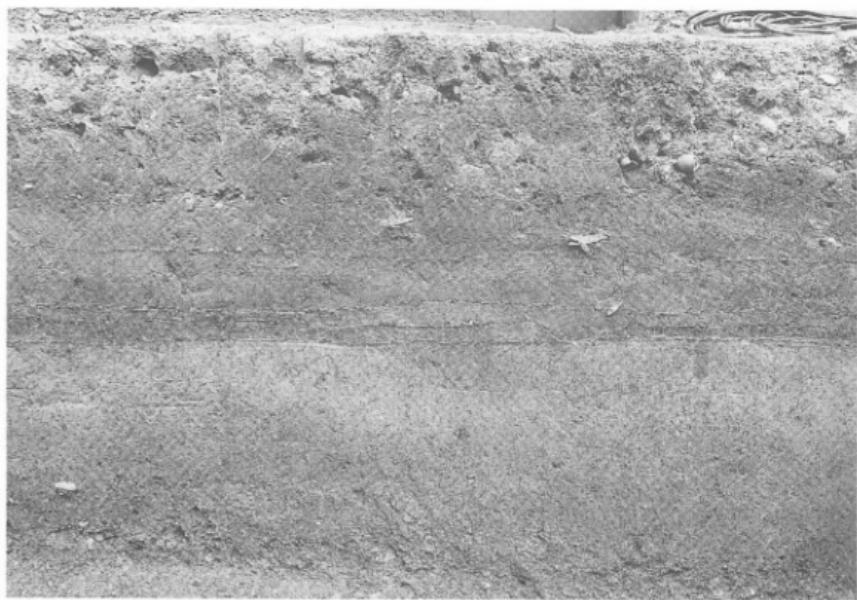
1 調査区位置遠景（南から）



2 溝S D 1（西から）



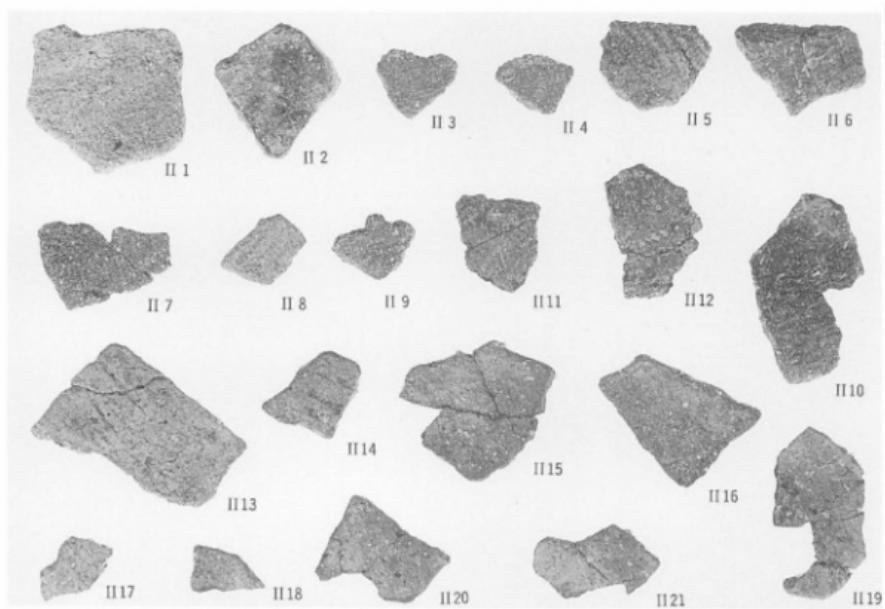
暗茶褐色上面検出溝群（西から）



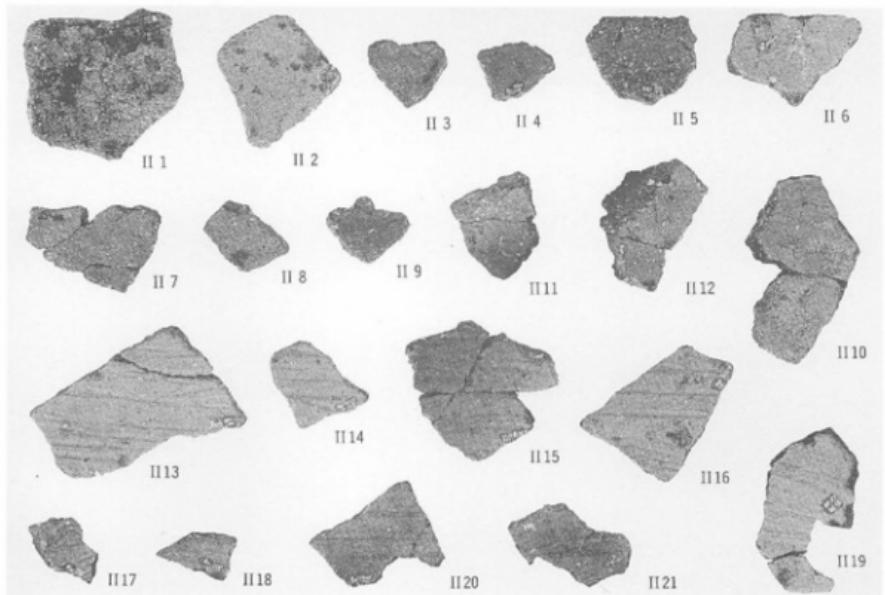
1 調査区西壁の層位（東から）



2 調査区北壁の層位（南から）



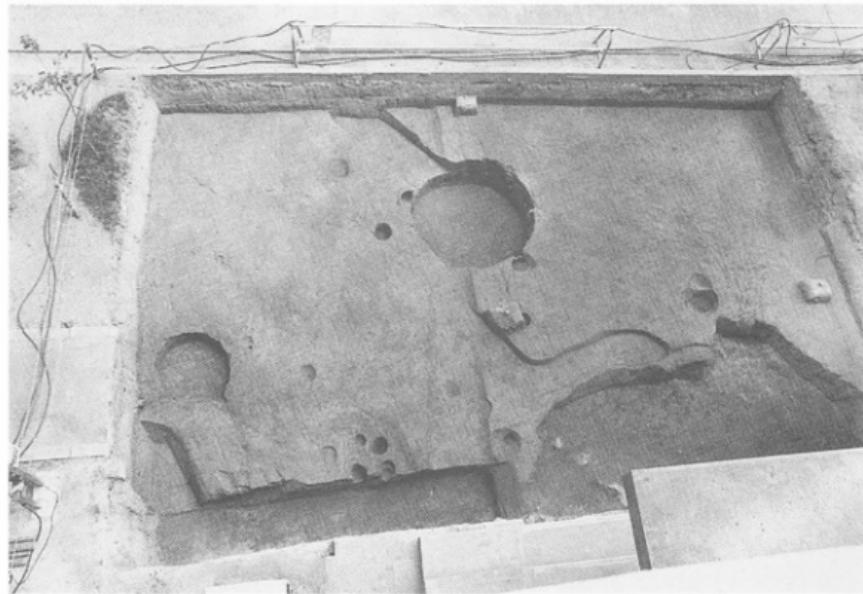
1 黃褐色粘質土出土遺物 (II 1 ~ II 21)



2 黃褐色粘質土出土遺物 內面



1 調査前の風景（北から）



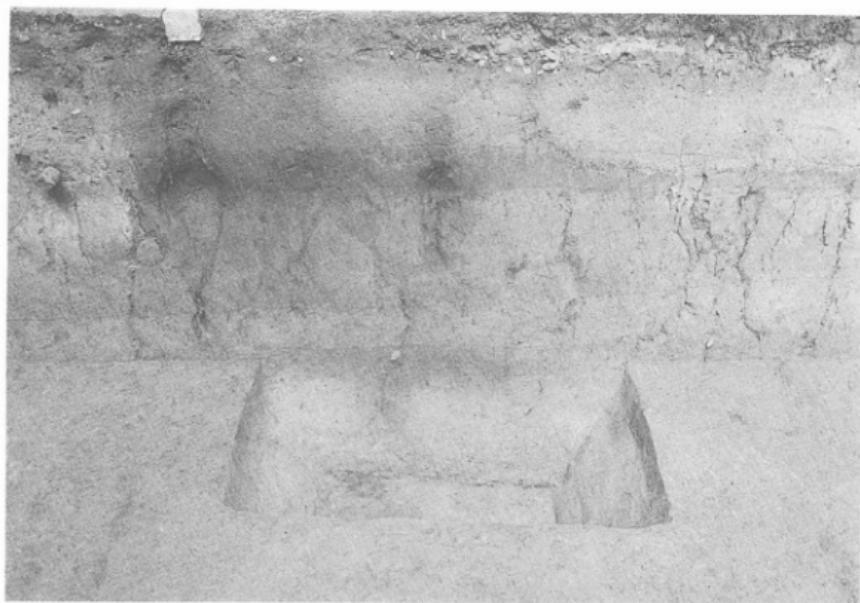
2 弥生時代遺構（南から）



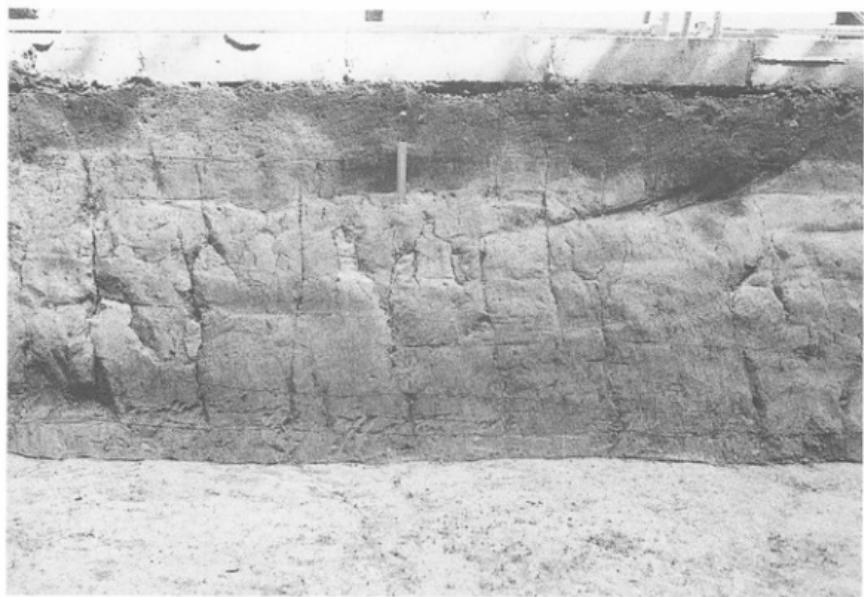
1 土坑SK3（南から）



2 旧河川肩部（西北から）

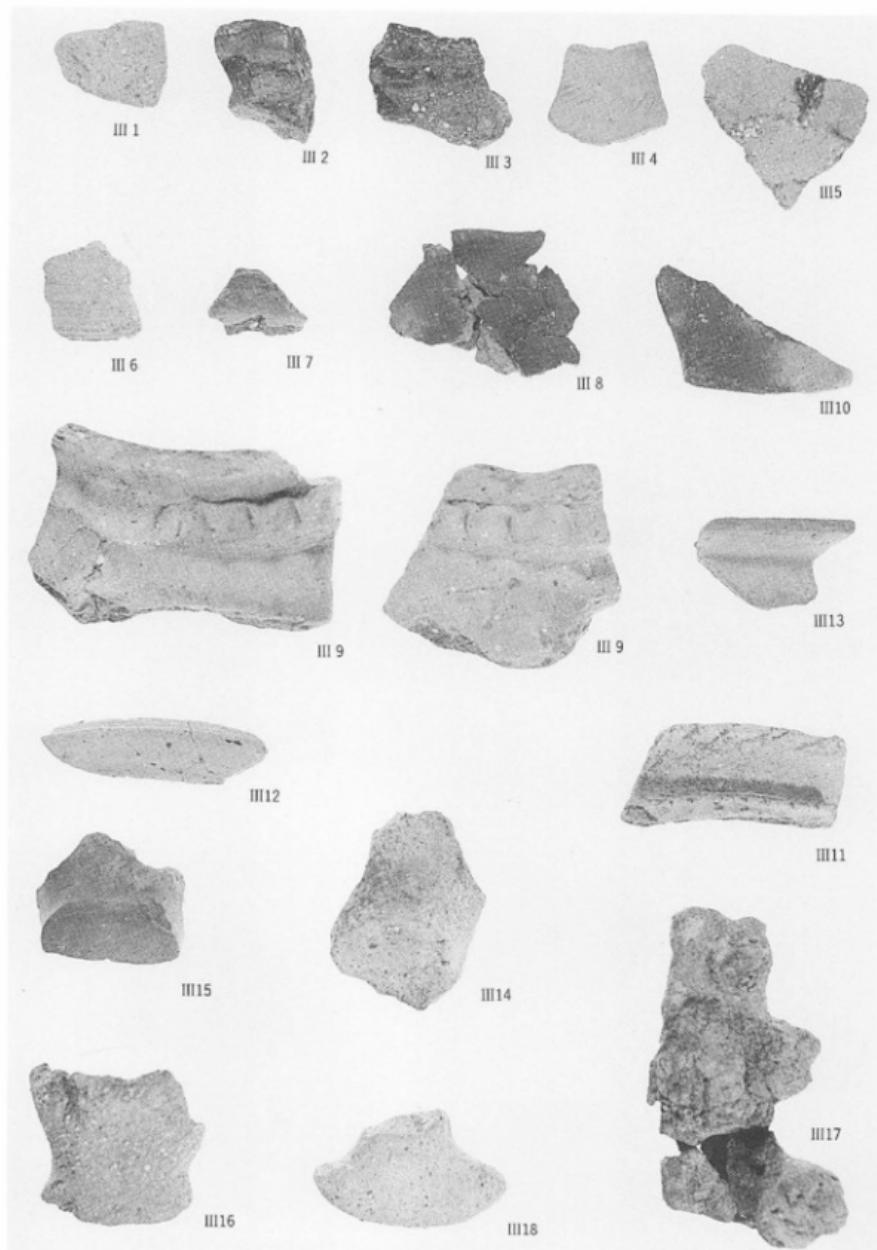


1 調査区西壁の層位（東から）



2 調査区北壁の層位（南から）

圖版一七 文京遺跡第一次調査



SK 3出土遺物 (III 1~III 7・III 17), SP 10出土遺物 (III 8), 暗茶褐色土出土遺物 (III 9~III 16), 赤褐色土出土遺物 (III 18)



1 第4面縄文土器出土状況（東から）



2 第4面縄文土器出土状況（南から）



1 第5面縄文土器出土状況（南から）



2 第6面縄文土器出土状況（南から）



1 第7面縄文土器出土状況（南西から）



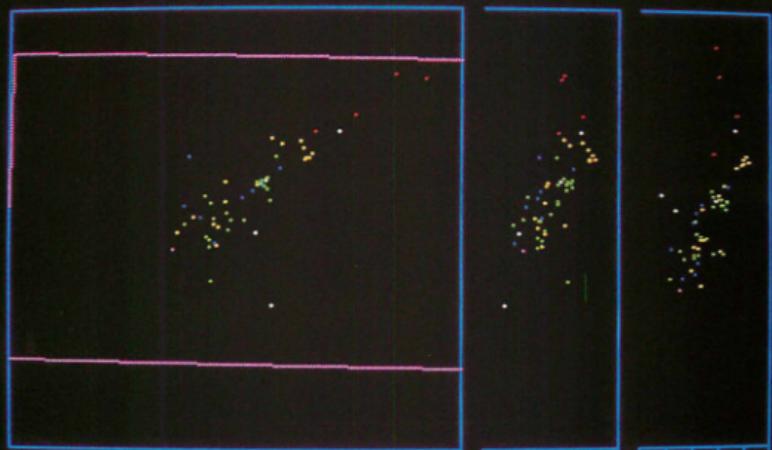
2 第7面縄文土器出土状況（南から）



1 第8面縄文土器出土状況（南西から）

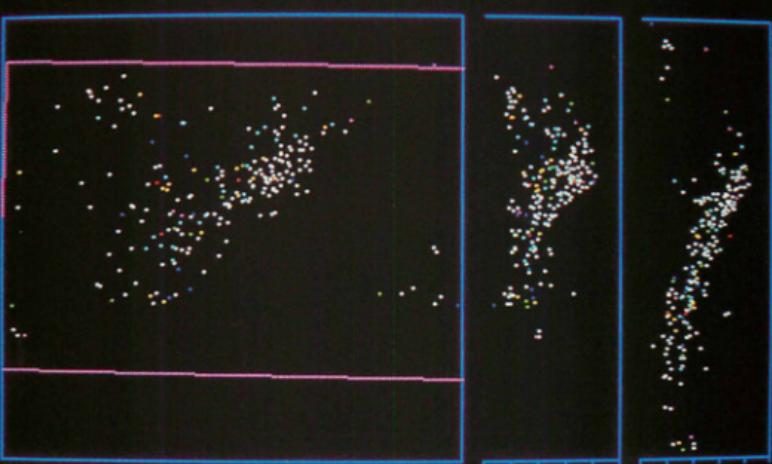


2 第9面縄文土器出土状況（南西から）



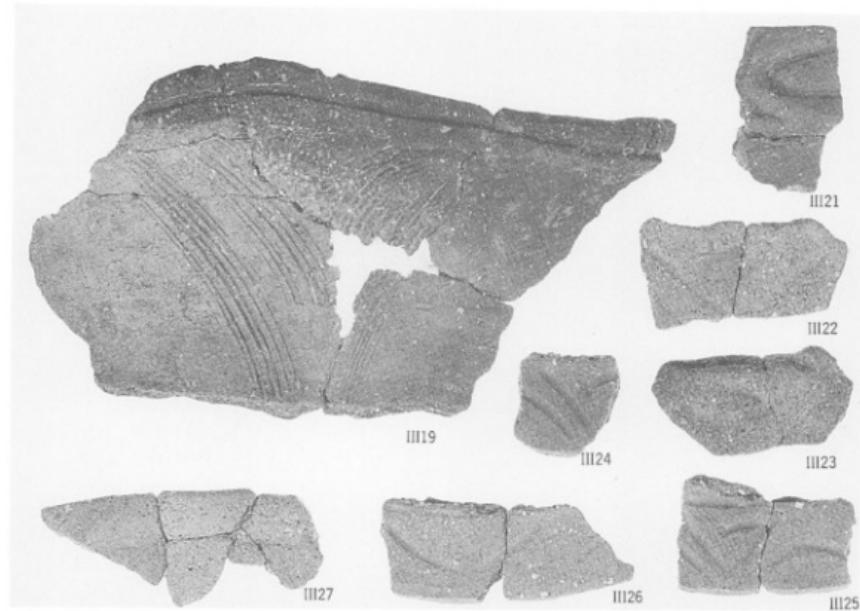
表示するデータは [全て (a) / 部分 (b) / 検索 (s) / 遺構 (i)]
画面コピー (c) / 終了 (e)] —? ■

1 有文土器の分布 有文深鉢A類 (紫), 有文深鉢B類 (赤), 有文深鉢D類 (青),
有文鉢a類 (白), 有文鉢b類 (黄)

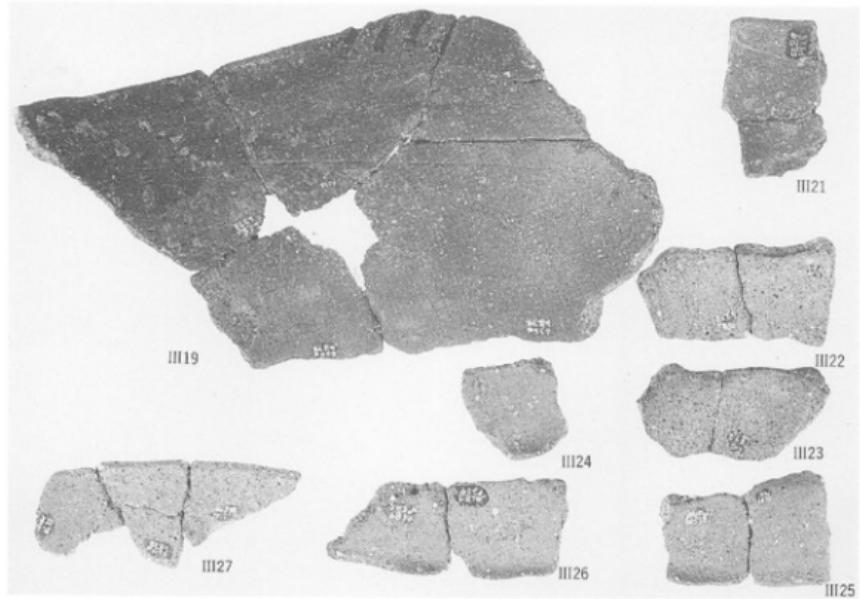


表示するデータは [全て (a) / 部分 (b) / 検索 (s) / 遺構 (i)]
画面コピー (c) / 終了 (e)] —? ■

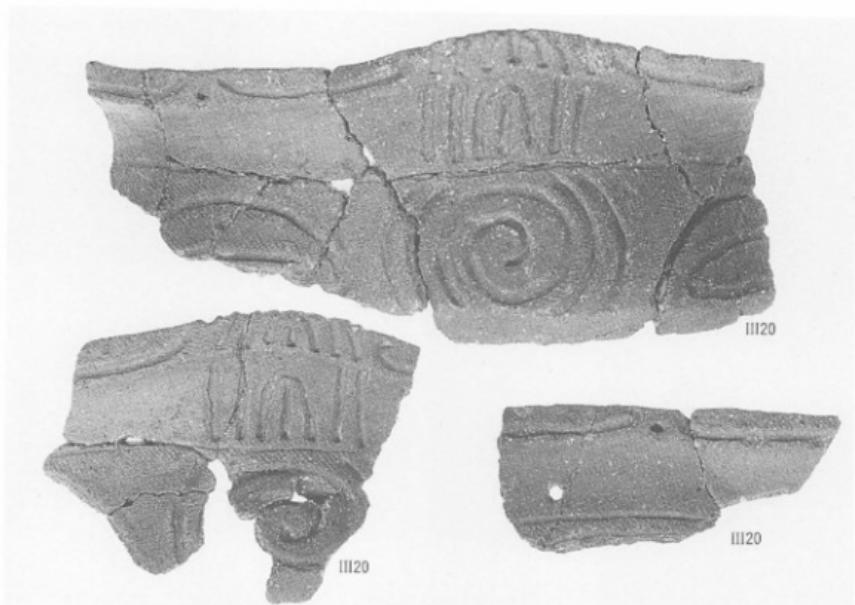
2 粗製深鉢の分布 I a類 (緑), I b類 (青), I c類 (紫), I d類 (水色),
II類 (赤), III類 (黄), IV・V類 (白)



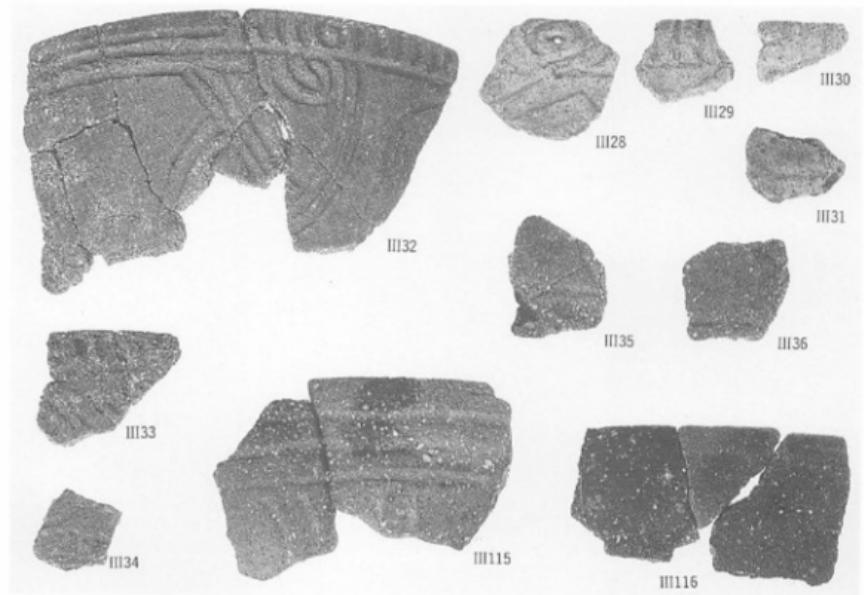
1 有文深鉢A (III21)・B (III19)・D (III22~III26)・E (III27) 類



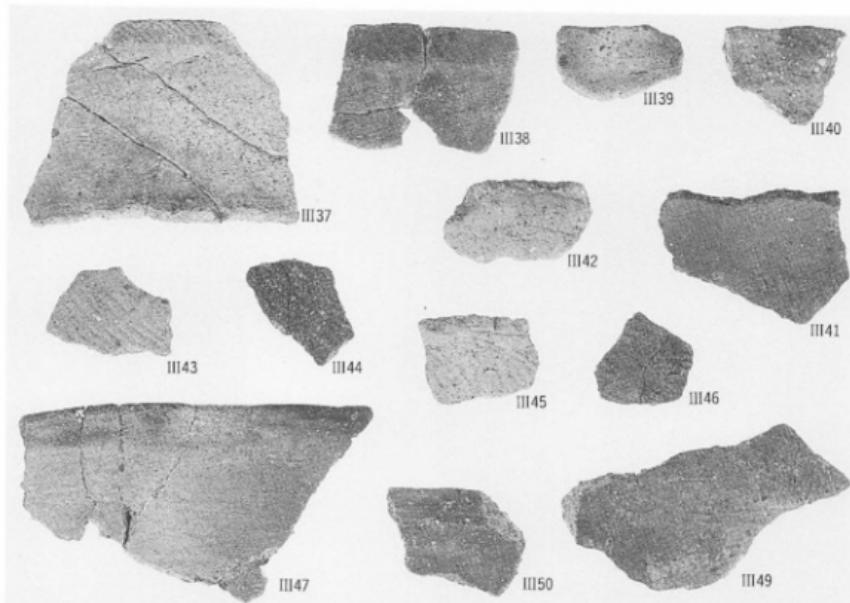
2 有文深鉢A・B・D・E類 内面



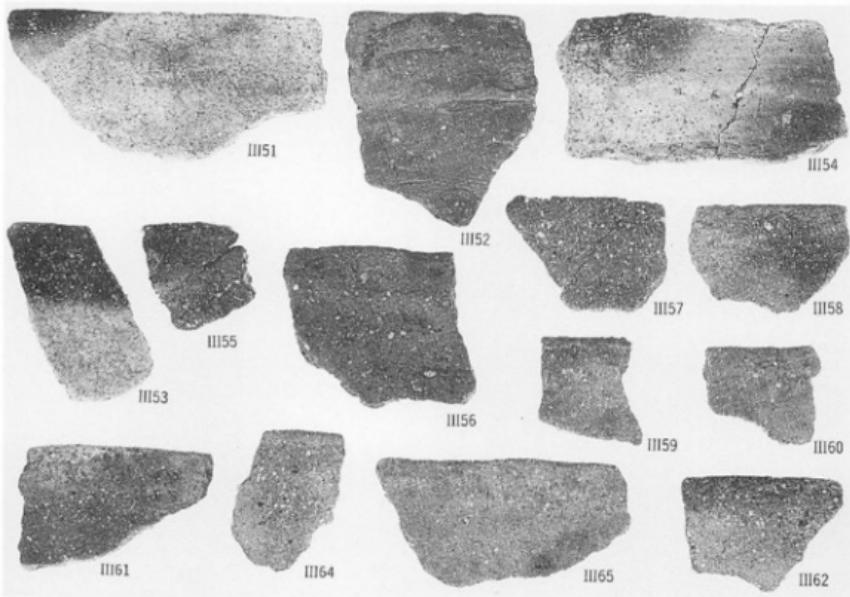
1 有文深鉢 C 類 (III20)



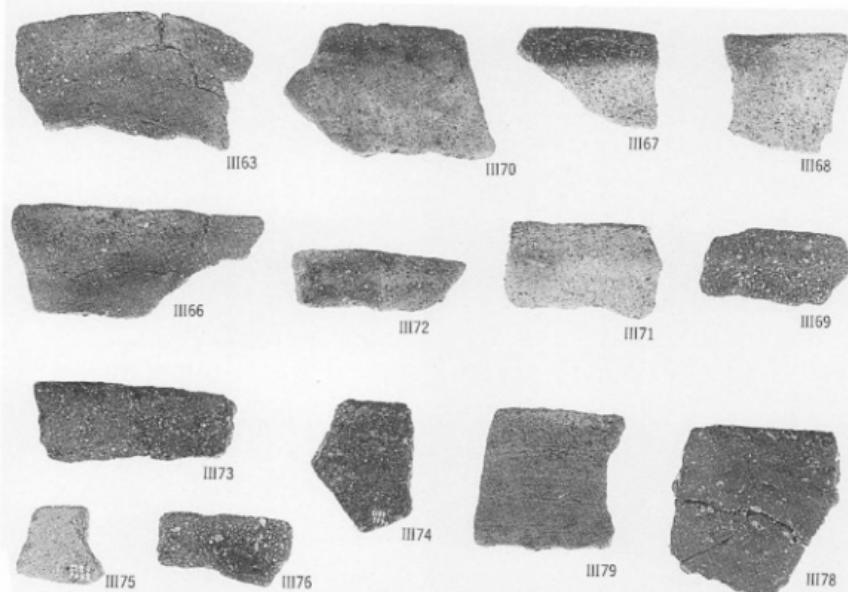
2 有文鉢 a 類 (III28~III31), 有文鉢 b 類 (III32~III36), 浅鉢 (III115・116)



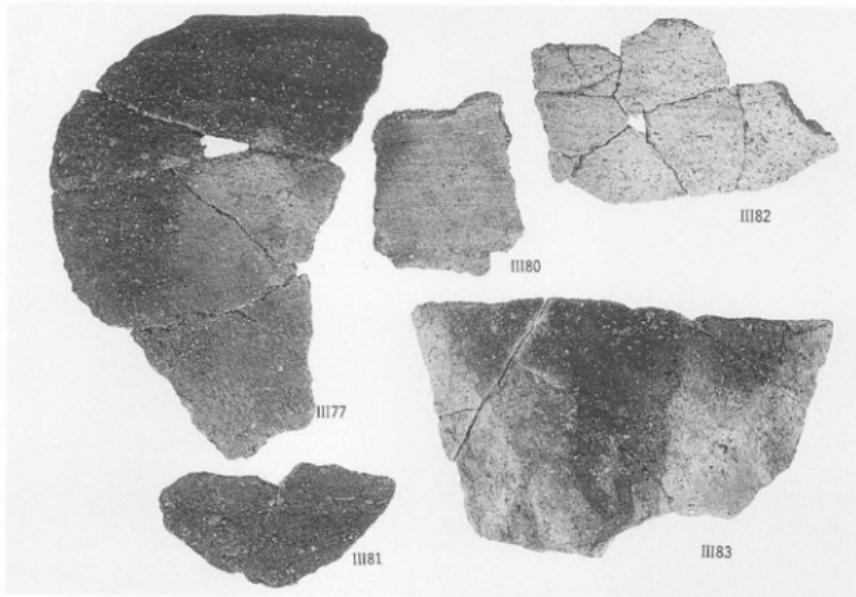
1 粗製深鉢 I a 類 (III37~III46), 粗製深鉢 I b 類 (III47~III50)



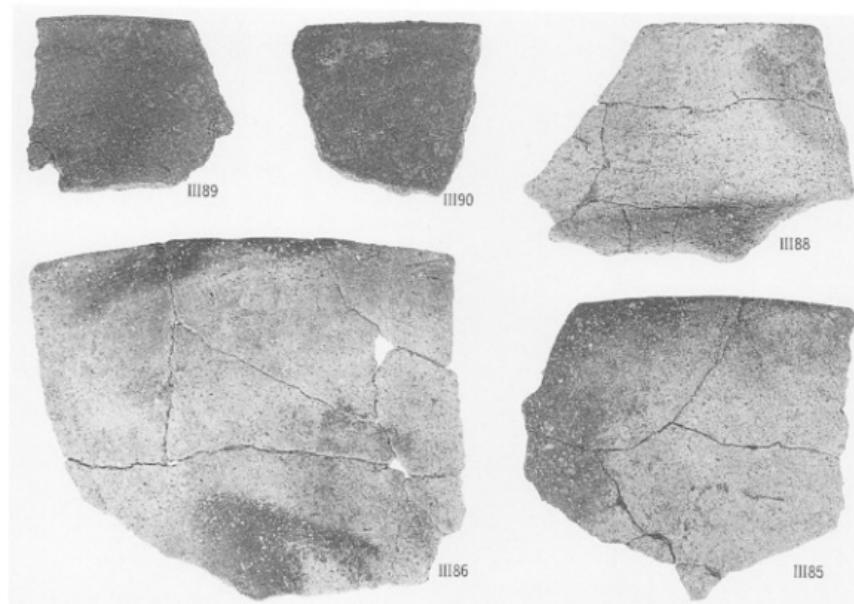
2 粗製深鉢 I c 類 (III51~III55), 粗製深鉢 I d 類 (III56~III62・III64・III65)



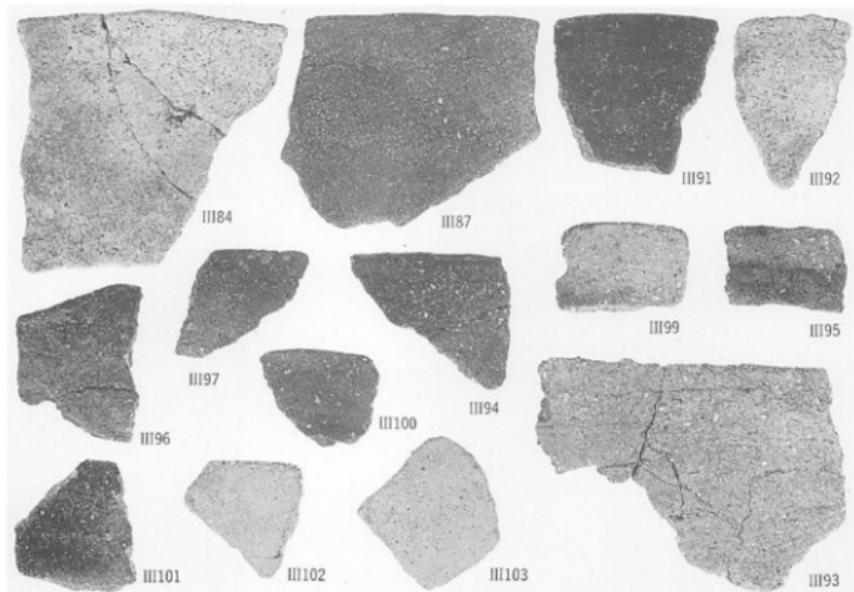
1 粗製深鉢 I d 類 (III63・III66～III72), 粗製深鉢 II 類 (III73～III76), 粗製深鉢 III 類 (III78・III79)



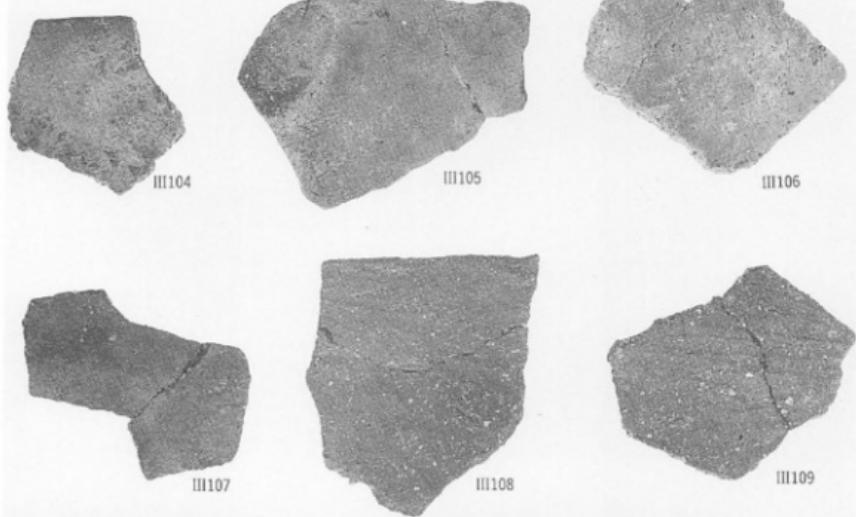
2 粗製深鉢 III 類 (III77・III80～III83)



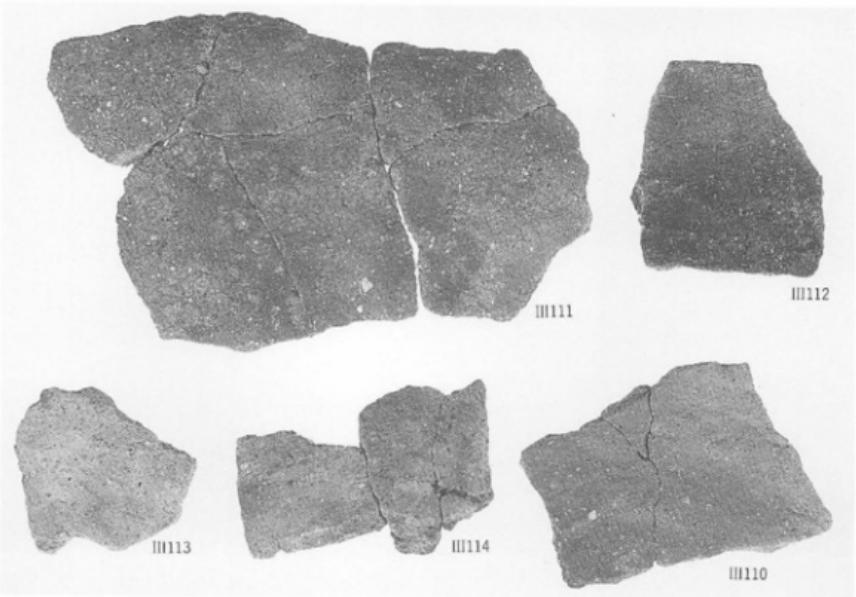
1 粗製深鉢IV類 (III85・III86・III88～III90)



2 粗製深鉢IV類 (III84・III87・III91～III97・III99～103)



1 粗製深鉢IV類 (III104~III107), 粗製深鉢V類 (III108・III109)



2 粗製深鉢V類 (III110~III114)



III130



III128



III129



III133

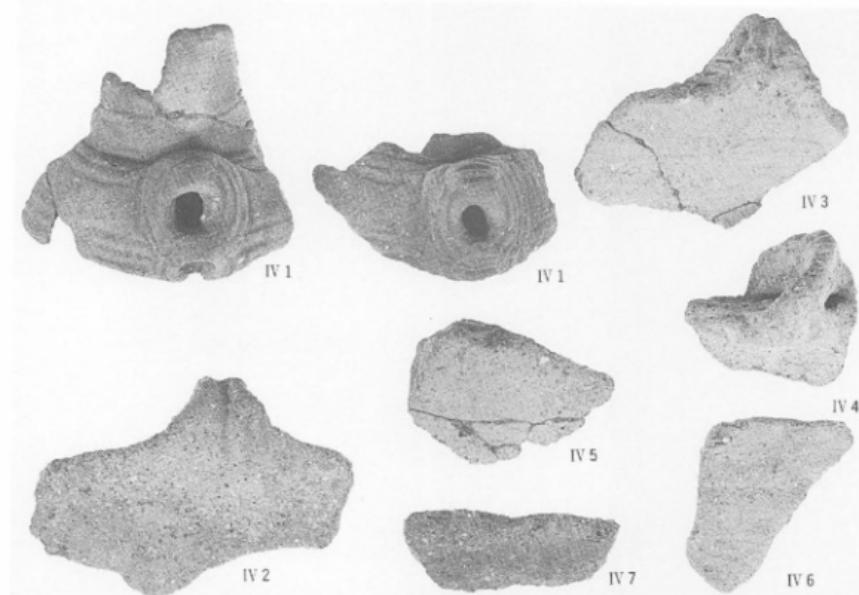


III131

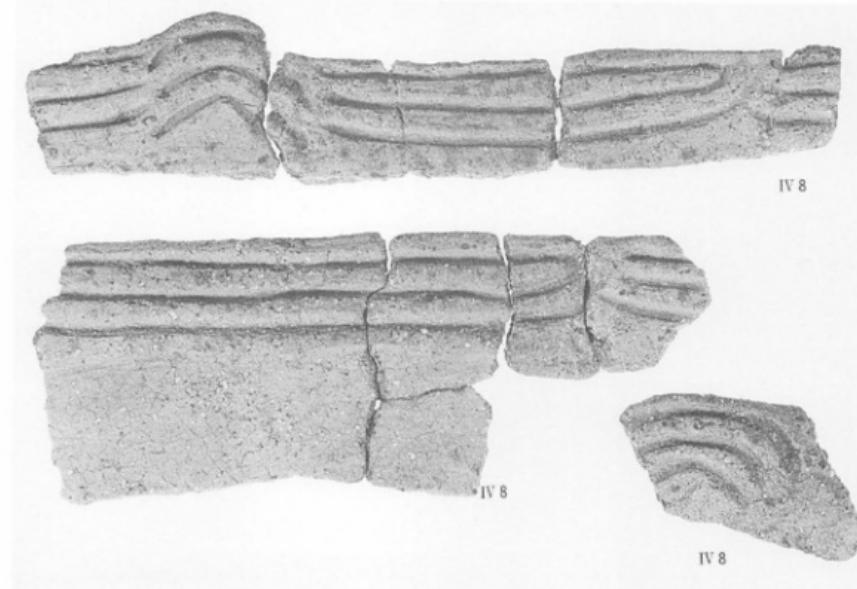


III132

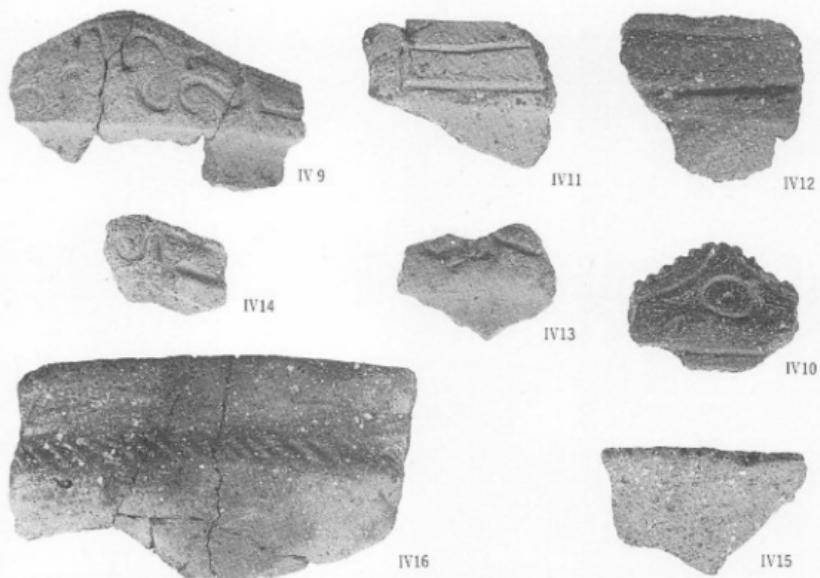
磨製石斧 (III130), 磨石 (III128・III129), 石皿 (III131～III133) 縮尺III131～III133のみ約1/3



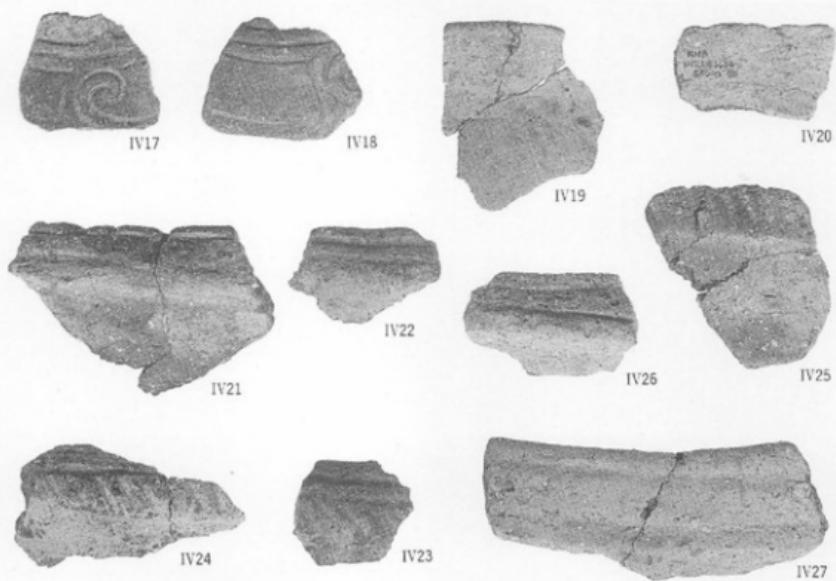
1 1類 (IV 1), 2類 (IV 2~IV 7)



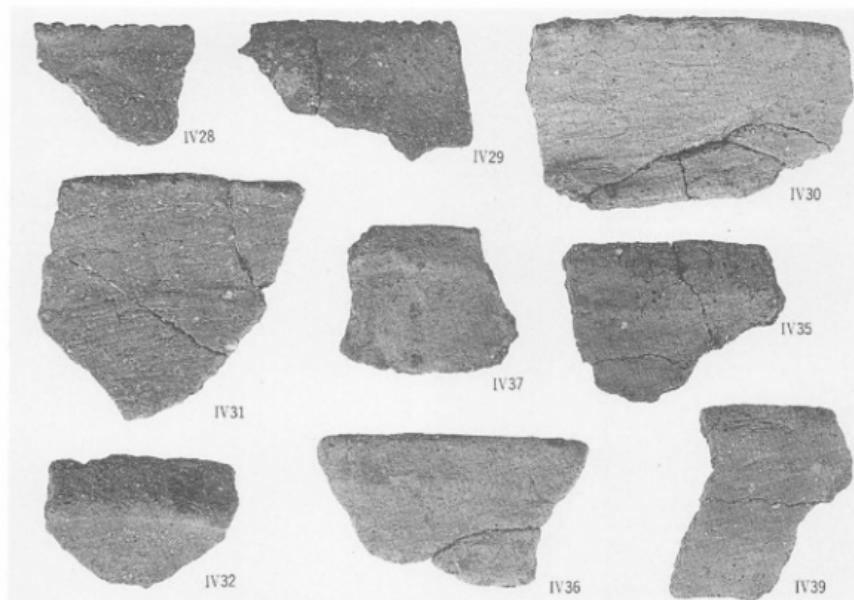
2 3類 (IV 8)



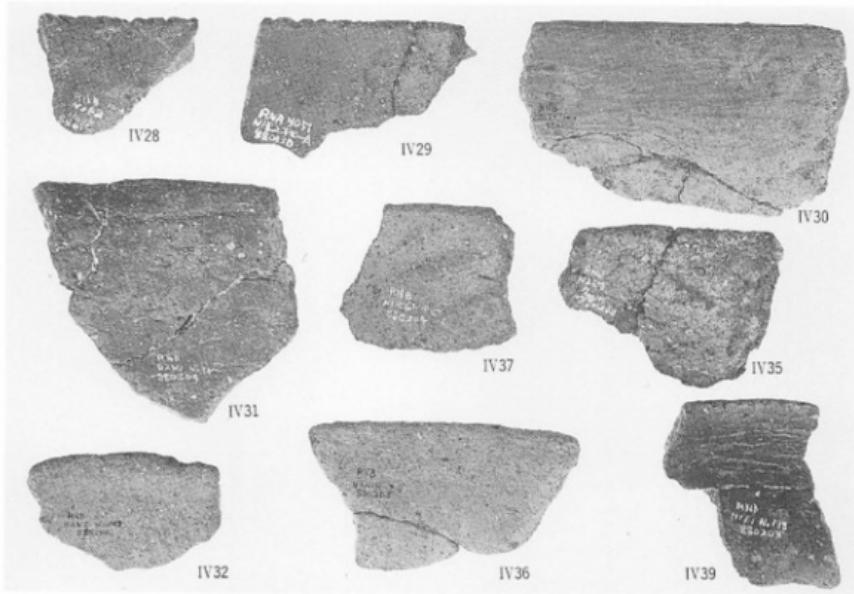
1 3類 (IV9~IV14), 4類 (IV15), 5類 (IV16)



2 6類 (IV17~IV18), 7類 (IV19), 8類 (IV20), 9類 (IV21~IV26), 10類 (IV27)



1 11類 (IV28・IV29), 12類 (IV30・IV31), 13類 (IV32), 14類 (IV35～IV37), 15類 (IV39)



2 11類 (IV28・IV29), 12類 (IV30・IV31), 13類 (IV32), 14類 (IV35～IV37), 15類 (IV39) 内面

1990年3月20日印刷
1990年3月31日発行

文京遺跡第8・9・11次調査

愛媛大学埋蔵文化財調査報告II

編集・発行 愛媛大学法文学部考古学研究室
愛媛大学埋蔵文化財調査室
松山市道後通り10番13号
Tel (0899) 24-7111㈹

印刷(青葉図書)
松山市小栗町6丁目3-23